

松江市文化財調査報告書 第201集

(仮称)アーケタウン大庭造成工事に伴う発掘調査報告書

大庭小原遺跡Ⅱ

令和3(2021)年8月

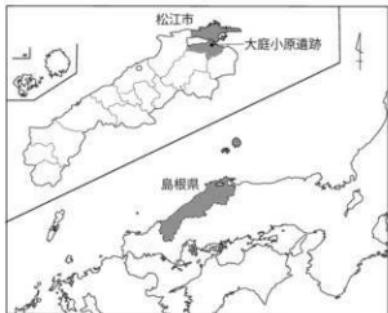
島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

卷之三

三

(仮称)アーケタウン大庭造成工事に伴う発掘調査報告書

大庭小原遺跡Ⅱ



令和3(2021)年8月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　　言

- 本書は、令和2年度に実施した(仮称)アーツタウン大庭造成工事に伴う大庭小原遺跡の発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、株式会社ラインズアークから松江市が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。本報告書は、松江市の指示のもとに公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が作成した。
- 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

名 称 大庭小原遺跡
所在地 島根県松江市大庭町 小原 1102-2 外

- 現地調査の期間及び報告書作成期間

(現地調査) 令和2年11月6日～令和3年3月8日
(報告書作成) 令和3年4月1日～令和3年7月31日

- 開発面積及び調査面積

開発面積 6,762.35m²
調査面積 1,562.3m²

- 調査組織

依頼者	株式会社ラインズアーク	代表取締役	山田 登
主体者	松江市	市長	松浦 正敬(～令和3年4月23日)
		"	上定 昭仁(令和3年4月24日～)

【令和2(2020)年度】現地調査

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	須山 敏之	
	"	次長	松尾 純一	
	"	"	稲田 信	
	まちづくり文化財課	課長	飯塚 康行	
	"	埋蔵文化財調査室	室長	尾添 和人
	"	文化財総合コーディネーター	丹羽野 裕	
	"	調査係係長	川上 昭一	
	"	" 主任	徳永 隆	
	"	"嘱託	門脇 誠也	
調査指導	島根県教育庁 文化財課	文化財保護主任	稲田 陽介	
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野 芳伸	
	埋蔵文化財課	課長	宮本 英樹	
	" 調査係係長	小山 泰生		
	" 主任	江川 幸子(担当者)		
	"嘱託	北島 和子(補助員)		

【令和3(2021)年度】報告書作成業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	須山 敏之(～5月31日)
"	"	部長	松尾 純一(6月1日～)
"	"	次長	松尾 純一(～5月31日)
"	"	次長	井上 雅雄(6月1日～)
"	まちづくり文化財課	課長	尾添 和人
"	"	埋蔵文化財調査室	室長 川上 昭一
"	"	文化財総合コーディネーター	丹羽野 裕
"	"	調査係	係長 川西 学
"	"	調査係	幹 古藤 博昭
"	"	調査係	嘱託 門脇 誠也
実施者	公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團	理事長	星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課長	宮本 英樹
"	調査係	係長	小山 泰生
"	調査係	主任	江川 幸子(担当者)
"	調査係	嘱託	北島 和子(補助員)
"	調査係	嘱託	徳永 桃代
			(4月1日～4月30日)
"	"	嘱託	建神結香子
			(4月1日～4月30日)

7. 現地調査の作業には以下のものが携わった。

安達和幸、金坂 昇、千原 昌、宅和正雄、土江伸明、豊島恭二、長岡雅治、野津健一
8. 本書に記載した遺物の洗浄、復元、実測、浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。

塙田陽子、木村由希江(～4月30日)、坂本玲子(～4月30日)
9. 現地調査及び本書の作成にあたっては、以下の方々から多大なご協力とご指導を頂いた。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

島根県古代文化センター 角田徳幸(センター長)、東森 晋(専門研究員)、岩本真実(特任研究員)
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 中川 寧(高速道路調査推進スタッフ主幹)、真木大空(主任主事)
10. 本書の執筆は、第1章を松江市埋蔵文化財調査室が、第2章を徳永と江川、第3・4章を江川が執筆した。編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川が行った。
11. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
12. 本書における遺構ほかの記号は以下のとおりである。

SI: 積穴建物 SB: 掘立柱建物 SA: 柱列 SK: 土坑 SD: 溝 SP: ピット

SE: 井戸 SX: 性格不明遺構

13. 本書で掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は、土器の場合は原則 1/3、石製品の場合は 1/2 または 1/3 とし、断面は須恵器を黒色、その他を白ヌキで表現している。
14. 訳と引用・参考文献は各章末に記した。
15. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市で保管している。
16. 土器編年については以下の書物を参考にした。
- 『弥生土器』 松本岩雄 1992「出雲・隱岐地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年山陽・山陰編』(本文中では松本編年と記す)
- 『須恵器』 古墳時代：大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第 11 集』島根考古学会 (本文中では大谷編年と記す)
- 古代：島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡 9- 総括編』(本文中では国府編年と記す)
- 『土師器』 鹿島町教育委員会 1992『講武地図県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』(本文中では草田編年と記す)
- 松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第 17 集 島根考古学会 (本文中では松山編年と記す)

17. 年代根拠については、本書 57 頁の第 61 図で示している。

18. 本書で使用する遺構番号は現地調査時の遺構番号及び名称を下記のとおり変更しており、平成 26 年(2014 年)10 月刊行の『大庭小原遺跡』(松江市教育委員会・(公財)スポーツ・文化振興財團 2014)で用いた遺構番号から連番で付している。

遺構名新旧対照表

遺構名(新)	遺構名(旧)	遺構名(新)	遺構名(旧)	遺構名(新)	遺構名(旧)	遺構名(新)	遺構名(旧)	遺構名(新)	遺構名(旧)	遺構名(新)	遺構名(旧)
SI02	SI904	SD06	SD908	SA01-SP02	SP567	SP71	SP534	SP84	SP674	SP97	SP876
SI03	SI905	SD07	SD908	SA01-SP03	SP546	SP72	SP531	SP85	SP688	SP98	SP881
SI04	SI901	SD08	SD442	SA02-SP01	SP569	SP73	SP540	SP86	SP738	SX01	SX906
SI05	SI902	SD09	SD448	SA02-SP02	SP580	SP74	SP539	SP87	SP755	SX02	SX907
SA01	SA909	SD10	SD690	SA02-SP03	SP562	SP75	SP538	SP88	SP764	SX03	SX903
SA02	SA910	SD11	SD828	SA02-SP04	SP550	SP76	SP542	SP89	SP765	SX04	SX910
SA03	SA911	SD4-SP01	SP502	SA03-SP01	SP729	SP77	SP28	SP90	SP769	SX05	SX912
SK56	SK290	SD4-SP02	SP500	SA03-SP02	SP735	SP78	SP33	SP91	SP782	SX06	SX878
SK57	SK372	SD4-SP03	SP517	SK04-SP01	SP846	SP79	SP39	SP92	SP786		
SK58	SK389	SD5-SP01	SP503	SK04-SP02	SP847	SP80	SP86	SP93	SP789		
SK59	SK678	SD5-SP02	SP504	SR68	SP488	SP81	SP289	SP94	SP783		
SK60	SK801	SI05-SP03	SP505	SR69	SP594	SP82	SP323	SP95	SP830		
SK61	SK705	SA01-SP01	SP577	SP70	SP554	SP83	SP899	SP96	SK723		

目 次

例言

第 1 章 調査に至る経緯と経過.....	1
第 1 節 調査に至る経緯.....	1

第 2 章 位置と環境.....	3
第 1 節 地理的環境.....	3
第 2 節 歴史的環境.....	3

第 3 章 調査の成果.....	6
第 1 節 調査の方法.....	6
第 2 節 調査の概要.....	6
第 3 節 基本層序.....	7
第 4 節 A 区.....	11
第 5 節 B 区.....	21
第 6 節 C 区.....	36
第 7 節 D 区.....	50

第 4 章 総括.....	55
---------------	----

遺物観察表.....	61
------------	----

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	大庭小原遺跡の開発範囲と本調査範囲	2
第 2 図	大庭小原遺跡と周辺の遺跡	4
第 3 図	グリッド配置図	8
第 4 図	調査前コンタと調査成果図	9
第 5 図	B 区 A - A'、B - B' 土層断面図	10
第 6 図	A 区平面図	11
第 7 図	A 区土層図	12
第 8 図	SI02 平面図・断面図	13
第 9 図	SI02 出土遺物実測図	13
第 10 図	SI03 平面図・断面図	14
第 11 図	SI03 出土遺物実測図	14
第 12 図	SA01、SA02 平面図・断面図	15
第 13 図	SD06、SD07 平面図・断面図	16
第 14 図	その他の遺構の平面図・断面図	17
第 15 図	SX01 平面図・断面図	18
第 16 図	SX02 平面図・断面図	18
第 17 図	SX02 出土遺物実測図	19
第 18 図	その他の遺構に伴う遺物実測図	20
第 19 図	遺構外出土遺物実測図	20
第 20 図	B 区平面図	22
第 21 図	B 区土層図	23
第 22 図	SI04 平面図・断面図	24
第 23 図	SI04 出土遺物実測図	25
第 24 図	SI05 平面図・断面図	26
第 25 図	SI05 出土遺物実測図 (1)	27
第 26 図	SI05 出土遺物実測図 (2)	28
第 27 図	SK56 平面図・断面図	29
第 28 図	SK56 出土遺物実測図	29
第 29 図	SK57 平面図・断面図	30
第 30 図	SK57 出土遺物実測図	30
第 31 図	SK58 平面図・断面図・出土遺物実測図	31
第 32 図	SD08 平面図・断面図	31
第 33 図	SD09 平面図・断面図	32
第 34 図	SX03 平面図・断面図・出土遺物実測図	32
第 35 図	その他の遺構内出土遺物実測図	33
第 36 図	遺構外出土遺物実測図 (1)	34
第 37 図	遺構外出土遺物実測図 (2)	35
第 38 図	C 区平面図	36
第 39 図	C 区土層図	37
第 40 図	SA03 平面図・断面図と SP02 出土遺物実測図	38
第 41 図	SK59 平面図・断面図	38
第 42 図	SK59 出土遺物実測図	39
第 43 図	SK60 平面図・断面図・出土遺物実測図	40
第 44 図	SK61 平面図・断面図・出土遺物実測図	40
第 45 図	SD10 平面図・断面図	42
第 46 図	SD10 出土遺物実測図	42
第 47 図	SD11 平面図・断面図・出土遺物実測図	43
第 48 図	SX04 平面図・断面図	43
第 49 図	SX05 平面図・断面図	44
第 50 図	SX05 出土遺物実測図	44
第 51 図	その他の遺構に伴う遺物実測図	46
第 52 図	遺構外出土遺物実測図 (1)	47
第 53 図	遺構外出土遺物実測図 (2)	48
第 54 図	遺構外出土遺物実測図 (3)	49
第 55 図	遺構に伴う遺物実測図	50
第 56 図	D 区平面図	51
第 57 図	D 区土層図 (1)	52

第 58 図	D 区土層図 (2)	53
第 59 図	遺構出土遺物実測図	54
第 60 図	大庭小原遺跡と周辺の遺跡の位置図	56
第 61 図	大庭小原遺跡が立地する丘陵の遺構、遺物の消長	57
第 62 図	大庭小原遺跡と砂口遺跡の遺構配置図 (1)	58
第 63 図	大庭小原遺跡と砂口遺跡の遺構配置図 (2)	59

挿表目次

第 1 表	遺物観察表	61
-------	-------------	----

本文中写真目次

写 真 1	大庭小原遺跡空中写真 (1947 年)	1
写 真 2	大庭小原遺跡と周辺の地形 (1947 年空中写真)	3
写 真 3	遺物検出風景 (A 区 SI02)	6
写 真 4	島根県担当者による調査指導風景	6

写真図版目次

図版 1 1	調査前遠景 (東から)
図版 1 2	調査前近景 (東から)
図版 2 1	A 区完掘状況 (南西から)
図版 2 2	B 区完掘状況 (西から)
図版 3 1	B 区完掘状況 (南西から)
図版 3 2	B 区完掘状況 (東から)
図版 3 3	D 区完掘状況 (西から)
図版 4	C 区完掘状況 (北から)
図版 5	C 区完掘状況 (南から)
図版 6 1	D 区 (B-B' の南端、北から)
図版 6 2	D 区 (B-B' の中央、北から)
図版 6 3	D 区 (B-B' の北端、北から)
図版 6 4	D 区 (C-C、北から)
図版 6 5	D 区 (D-D'、北から)
図版 6 6	D 区 (E-A'、北から)
図版 7 1	SI02 遺物出土状況 (北西から)
図版 7 2	SI03 遺物出土状況 (西から)
図版 7 3	SX01 完掘状況 (東から)
図版 7 4	SX02 遺物出土状況 (南から)
図版 7 5	SD06・SD07 完掘状況 (東から)
図版 8 1	SI04 と SI05 と周辺の完掘状況 (東から)
図版 8 2	SI04 完掘状況 (東から)
図版 9 1	SI05 完掘状況 (東から)
図版 9 2	SK56 完掘状況 (東から)
図版 10 1	SK59 完掘状況 (南東から)
図版 10 2	SK59 遺物出土状況 (南から)
図版 10 3	SK60 遺物出土状況 (南から)
図版 10 4	SD10 完掘状況 (南から)
図版 11 1	SX04 完掘状況 (東から)
図版 11 2	SAO3 検出状況 (南東から)
図版 11 3	SD11 遺物出土状況 (西から)
図版 11 4	SX05 遺物出土状況 (西から)
図版 11 5	C 区 B-B' 土層 (南東から)
図版 12	遺物写真①
図版 13	遺物写真②
図版 14	遺物写真③
図版 15	遺物写真④
図版 16	遺物写真⑤

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

令和元年9月、松江市に大庭町地内における約6762.35m²の宅地造成計画に伴う埋蔵文化財の有無にかかる調査依頼書が、株式会社ラインズアークから提出された。当該計画地は一部周知の「B16遺跡」を含んでおり、また、この範囲以外についても遺跡が広がる可能性が高いことから、同年10・11月に遺跡の範囲と内容を把握するためトレンチ9本を設定して(第1図)試掘調査を実施した。結果、事業予定地のほぼ全域において遺構・遺物を検出し、遺跡の範囲変更手続きを行うこととなった。ただし、当該事業予定地を含む低丘陵一帯には、「B16遺跡」以外にも、「大庭小原遺跡」「B14遺跡」「B15遺跡」が存在しており、すでに平成26年に発掘調査を実施した「大庭小原遺跡」や今回の試掘調査等の様子から、これらの遺跡はほぼ同一内容の遺跡であると推察されたことから、令和2年9月にこれらの遺跡を「大庭小原遺跡」に名称を統一して、低丘陵の北端部を一括して遺跡の範囲として取り扱う手続きを実施したものである(写真1、2・第1、2図)。

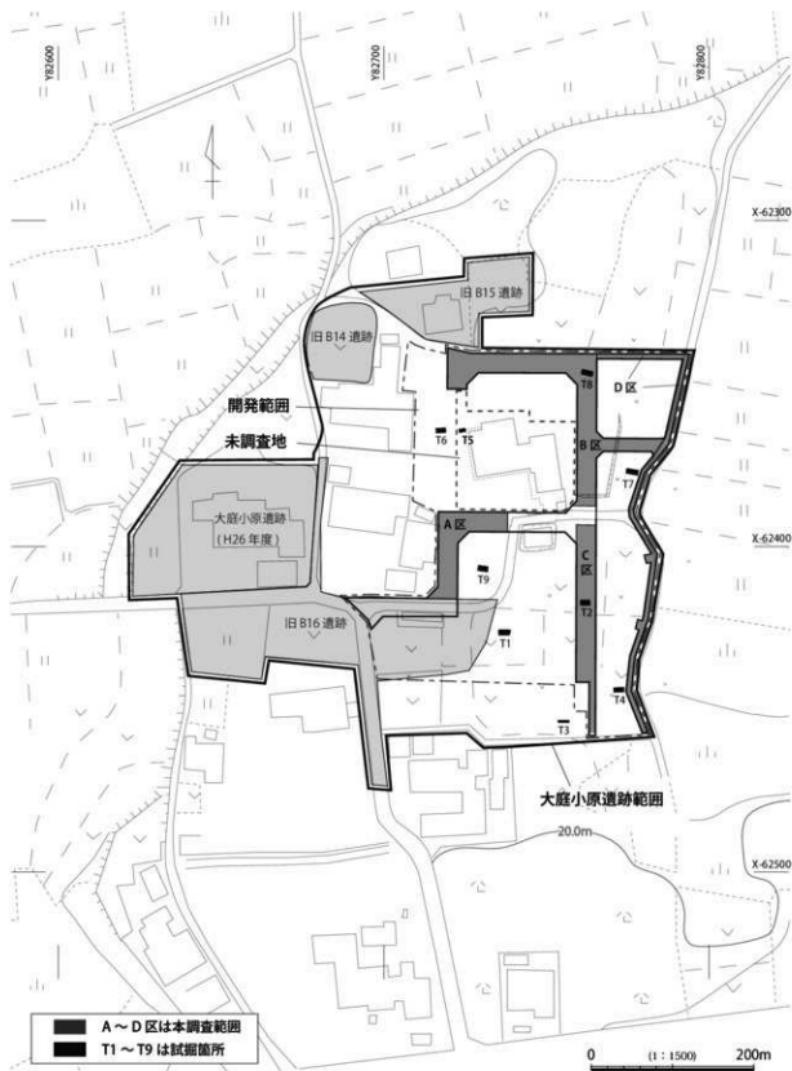
その後、令和2年10月に具体的な宅地造成計画を付して事業者から発掘の届出が提出されたことから、この内容について県教育委員会に進達・協議したところ、道路新設範囲及び擁壁設置箇所について、発掘調査の指示を受けることとなった。



写真1 大庭小原遺跡空中写真(1947年)

<http://maps.gsi.go.jp/mapInfoSearch.do?specificationId=1185043>

以上の経緯から、当遺跡について、令和2年10月から当該範囲の本発掘調査を実施するに至ったものである。なお、第1図 A～C 区が道路新設範囲、D 区が擁壁設置範囲に関わる調査範囲である。



第1図 大庭小原遺跡の開発範囲と本調査範囲

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大庭小原遺跡は松江市街地の南郊、大庭町小原に位置している（写真2、第2図）。

南の山間部から流れる馬橋川の本支流が作り出した谷底平野に向けて張り出した砂礫台地の北端にあたる。この台地は「大庭段丘」と呼ばれ、本遺跡は台地の北端部に立地する。遺跡の標高は16.0～18.5mを測り、小高い台地状の地形は現在宅地や畠地として利用され、谷部は水田として利用されている。

この砂礫台地状にはこれまでの調査で遺跡が多く存在することが分かっているが、それらは台地の東側に密集する傾向にある（第2図）。また、北側の谷底平野は試掘調査を行っているものの遺跡数は稀薄である。

第2節 歴史的環境

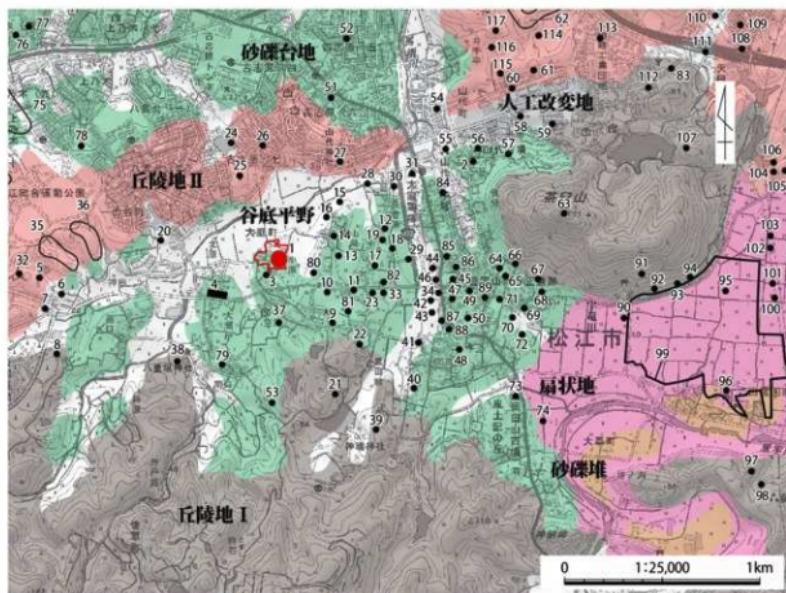
大庭小原遺跡（I）の周辺遺跡について、時代ごとに概略を述べていく（第2図）。

旧石器時代 旧石器時代の遺構は確認されていないが、下黒田遺跡（47）で玉髓製石核と剥片、市場



<https://maps.gsi.go.jp/maplibSearchdo/specificationId=1185060>

写真2 大庭小原遺跡と周囲の地形（1947年空中写真）



1 大庭小原遺跡 (本報告の調査地)	31 大庭駒塚古墳	60 来美南遺跡	89 山代大畠遺跡
2 山代原古墳	32 勝負谷遺跡	61 山代郷北新造跡	90 大坪遺跡
3 砂口遺跡	33 東源寺古墳	(来美鹿寺跡)	91 大谷横穴群
4 大庭北原遺跡	34 大庭桔松遺跡	62 南外古墳群	92 真奈井遺跡
5 推松遺跡	35 渋ヶ谷遺跡群	63 茶白山城跡	93 聖岩遺跡
6 深田遺跡	37 空原遺跡	64 山代冲田遺跡	94 大谷遺跡
7 勝負谷古墳群	38 鎮池遺跡	65 光泉寺遺跡	95 稲口玉作跡
8 小倉見谷横穴群	39 大石古墳群	66 市場遺跡	96 大草玉作遺跡
9 大庭祖田遺跡	40 出雲国造跡	67 内堀石塔群	97 西百塚山古墳群
10 大庭小学校校庭遺跡	41 神魂神社参道遺跡	68 山代郷南新造跡	98 東百塚山古墳群
11 B3遺跡	42 川原宮遺跡	69 真の前遺跡	99 出雲国府跡
12 B8遺跡	43 川原宮II遺跡	70 小無田遺跡	(下層) をむ
13 B9遺跡	44 大庭原ノ前遺跡	71 小無田II遺跡	100 神田玉作跡
14 B10遺跡	45 出雲国山代郷正倉跡	72 团原古墳	101 四田田遺跡
15 B11遺跡	46 出雲国山代郷正倉跡 (平成4年度調査区)	73 同山古墳群	102 向小畠遺跡
16 B12遺跡	47 下黒田遺跡	74 岩屋後古墳	103 上小畠遺跡
17 B18遺跡	48 黒田畦遺跡	75 長砂古墳群	104 上竹矢遺跡
18 B2遺跡	49 黒田鎌遺跡	76 長垣遺跡	105 上竹矢古墳
19 B28遺跡	50 団原遺跡	77 長辻II遺跡	106 上竹矢古墳群
20 神田II遺跡	51 山代神社前遺跡	78 矢の原II遺跡	107 通田古墳群
21 大石横穴群	52 碓杵場I遺跡	79 佐草井頭遺跡	108 平所II遺跡
22 秋上家古墳群	53 荒神谷・後谷古墳群	80 鶴田遺跡	109 井ノ奥古墳群
23 外敷遺跡	54 井出平山古墳群	81 大庭前田遺跡	110 間内越墳墓群
24 香ノ木池遺跡	55 山代二子塚古墳	82 土地田遺跡	111 平所遺跡
25 向山西遺跡	56 山代方墳	83 寺山小田遺跡	112 十王免横穴群
26 向山西古墳群	57 山代原古墳	84 山代館治屋遺跡	113 来美墳墓
27 向山1号墳	58 狐谷道跡	85 長者原遺跡	114 奥守田瀬遺跡
28 下ノ原遺跡	59 狐谷横穴群	86 山代郷正倉防北遺跡	115 来美西道路
29 柳堀遺跡		87 川原宮III遺跡	116 岩井手谷遺跡
30 茶臼遺跡		88 下黒田II遺跡	117 猿岡古墳群

第2図 大庭小原遺跡と周辺の遺跡

*島根県 1973「松江」『5万分の1都道府県土地分類基本調査(地形分類図)』を改変

遺跡(66)で黒曜石製細石核、山代郷北新造院跡(61)で玉髓製ナイフ形石器が出土している。

縄文時代 南外古墳群(62)の3号墳周辺で粗製土器の破片が出土しているが、遺構は確認されていない。向山西遺跡(25)や大庭北原遺跡(4)、長廻遺跡(76)などで落し穴が検出されている。

弥生時代 遺跡地図のさらに西の丘陵上に三重の環壕を備える田和山遺跡(地図外)が前期末葉～中期後葉の遺跡として著名であり、意宇平野の下流域にある布田遺跡(地図外)でもほぼ同時期の遺物が多量に出土し、大坪遺跡(90)では中期の竪穴建物跡が1棟見つかっている。周辺の遺跡としては大庭北原遺跡(4)、外屋敷遺跡(23)、砂口遺跡(3)がある。後期の集落跡としては向山西遺跡(25)や、玉作工房の竪穴建物跡3棟が検出された平所遺跡(111)があり、意宇平野の上小紋遺跡(103)では水田関連遺構として棚田耕作の一端が明らかにされている(松江市史編集委員会2012)。墓は四隅突出型埴丘墓の来美墳墓(113)、間内越墳墓群(110)1号墓がある。

古墳時代 前期初頭の規模が大きい古墳は東接する安来市を中心に分布しているが、前期末葉には出雲地域で初めての前方後円墳、全長58mの廻田古墳群(107)1号墳が築造される。中期には出雲国府跡(下層)(99)で集落内が溝で区画されて竪穴建物跡が整然と並ぶような中核的な集落が出現し、寺山小田遺跡(83)でも竪穴建物跡が検出されている。この時期には長砂古墳群(75)のほか、西百塚山古墳群(97)、東百塚山古墳群(98)といった群集墳も造られている。後期は、茶臼山の西側に大庭鶴塚古墳(31)、山代二子塚古墳(55)、山代方墳(56)といった大型の方墳や前方後方墳、山代原古墳(57)や向山1号墳(27)など大型で精緻な造りの石棺式石室を持つ古墳が造営されている。これらは山代・大庭古墳群と称され、後の出雲臣一族の墓と考えられている。また、若干離れた場所に位置する東淵寺古墳(33)は大型の前方後円墳と想定されている。このほか、後期後半から丘陵斜面に横穴墓が造られるようになり、狐谷横穴群(59)や十王免横穴群(112)が知られている。

古代(奈良・平安時代) 本遺跡周辺では、意宇平野に国府(99)が設置されたことにより、これに関連する遺跡が多く確認されている。規格的に配置された総柱建物群跡と大量の炭化米を検出した出雲国山代郷正倉跡(45, 46)、大溝と総柱建物跡や大型の掘立柱建物跡を検出した下黒田遺跡(47)などである。寺院跡も見つかっており、山代郷北新造院跡(61)、山代郷南新造院跡(68)がある。また、小無田II遺跡(71)では山代郷南新造院に瓦を供給していたとされる瓦窯跡が検出されている。この他、搭松遺跡(5)では道路状遺構が検出されており、古代山陰道(正西道)との関連性が注目されている。

中世以降 出雲国山代郷正倉跡(46)で13～14世紀の掘立柱建物跡が検出され、その北西でも同様に溝で区画された掘立柱建物跡を検出した大庭原ノ前遺跡(44)が位置している。ここでは15世紀前半～中頃と16世紀中頃～17世紀前半までの建物跡が確認された。また、黒田畠遺跡(48)では12～16世紀末頃にかけて存続した豪族の館の一部と考えられる掘立柱建物跡や溝が検出され、黒田館跡(49)では15世紀後半～16世紀にかけての豪族の館跡とみられる掘立柱建物跡や溝が検出されている。山城としては茶臼山城跡(63)が知られる。

【第2章 参考文献】

島根県教育委員会2003『増補改訂 島根県遺跡地図I(出雲・隠岐編)』

松江市史編集委員会2012『松江市史』史料編2 考古資料 他

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区は4ヶ所に分かれるためA～D区と呼称し、5m間隔のグリッドを設定した(第3、4図)。

A～C区は、0.25m³バックホーを使用して、表土と二次的な包含層までを除去した後、人力による丁寧な掘削を行った。遺構の精査にあたっては湧水処理のため必要に応じて水切り溝を設けている。ピットは段掘りを行い、遺構掘削は半蔵または畦を残して土層観察をした後に全掘を行っている。基本的には調査区単位で遺構の検出を行い、全景写真を撮影した。

D区は擁壁埋設予定場所であるため、掘削深は擁壁深と同じ地表面下70cm迄にとどめ、地山は未検出であるが、遺構を検出した場合には全ての遺構について掘り下げて調査を行っている。なお、D2区は交通量の多い未舗装道路に隣接しており危険であるため、0.25m³バックホー及び人力による掘削、測量、写真撮影、埋め戻しまでの一連の工程が1日(朝～夕方)で完結できる範囲を定め、この工程を6日間繰り返して調査を行った。

第2節 調査の概要

掘削前の準備として、令和2年10月13日～16日に生垣や果樹などの伐開、撤去作業を業者に委託して実施し、調査区と廃土置場を整えた。その後に調査前の地形測量図を作成し、現地で調査区の縄張りを行った。掘削は令和2年11月6日に開始した(写真3)。調査の順序はB区→D区北端部→A区→C区→残りのD区で、延べ61日間の現地作業を行い、令和3年3月8日に現地調査を終了した。なお、調査中は島根県文化財課の指導を受けた(写真4)。

以下で調査区ごとに調査成果の概要を記す(第4図)。

A区(第6、17図) 開発範囲西側に設定した調査区で面積は263.8m²である。現代の搅乱が著しい状況であったが、古墳時代前期の竪穴建物跡1棟(SI02)、古墳時代後期の竪穴建物跡1棟(SI03)、柱列2本(SA01、SA02)、大溝1本(SD06)、建物跡が復元できない断面に柱痕が残るピットや、埋土の縮まったピット(SP71～SP76)、性格不明の落ち込み2ヶ所(SX01、SX02)を検出した。遺物は弥生時代中期～古代の遺物が少量出土した。



写真3 遺物検出風景 (A区 SI02)



写真4 島根県担当者による調査指導風景

B区(第21図) 開発範囲北側に設定した調査区で、面積は657.7m²である。調査区北側では、暗渠など現代の痕跡が目立ち、明確に近世以前と考えられる遺構は検出されなかった。遺物の出土量は少なく、耕作の影響を受けて小片化したものばかりであったが、グリッドK6～K10では、弥生時代中期の袋状貯蔵穴2基(SK57、SK58)や、古墳時代中～後期の竪穴建物跡2棟(SI03、SI04)、溝状遺構2本(SD07、SD08)、性格不明の遺構(SX04)のほか多くのピットが検出された。ピットの中には平面プランが楕円形をした近世と思われるものがみられたが、建物跡を復元することはできなかった。遺物は古墳時代後期以降の土器類が多く出土した他、弥生土器が少量と玉砥石が1点出土した。

また、グリッドM7、N7、O7では、地山面でピットが散見されたが、建物跡は復元できなかった。遺物は主に上層の二次堆積層で出土し、地山直上ではほとんど出土していない。

C区(第39図) 開発範囲南側に設定した調査区で、面積は396.0m²である。奈良時代以降の柱列(SA03)、弥生時代中期の袋状貯蔵穴1基(SK59)と土坑2基(SK60、SK61)を検出した他、古墳時代中期以降の溝2本(SD09、SD10)、性格不明の遺構2基(SX05、SX06)を検出した。遺構の埋土から弥生時代～中世の遺物が出土している。遺物は弥生時代中期の土器の他、古墳時代中期以降の土器の出土量が多く、注目される遺物としては加工痕のあるグリーンタフと管玉の未成品が出土した。

D区(第56図) 開発範囲東側に設定した調査区で、面積は244.8m²である。地山面でピットが散見されたが、B、C区でみられた二次堆積した包含層はみられなかった。遺物の出土量は少なく、すべて傷みが著しい状態であったが、円面鏡の破片が出土している。

第3節 基本層序

調査地は東に下がる緩やかな傾斜地で、標高16.0～18.5mを測る。

基本層序はB区の土層から、南北方向の土層(A-A')と、東西方向の土層(B-B')について説明する。遺構面は基本的に地山面である。

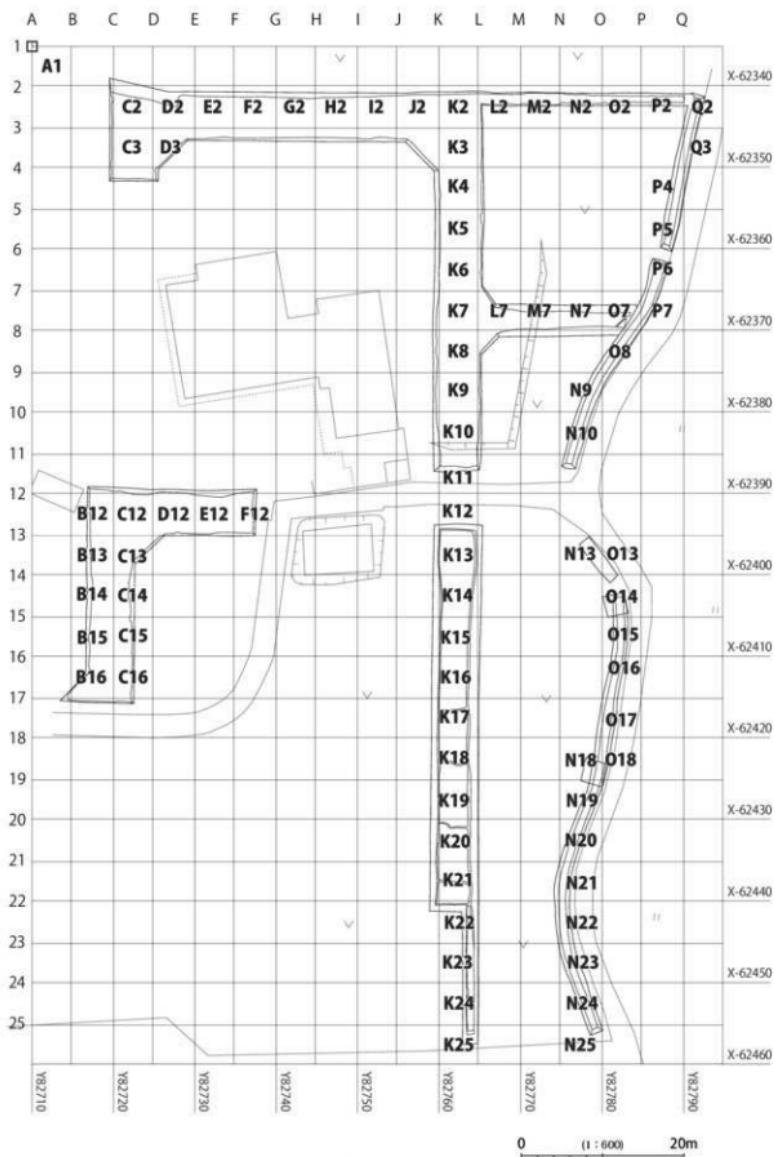
1.南北方向の土層(A-A')(第5図)

土層状況は、上から①客土層(1、2、3層)、②耕作土層(新)(4層)、③耕作土層(旧)(6層)、④地山(14層)に分かれ。②、③層には土器片が含まれているが、その量は少なく、小さな破片が大半で二次的な包含層と理解される。近現代の遺物はほとんど混入していないが、地主の方から「南端の真砂土層(5層)は半世紀近く前の池を埋めた土」と聞いたことから、4層はそれ以降の現代の耕作土である。

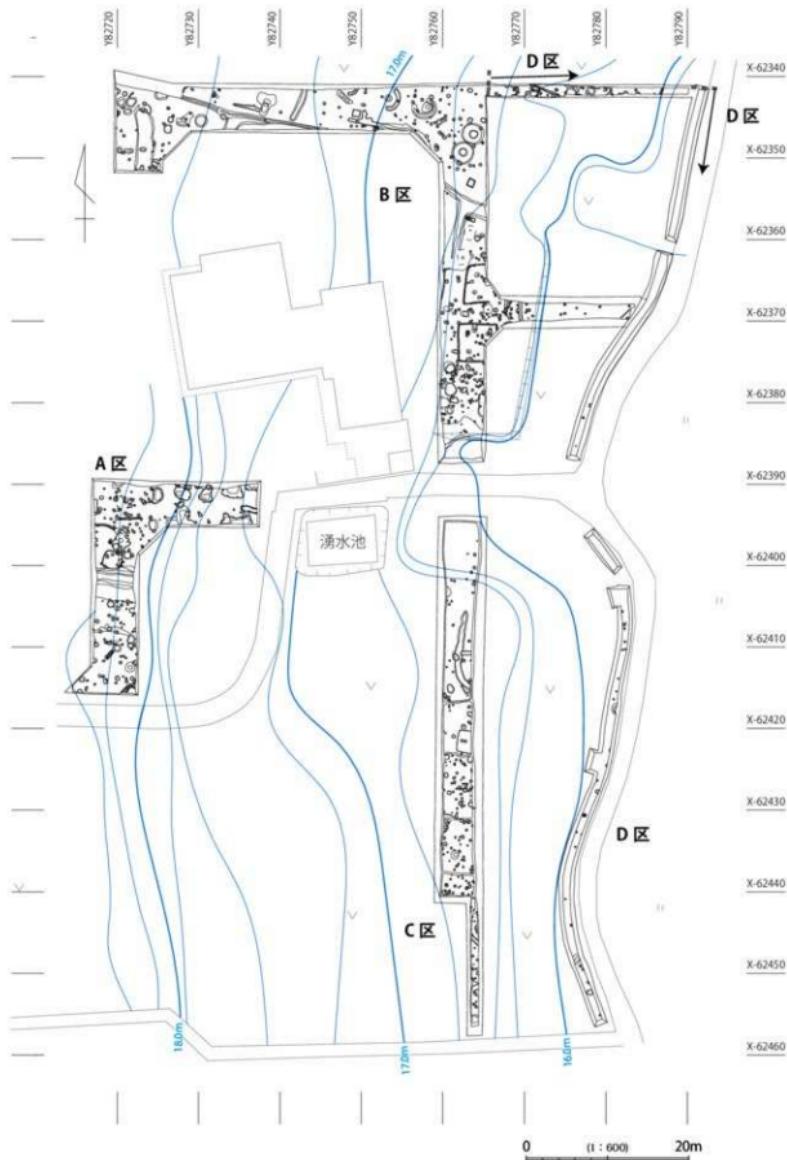
2.東西方向の土層(B-B')(第5図)

緩やかな傾斜地の西側に土を盛ることにより、2段の水平な耕作地が造成されている。

基本層序は、上から①耕作土層(新)(1、2層)、②耕作土(新)の基盤層(3、4層)があり、その下は西側を高くして平坦地を造るために③盛土層(5～7層)がある。その下には盛土造成前の④耕作土層(旧)(8層)があり、その下の斜面下の低いところでは⑤湿地状の自然堆積土層(14～16層)があり、その下が⑥地山(20層)である。①～③層には土器片が含まれているが、その量は少なく、小さな破片が大半で、二次的な包含層と理解される。⑤層からは遺物はほとんど出土していない。



第3図 グリッド配置図



第4図 調査前コンタと調査成果図



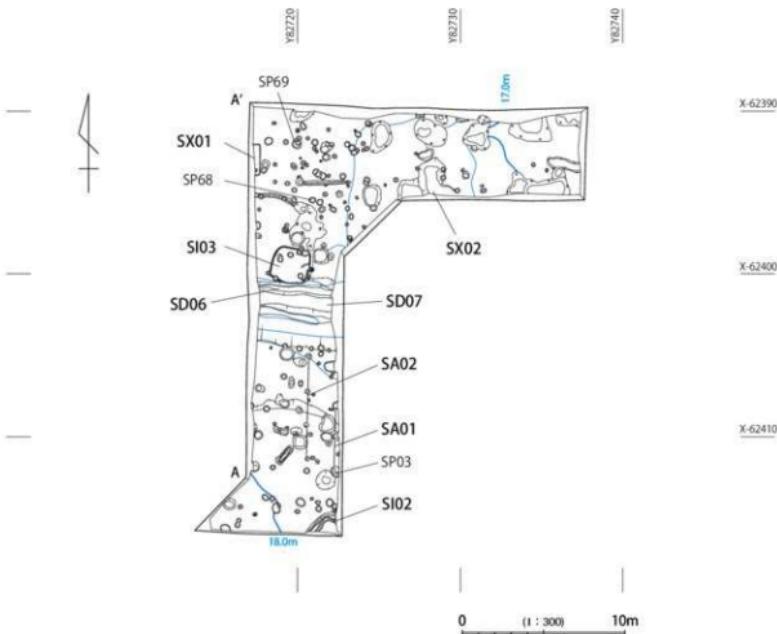
第5図 B区 A-A'、B-B' 土層断面図

第4節 A区

A区は南から張り出す低丘陵の頂部にあたり、今回の調査区の中で最高所に位置している。南北方向と西方向に平坦で、東に向けて緩やかに下がり、東の端は削平されている。地表面から地山まで約30cmと浅く、地山標高は17.0～18.0m前後である。地山面には新旧の落ち込みの混在がみられ、遺構は全て地山面で検出した(第6図)。

土層は上から①表土、②耕作土及び攪乱土、③地山である(第7図)。①表土は客土層(1～4層)で、②耕作土及び攪乱土はプラスチックなど現代の遺物を含む暗褐色土(5、10、12層)や黒褐色土(11層)、暗褐色土に黄褐色土斑混じる土(7層)で、その下が明瞭褐色土(29層)の③地山である。地山面は耕作や攪乱の影響を受け、表面に凹凸の著しいところがみられた。また、淡褐色砂質土(28層)も地山と考えられ、この層からは常に水が染み出していた。東端の南寄の削平を受けた地山(明黄褐色土)からも常に地下水が染み出しており、これらは道路を挟んで東に位置する湧水池などに繋がる地下脈の一部と思われる。

以下では、竪穴建物跡2基、柱列2本、溝2本、建物を構成する可能性が高いピット7基、性格不明遺構2基について詳述する。



第6図 A区平面図

1. 遺構と遺物

S102(第8図)

標高 18.0m の地山面で検出した、竪穴建物跡である。

今回の調査では竪穴建物跡のわずかな範囲を検出しただけで、遺構の大部分は調査区外にあるため平面プランの形状は明瞭でない。a-a'で土層を見ると建て替えの痕跡があり、最初(第1段階)は壁際溝の形状から平面プランが方形であり、建て替え後(第2段階)は方形もしくは隅丸方形で、やや大きめに造り変えが行われていることが分かった。以下で古い順に説明を行う。

①第1段階 標高 17.65m に床面(地山)があり、その面で壁際溝を検出した。

壁際溝の平面プランは隅部がほぼ直角に曲がり、幅 25cm、深さ 8cm を測る。壁際溝の埋土(5層)には若干の炭が混じっていたが、床面及び壁際溝から遺物は出土していない。

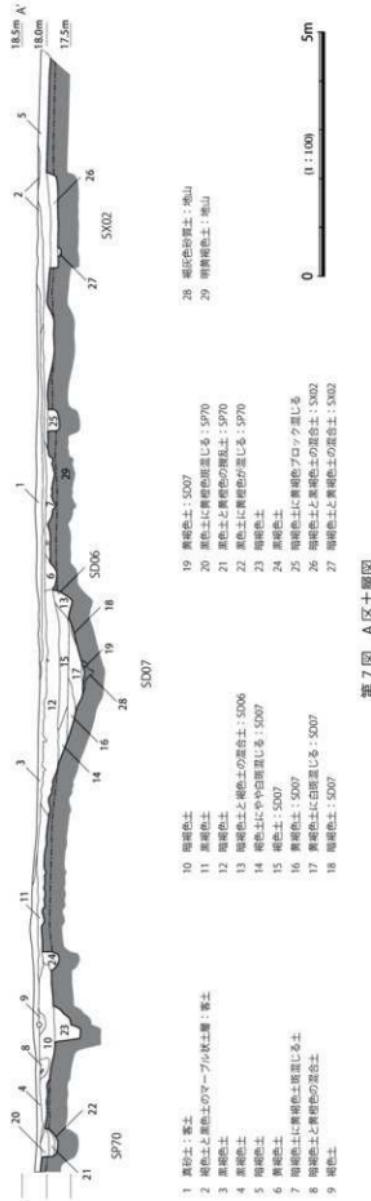
②第2段階 第1段階より若干大きく建て替えが行われたと思われる。第1段階の床面に厚さ 10cm 程度の貼り床(2, 4, 6 層)が設けられ、壁際溝は貼り床の上面から掘られている。

壁際溝の平面プランには緩やかなカーブがあり、隅丸方形の隅部付近のようにみえる。壁際溝は幅 15 ~ 25cm、深さ 12cm を測る。

遺物は床面や壁際溝から土師器の甕の上半分等が出土している。出土遺物から、建て替え後に建物が廃棄された時期は古墳時代前期である。

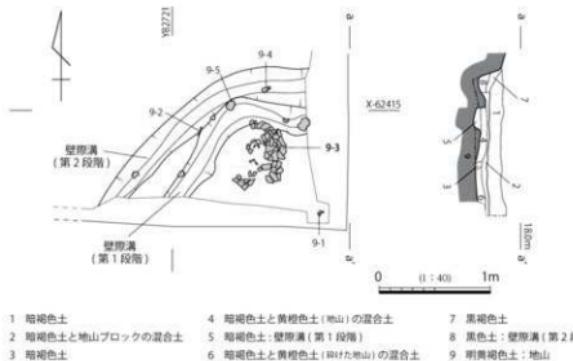
S102 出土遺物(第9図)

1 ~ 4 は土師器である。1 は直口壺の口縁で、内外面とも器面剥離している。2 は甕の口縁端部で、おそらく複合口縁の上部である。内外面とも横ナデが施されている。3 は甕の口縁へ胴部である。複合口縁を持ち、胴部外面は横方向のハケメ、内面は横方向のケズリが施されてい

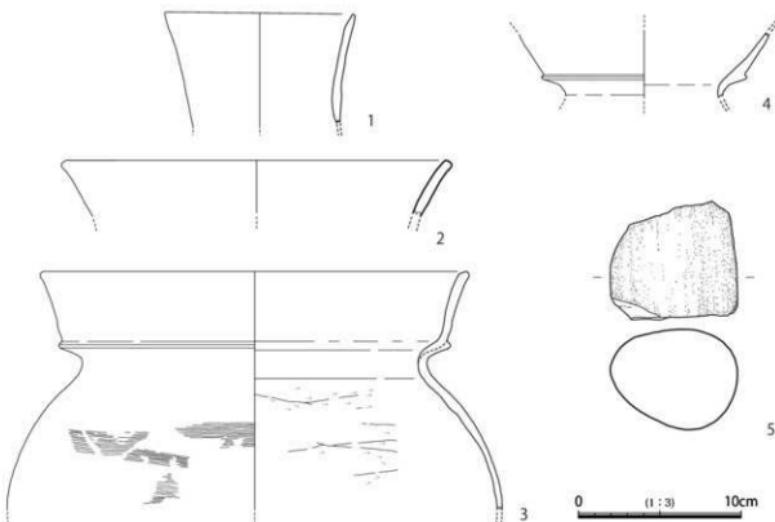


第7図 A区土層図

る。草田6～7期に該当する。4は鼓形器台のくびれ部から上の破片である。内外面とも器面剥離している。5は石製品である。断面は楕円形を呈し、側面はよく磨かれている。石材は不明。石棒の上下を打ち欠いたような形状だが、上下端の割れた面が若干丸味を帯びていることから、この状態でも使用されたと思われる。



第8図 SI02平面図・断面図



第9図 SI02出土遺物実測図

SI03(第10図)

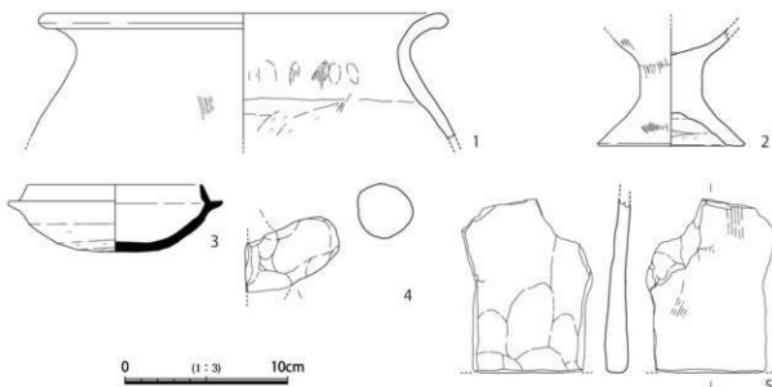
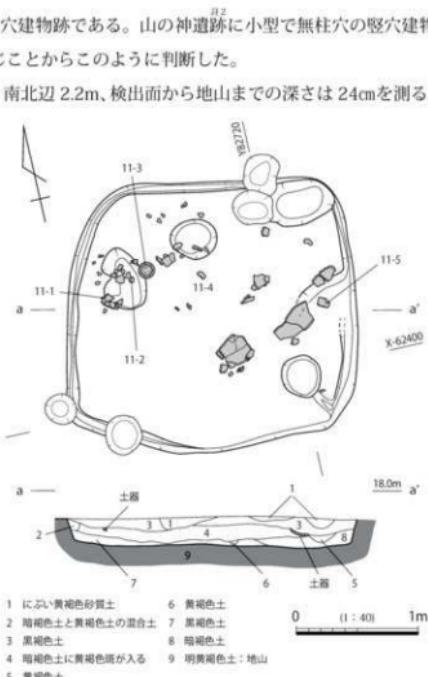
標高 17.5m の地山面で検出した小型の竪穴建物跡である。山の神遺跡に小型で無柱穴の竪穴建物跡の類例があり、出土した土器の時期も同じことからこのように判断した。

平面プランは正方形に近く、東西辺 2.4m、南北辺 2.2m、検出面から地山までの深さは 24cm を測る。地山面は平坦で、焼土やピットはみられない。

a-a' で土層を見ると、平坦な地山の上に黒褐色土(7層)～暗褐色土(8層)、その上に土器片を含む暗褐色土と黄褐色土の混合土(4層)と大きく 2 層に分かれる厚さ 20cm 弱の貼り床が設けられ、地山の壁際に沿って貼り床上面から壁際溝が掘られているが、溝の底は地山面まで到達するものではない。貼り床の上面に焼土や柱穴はみられないが、古墳時代後期の須恵器と土師器が出土している。

地山面が床面であった時期も想定され、貼り床が設けられた後の二段階で使用された可能性も考えられる。

貼り床層の中からも土師器の小片が出土しているが、形状をとどめた

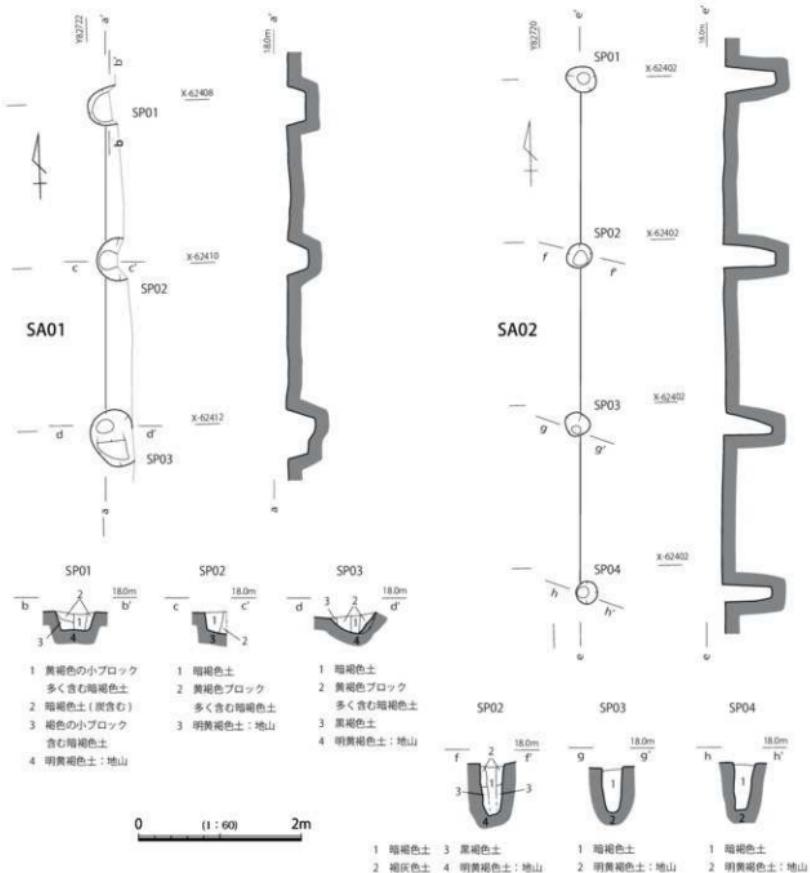


ものは出土していない。

SI03 出土遺物(第11図)

1は土師器壺である。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は斜方向のケズリである。2は土師器高杯で、主に脚部が残る。粘土で脚全体の成形を行った後、ケズリで内側の粘土を削りぬいて脚の形を作り出している。外面はハケメ調整である。

3は須恵器の壺である。口縁の立ち上がりはやや低く内傾するもので、底部外面の回転ヘラケズリは比較的丁寧に施されており、大谷編年の出雲4期に該当する。4は壺の把手、5は移動式カマドの接地部付近である。



第12図 SA01、SA02 平面図・断面図

SA01(第12図)

南北方向に並ぶ3基のピット、SP01～SP03から成る柱列である。各ピットを半截したところ、SP01で径12cmの柱痕を確認し、SP03では径10cmの柱痕を確認した。3基とも柱の埋土の黄褐色ブロックを多く含む暗褐色が近似していたことから一連のものと判断した。検出面からの深さが30cm弱と浅いので後世に削平を受けていると思われる。心々距離は、SP01～SP02が2.2m、SP01～SP02が1.9mである。東に向けて掘立柱建物が復元される可能性もある。

SA02(第12図)

南北方向に並ぶ4基のピット、SP01～SP04から成る柵である。ピットの間隔と深さがほぼ同じことを根拠とする。心々距離は、SP01～SP02が2.1m、SP02～SP03が2.1m、SP03～SP04が2.0mで、いずれも深さは60cm前後である。SP02を半截したところ径12cm弱の柱の痕跡を確認したが、SP03とSP04では確認できなかった。

SD06, SD07(第13図)

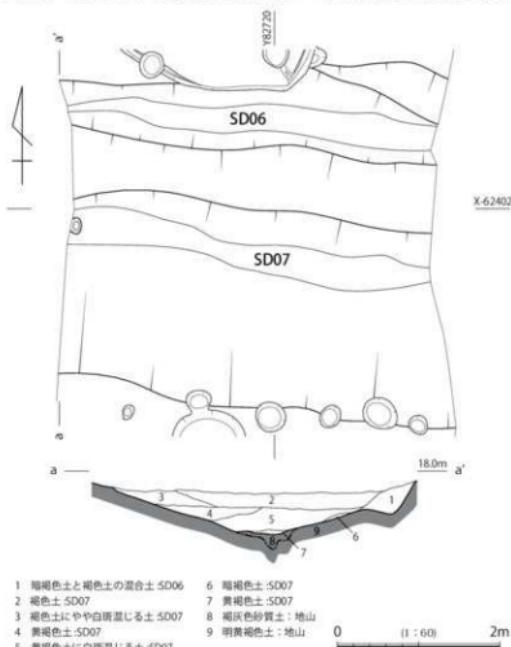
標高17.9mの地山面で検出した2本の並行する溝で、東西方向に走り、調査区外の東西にさらに続いている。断面a-a'をみると、SD06の幅は不明だが、地山面から深さ40cmを測り、この溝が1層で埋まつた後に、SD07が掘られている。SD07の規模は上端幅3.0～3.2m、深さ0.5mを測り、断面は傾斜が緩やかなV字状を呈している。SD07に堆積した層は2～7層で、8層は當時水の湧く地山と思われる。

SD07から遺物は出土していないが、SD07が切るSD06埋土から須恵器の壺の胴部破片が出土しているので、SD07が埋没した時期は古墳時代後期である。

SP70～SP76(第14図)

A区南端付近にピットが多数分布している。

掘立柱建物跡等の復元ができるものであっても、柱痕が残るものや埋土の締まっているものが点在しており、調査範囲を広げると



第13図 SD06, SD07 平面図・断面図

建物跡を構成する可能性が高いと思われるものがあるので、ピットの平、断面図を第14図に掲載しておくる。

SX01(第15図)

標高18.0mの地山面で検出した、性格不明の落ち込みである。

調査区内での平面プランは「コ」の字状に検出しており、3辺とも直線である。この遺構は調査区外の西にさらに続くもので、全容は不明だが、おそらく方形を呈するものであろう。

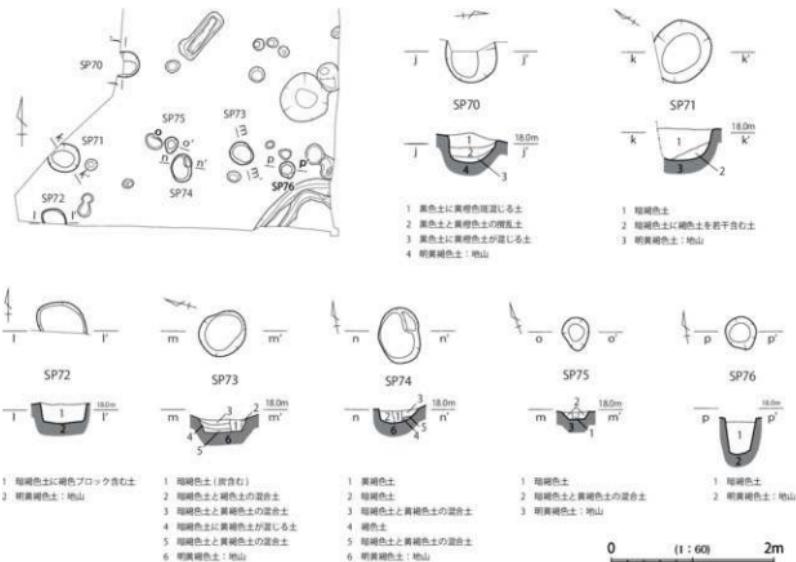
規模は南北辺の幅2.45mを測り、検出面から地山面までの深さは20cm前後である。床面は平坦で深さ15cmの小穴が1ヶ所見られるが、壁際溝や柱穴などはみられない。埋土は暗褐色土と黒褐色土の混合土(1層)の1層のみである。遺物が出土しておらず時期は不明であるが、形状からSI03のような小型竪穴建物跡の一部の可能性がある。

SX02(第16図)

標高17.5mの地山面で検出した、性格不明の落ち込みである。

この遺構は調査区外の南にさらに続くものであるが、下端が若干南に上がっているので、平面プランは不整形なL字状と推測され、底部の形状もそれに近い。a-a'ラインでの深さは20cm程度で、壁は上端から下端にかけて緩やかに下がるが、壁の角度は一定していない。

埋土は暗褐色土(小炭・・焼土を若干含む)1層で、検出上面に比較的大きめの甕の破片(第17図5)が出土し、底面付近では須恵器の环の破片(第17図7~9)が出土した。

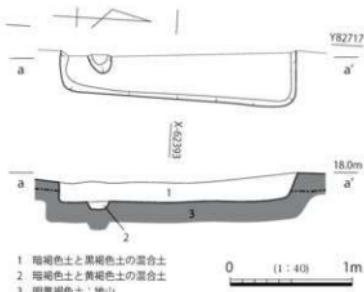


第14図 その他の遺構の平面図・断面図

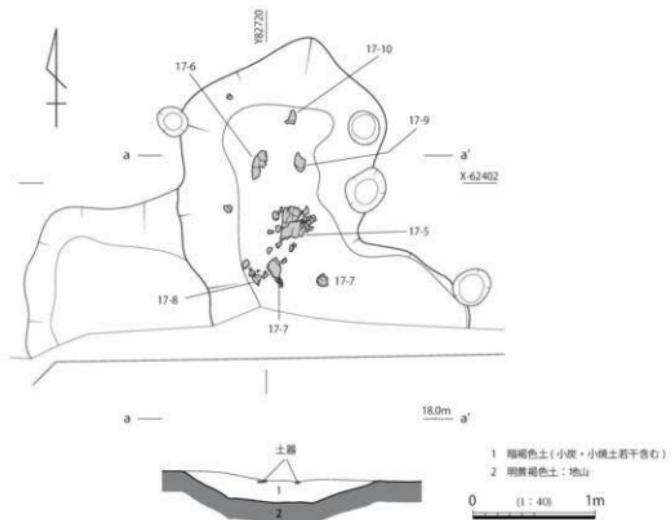
土器には古墳時代中期～古代の時期幅があるが、最も新しい土器の年代から古代以降の遺構と判断する。

SX02 出土遺物(第17図)

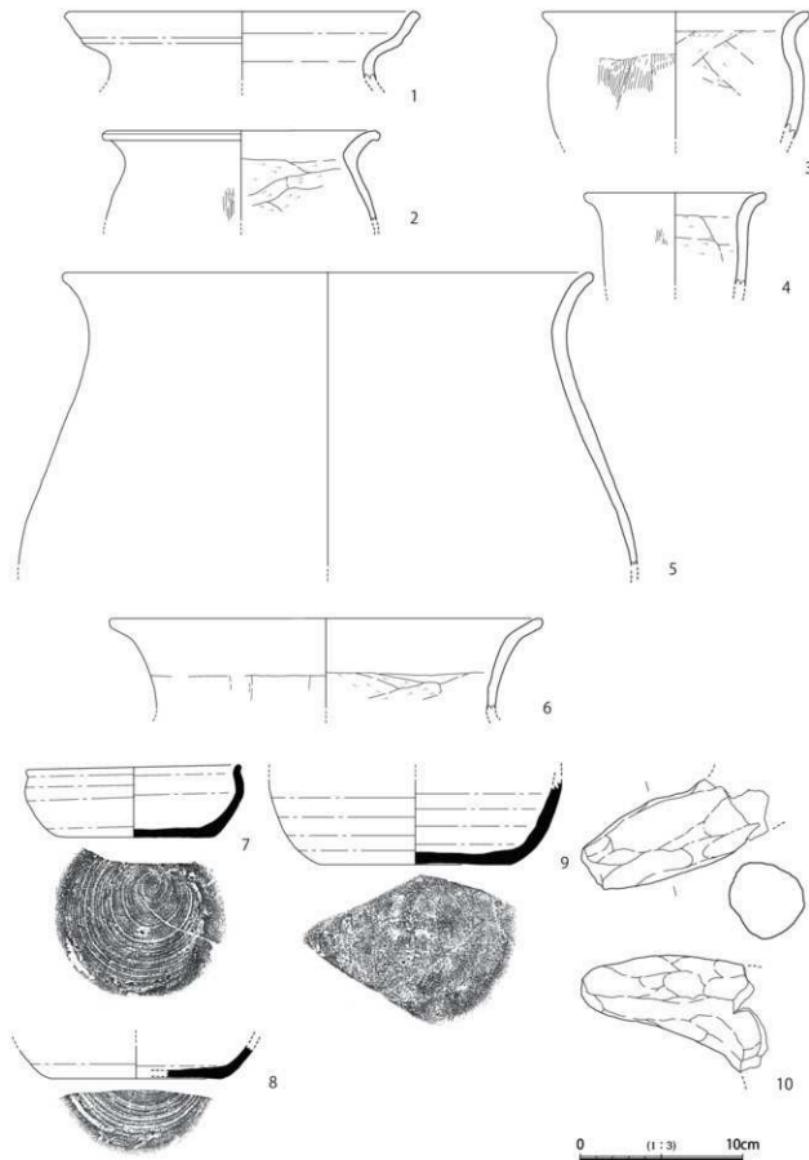
1～6は土師器の甌である。1は退化した複合口縁を持ち、松山編年3期に該当する。2～4はやや小型で、2は口縁が外反するもので、胴部外面は縱方向のハケメ、内面はケズリが施されている。松山編年4期か。3は口縁の断面が如意状のもので、胴部外面は縱方向のハケメ、内面はケズリが施されている。4は口縁の断面が如意状になり、胴部が張らない。胴部外面は縱方向のハケメ、内面はケズリが施されている。5は大型で、口縁は如意状である。内外面とも器面は風化している。6は土師器の甌と思われ、外面にはハケメの痕跡が残り、内面はケズリが施されている。7～9は須恵器である。7は如意形口縁の無高台の环で、内外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切である。国府第2型式以降に該当する8は环の底部で、内外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切である。9は器壁が丸味を帯びて立ち上がる环の下半部で、内外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切である。10は土製支脚の腕の部分である。



第15図 SX01 平面図・断面図



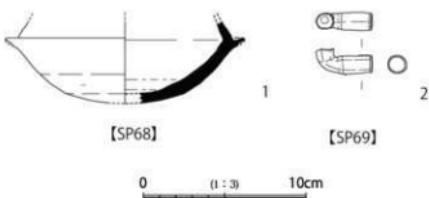
第16図 SX02 平面図・断面図



第17図 SX02出土遺物実測図

2. その他の遺構に伴う遺物(第18図)

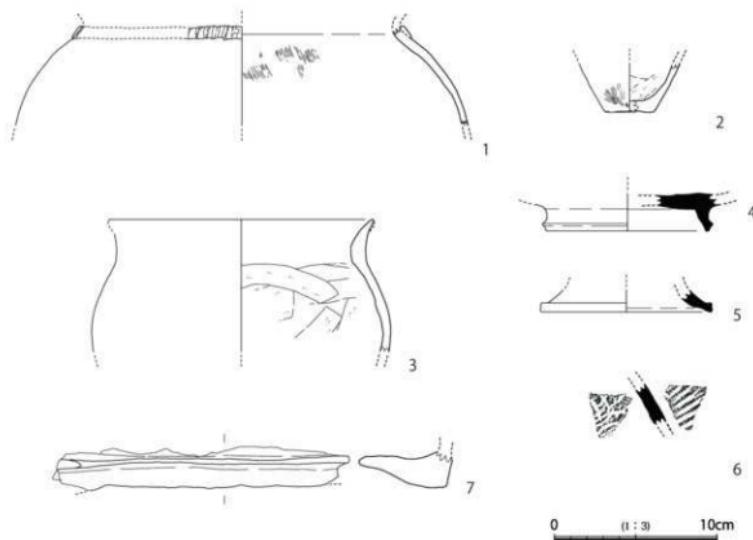
1はSP68出土の須恵器の坏である。口縁が内傾して、外面は自然釉のため調整は分かりにくいが、大谷編年年の出雲3期に該当するものであろう。2はSP69出土の煙管の先端部分である。青銅製で、長さ3.5cm、火皿の径1.0cm、小口の径1.0cmを測る。



第18図 その他の遺構に伴う遺物実測図

3. 遺構外出土遺物(第19図)

1、2は弥生土器である。1は甕の頸から肩部で、頸部には指頭圧痕文帯がめぐらされている。外面調整は風化して不明であるが、内面は一部にハケメが残る。松本編年IV-1様式前後である。2は甕の底部付近である。外面調整はナデとミガキ、内面はケズリが施されている。3は土師器の甕である。調整は外面が風化し不明であるが、胴部内面にケズリ調整がみられる。4～6は須恵器で、4は皿の高台部、5は高坏の脚の裾部で、6は甕の胴部小片である。7は土師質の移動式カマドの焚口、底部分である。



第19図 遺構外出土遺物実測図

第5節 B区

B区は南から張り出す低丘陵の頂部から東の谷にかけて緩やかに下がる調査区で、頂部の標高17.5m、東端の標高15.7mを測る(第20、21図)。

調査区北側(C2、C3、C4、D2、D3、E2、E3、F2、F3、G2、G3、H2、H3、I2、I3、J2、J3、K2、K4、K5区)では、地表面から地山面までが単一土層で浅く(第21図)、地山面には現代の暗渠や果樹を植えた痕跡、ビニールを含むゴミ穴などが目立ち、明確に近世以前と思われる遺構は見つからなかった。また、埋土中から出土した遺物をみても、土器類は小さいものばかりで出土量は極端に少ない状況であった。この調査区は本来は地形が高まる場所であるため、現代に大きく削平を受けている可能性が高い。また、調査区東側の斜面(M7、N7、O7区)では、ピットが点在するが、浅いものが主体で規則性が見いだせなかった。地山直上層からはほとんど遺物が出土していない。調査区南側(K6、K7、L7、K8、K9、K10、K11区)では、竪穴建物跡や土坑など多くの遺構を検出することができた。したがって、以下ではB区の南側で検出した遺構について説明を行う。土層状況については第3節で述べているため割愛するが、遺構は全て地山面で検出している。竪穴建物跡2基、土坑2基、溝2本、性格不明遺構1基について詳述する。

1. 遺構と遺物

S104(第22図)

東向きの緩傾斜地、標高16.25mの地山面で検出した、竪穴建物跡である。

この遺構の東側約4分の1は調査区外にある。

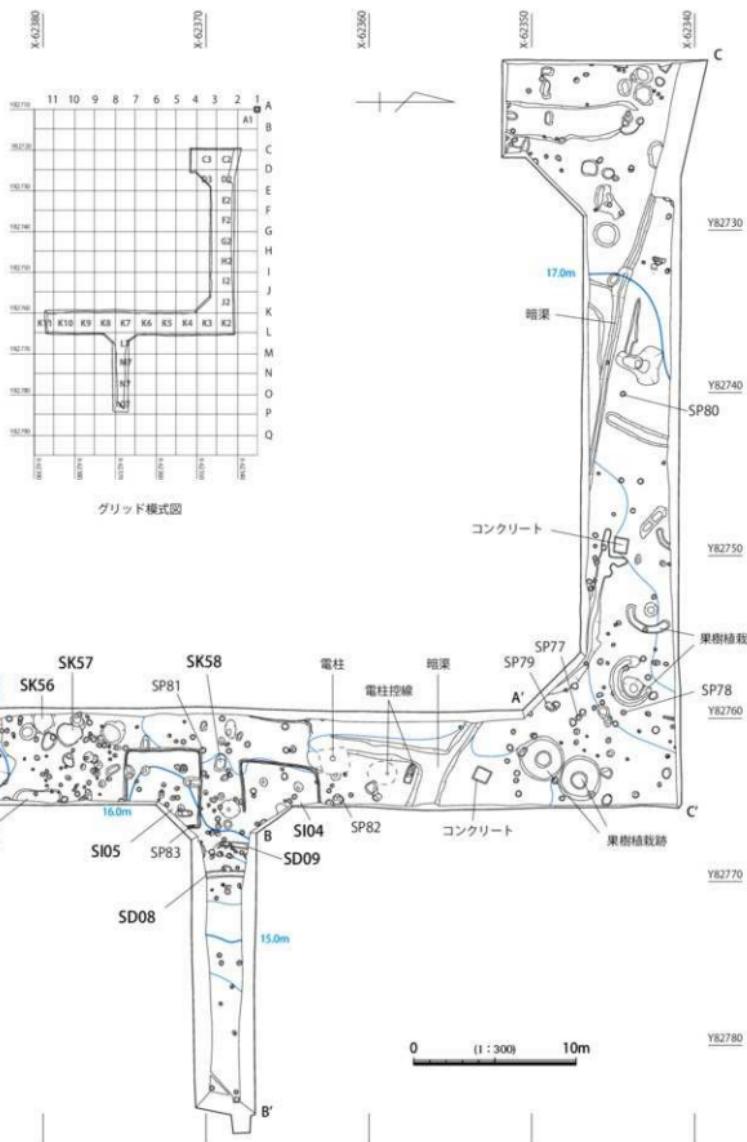
平面プランは南西の隅が若干張り出した歪んだ方形で、規模は南北方向の一辺が上端で4.8m、下端で4.68mを測る。西寄りの検出面からの深さは24cm程度、床面の標高は16.1m前後を測るが、後世の浸食によって南東の隅は地山が流出して床面が失われていた。

貼り床は設けられておらず、地山の床面では主柱穴3基とピット8基、壁の下端に沿う壁際溝、焼土1ヶ所を検出した。

主柱穴SPO1は上端径54~64cm、深さ86cmを測る。土層断面では柱痕が確認でき、柱は径14cmである。主柱穴SPO2は上端径48~56cm、深さ81cmを測る。これも土層断面で柱痕が確認でき、柱は径17cmである。主柱穴SPO3は調査区外で深くなるものと思われるが、調査区内では本来の深さは確認できていない。SPO1とSPO2の心々距離は2.2mで、SPO2とSPO3の心々距離は2.5mを越える。

壁の下端に沿う壁際溝は幅18cm、深さ10cm程度で、南東付近は後世の浸食により床面もろとも消失している。建物跡のほぼ中央には厚みのある焼土が位置するが、その上面や周辺には炭が全く残存していないかった。

遺物は古墳時代後期の須恵器も出土しているが、床面から浮いたものと遺構面が削平された場所から出土したものばかりであり、床面上から出土したものは土師器の小破片と移動式カマドの破片だ



第20図 B区平面図

けであった。時期は明確でないが、床面から須恵器が出土していないこと、隣接するSI05と同じ規格の下に建てられた可能性が高いことから、古墳時代中期末と考える。

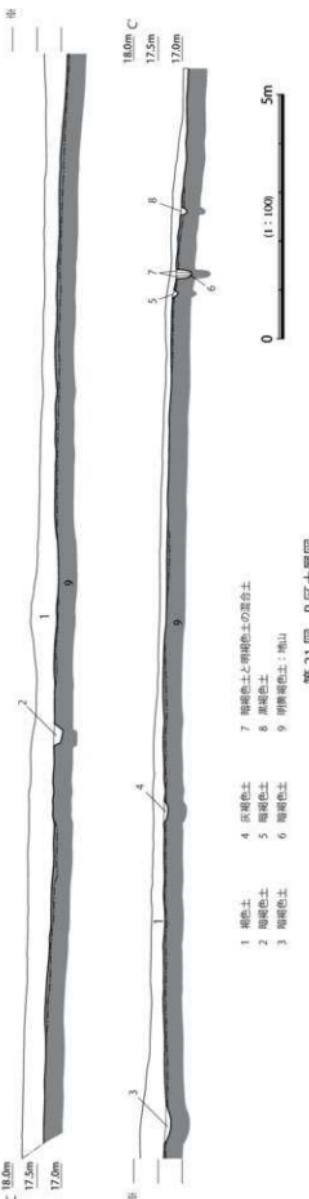
SI04 出土遺物(第23図)

1～4は須恵器である。1は蓋で、稜は鋭くないが高さがあり、天井部の滑らかな回転ヘラケズリの範囲が広い。大谷編年の出雲1～2期に該当する。2は小型の壺または甌の肩部付近で、上方に2条の沈線、その下に波状文がめぐらされている。3と4は甌の胴部で、3では内面の當具痕が若干ナデで消されており、大谷編年の出雲1期に併行すると思われる。

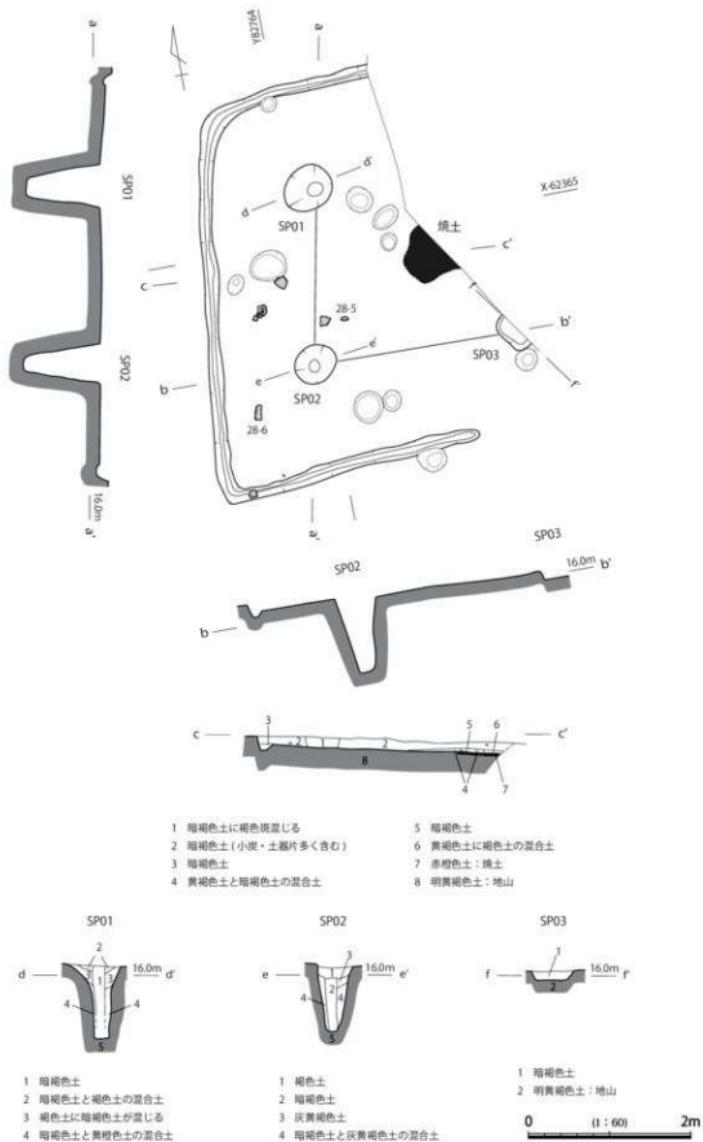
5、6は移動式カマドである。5は焚き口上部の庇で、6は接地部付近である。

SI05(第24図)

SI03の南2.4mの地点で、SI04と並ぶように位置する堅穴建物跡である。平面プランは方形を呈しており、この遺構の南東部は調査区外にある。建物跡の規模は東西辺が上端で5.0m、下端で4.75m、南北辺が上端で4.9m、下端で4.6m、西寄りでの検出面からの深さは22cm程度、床面の標高は西で16.05m、東で15.95mを測る。貼り床は設けられておらず、地山の床面で主柱穴3基とピット6基、壁の下端に沿う壁際溝、炉跡1基を検出した。主柱穴SP01は上端径48～51cm、深さ69cmを測る。土層断面では柱痕が確認でき、柱の径は15cmである。主柱穴SP02は上端径54cm、深さ65cmを測る。これも土層断面で柱痕が確認でき、柱の径は12～18cmである。主柱穴SP03は上端径42～48cm、深さ35cmで、これについて柱痕が確認できなかった。また、他と比べてやや浅いようであるが、これは建物跡の床面が東に下がっているためで、柱穴の下端標高は近似している。SP01とSP02の心々距離は2.35mで、SP01とSP03の心々距離は2.5mを測る。壁に沿う壁際溝は幅18cm、深さ10cm程度である。炉跡は建物跡のほぼ中央に位



第21図 B区土層図



第22図 S104 平面図・断面図

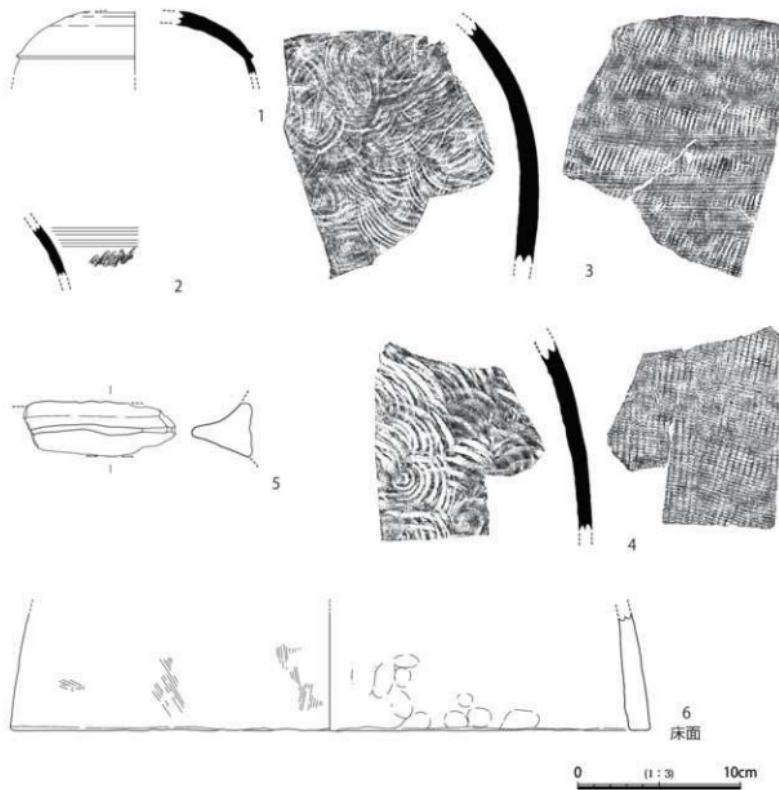
置しており、炭は炉の周辺で地山にめり込んだ状態でわずかに残るもの、ほぼ流失していた。炉の平面形は楕円形で、 $48 \times 30\text{cm}$ を測る。周縁の一部が帶状に盛り上がり、U字状を呈していた可能性があるが、西端を後世のピットで切られているため明確ではない。帶状の高まりの内側は若干窪み、その内側は赤黒いガラス質に変質している。

遺物は土師器と須恵器が出土している(第25図)。第25図2は床面に伏せられた状況で検出したが、その他はより浮いたレベルから出土している。

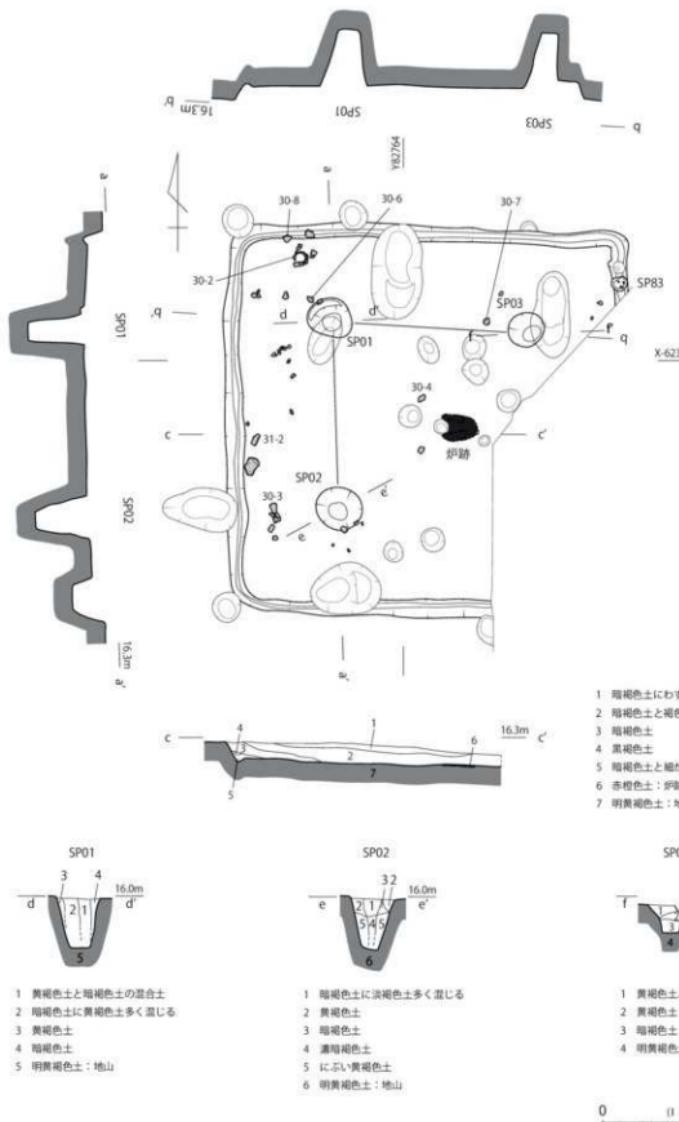
時期は、床面直上で口縁を下にして出土した甕(第25図2)から、古墳時代中期後半～後期初頭頃と判断する。

S105 出土遺物(第25、26図)

第25図1～4は土師器の甕である。1は口縁が大きく開くものである。2は口縁があまり開かず

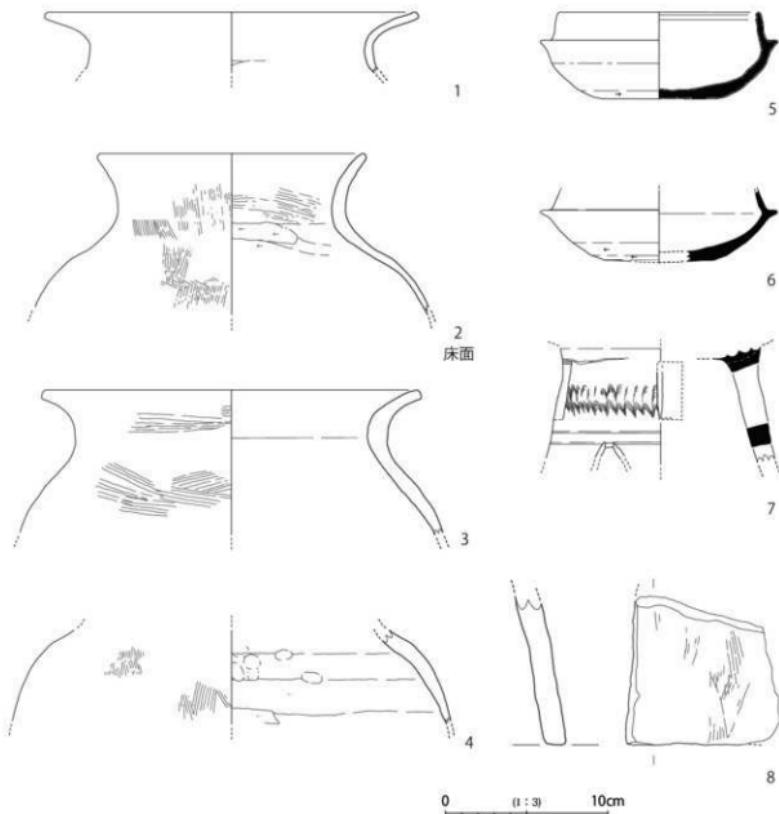


第23図 S104出土遺物実測図



第24図 SI05 平面図・断面図

に肩部が張るもので、外面はハケメ後口縁部横ナデ、内面は口縁が横方向のハケメ後横ナデ、胴部はケズリが施されている。3は口縁が開き、胴部が張らないもので、外面は横方向のハケメ、内面は風化している。4は肩部が張る壺である。1～3は松山編年のIV期に該当する。5～7は須恵器で、5、6は壺である。5は焼成が悪く灰白色を呈している。口縁が直立気味で、口縁端部内面に浅い溝がめぐり、底部外面は丁寧な回転ヘラケズリが施されたもので、大谷編年の出雲2期。6は火を受けて白～灰白色に変色している。口縁の立ち上りが若干内径し、口縁端部は欠損している。底部外面に丁寧な回転ヘラケズリが施されており、大谷編年の出雲2期。7は器台もしくは壺の脚部で、焼成が悪く淡灰色～灰白色を呈している。最上段には波状文が2段に施され、方形透かしが穿たれており、沈線を挟んだ2段目の施文の有無は不明だが三角透かしが穿たれている。古い形状を呈するが、器壁



第25図 SI05出土遺物実測図(1)

が厚めで焼成が悪い点から出雲2期に併行しても矛盾はない。8は移動式カマドの接地面付近である。

第26図1～3は石製品である。1は何らかの作業台に使用されたものと思われ、広い面が両面とも滑らかであり、部分的にくぼみがみられる。石材は不明。2は砥石である。片面と圓の上面にあたる細長い面に使用痕がみられる。1、2とも石材は不明である。3はメノウの剥片で、二次調整はみられない。

SK56(第27図)

標高16.2mの地山面で検出した土坑(袋状貯蔵穴)である。

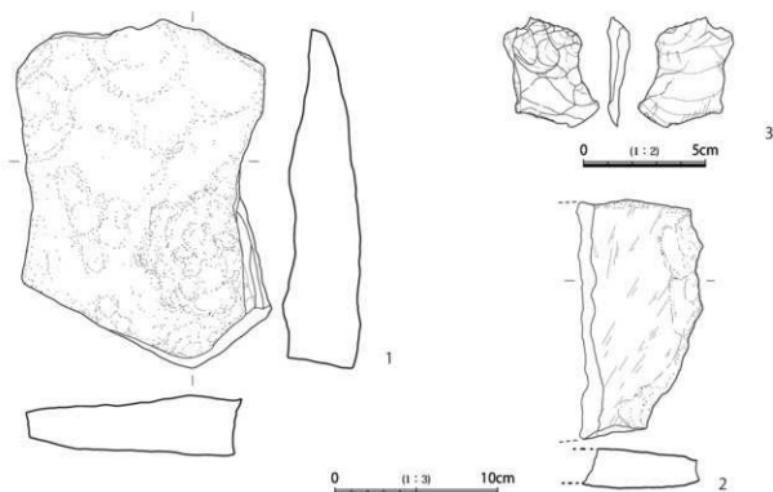
西側半分は調査区外にあるが、平面プランは円形を呈するものである。断面はb-b'のとおりで、壁面がオーバーハンプグして下方ほど広くなるフラスコ状を呈しており、床面も円形でほぼ平坦である。規模は検出面で径1.4m、床面で径1.57m、検出面からの深さ0.55mを測る。

遺物は最下層(4層)から打製石斧1点と砥石の破片2点が出土した。

また、床面直上の褐色土(a-a'の4層)のサンプルを採取して洗浄を行ってみたが、形が残る炭化物などは見つからなかった。

SK56出土遺物(第28図)

1は打製石斧で刃部を欠損している。石材は分からぬが自然面が褐色がかった色の石である。両サイドを両面から敲打して形成されたもので、基部と片面の中央付近に自然面が残る。基部幅2.0cm、残存最大幅6.1cm、最大厚2.3cm。2と3は砥石である。同じ石材で仕上げ砥に適すると思われるが、石材は不明である。ともに広い面が両面ともよく使い込まれている。

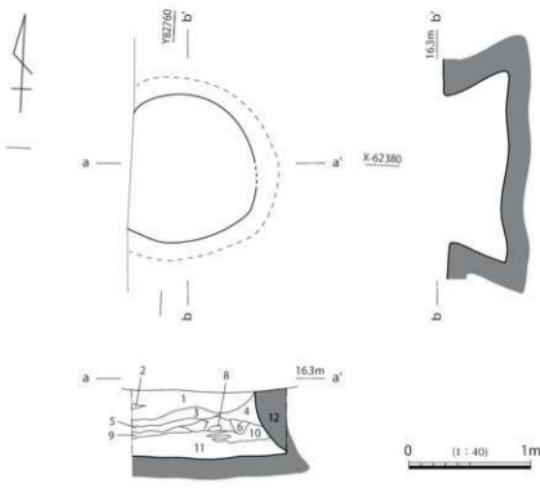


第26図 SK56出土遺物実測図(2)

SK57(第29図)

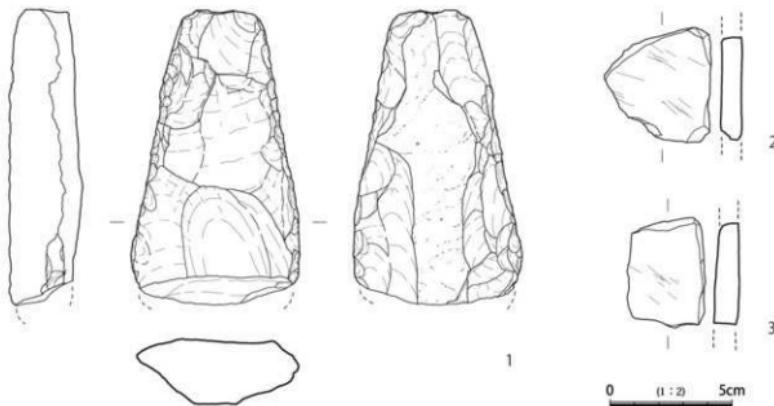
標高 16.2m の地山面で検出した、土坑(袋状貯藏穴)である。

平面プランは円形を呈し、断面は a-a' のとおりで、壁面がオーバーハングして下方ほど広くな



- | | | |
|---------------------|----------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 5 暗褐色土 | 9 暗褐色土に黄褐色土(地山)が混じる |
| 2 褐色土 | 6 黄褐色土(地山ブロック) | 10 明黃褐色土 |
| 3 暗褐色土に黄褐色土(地山)が混じる | 7 にぶい黄褐色土 | 11 褐色土 |
| 4 褐色土と暗褐色土の混合土 | 8 黄褐色土 | 12 明黄褐色土:地山 |

第27図 SK56 平面図・断面図



第28図 SK56 出土遺物実測図

るプラスコ状を呈しており、床面は平坦な円形である。規模は検出面で径 0.93m、床面で径 1.35m 前後、検出面からの深さ 0.58m を測る。床面から 20 ~ 30cm 浮いたレベルで 2 個の石が出土している。1 つは一辺 50cm 程度の扁平な石で、石の下端は 3 層であった。

4 層から弥生時代中期の小さな土器片と小さな石核が出土した。また、床面直上の黒褐色土(4 層)のサンプルを採取して洗浄したが、形が残る炭化物等は検出されなかった。

SK57 出土遺物(第30図)

1、2 は弥生土器で、1 は小型の広口口縁の壺である。口縁は大きく開き、端部はやや上方に拡張されて 2 状の凹線文がめぐらされ、口縁の内面の上向きの面には波状文がめぐらされている。松本編年図の IV-2 様式に該当する。2 は甕の底部である。風化しており調整は不明である

3 は小さな石核である。石材は玉髓で、黒みがかった赤色を呈している。

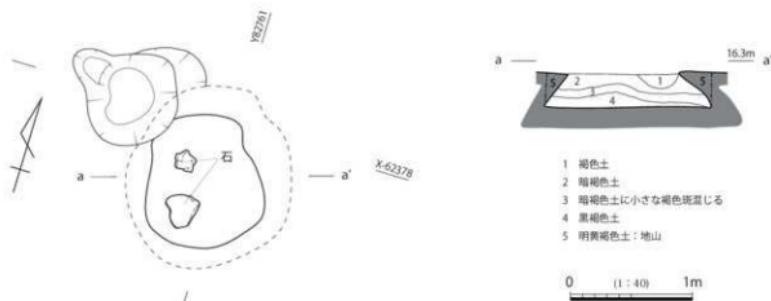
SK58(第31図)

標高 16.25m の地山面で検出した土坑である。平面プランは楕円形で、上端 106 × 68cm、下端 64 × 52cm、検出面からの深さ 32cm を測る。埋土は 3 層に分かれている。性格は不明である。

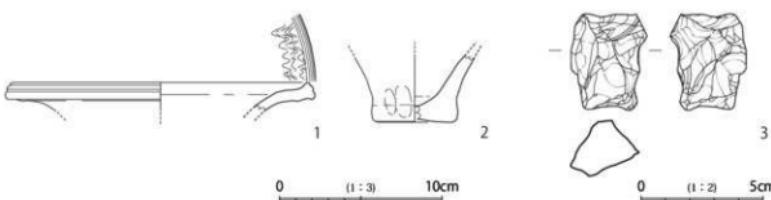
埋土から石製品が 1 点出土したが、土器が出土していないため、時期は不明である。

SK58 出土遺物(第31図)

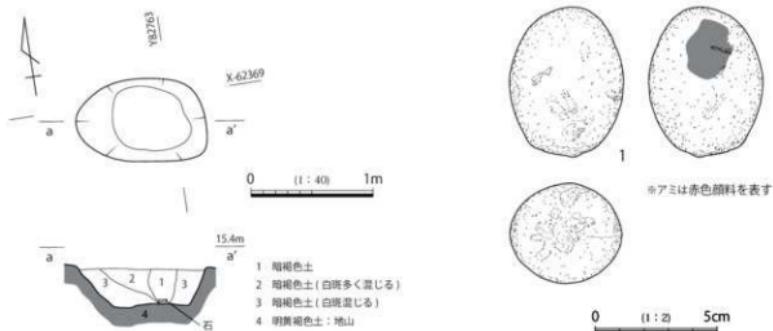
1 は石製品である。平面は楕円形、断面は円形を呈し、鶏卵くらいの大きさである。表面はよく磨



第29図 SK57 平面図・断面図



第30図 SK57 出土遺物実測図



第31図 SK58 平面図・断面図・出土遺物実測図

かれている。所々に小さな敲打の痕跡がみられるが、下端の敲打痕が最も顕著である。一部に赤色顔料が付着している。

SD08(第32図)

東に斜度が増す標高 15.7m の地山面で検出した溝である。

等高線と平行した南北方向に走るもので、調査区外のさらに北と南へ続いている。上端幅 44cm、下端幅 26cm、深さ 12cm を測り、埋土は暗褐色土 1 層である。土師器の小片が若干出土したが、器種や時期が分かるものは無く、時期は不明である。

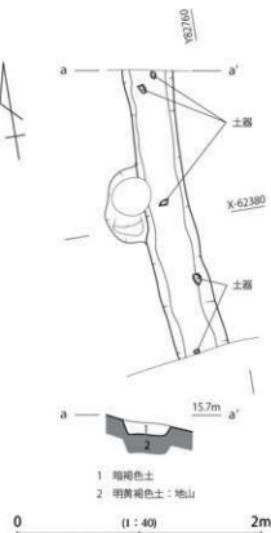
SD09(第33図)

東に下がる斜面の標高 16.0m の地山面で検出した溝である。等高線と平行した南北方向に走り、南端では東に曲がって消滅しており、北は調査区外の北へさらに続いている。上端幅 48cm 程度、下端幅 20cm、深さ 10cm を測り、埋土は暗褐色土 1 層である。土師器の小片が若干出土したが、器種や時期が分かるものは無く、時期は不明である。

SX03(第34図)

標高 16.0m の地山面で検出した、性格不明の落ち込みで、調査区外の東にさらに続く。A 区で検出した小型の竪穴建物跡の類の可能性がある。

平面プランは現状では隅丸方形と推測される。規模は東西辺の幅約 3m、深さ 18cm を測る。床面は平坦で深さ 15cm の浅いピットが 1 ケ所あるが、溝や柱穴などはみられない。埋土は、上から暗褐色土



第32図 SD08 平面図・断面図

(1層)、黄褐色土(2層)、褐色土(3層)である。

遺物は須恵器の壺1点(第34図1)が床面から浮いた状態で出土している。

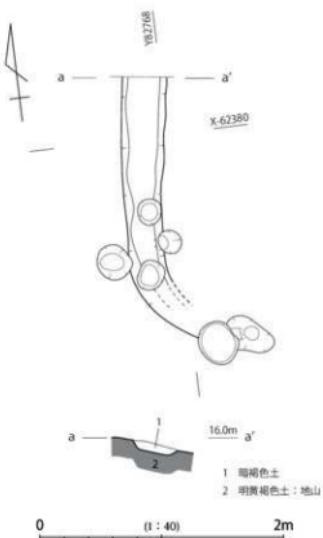
SX03 出土遺物(第34図)

1は須恵器の壺である。口縁端部と底部を欠損するが、口縁が直立気味に立ち上がり、底部外面の回転ヘラケズリはあまり丁寧ではない。大谷編年の出雲4期に該当する。

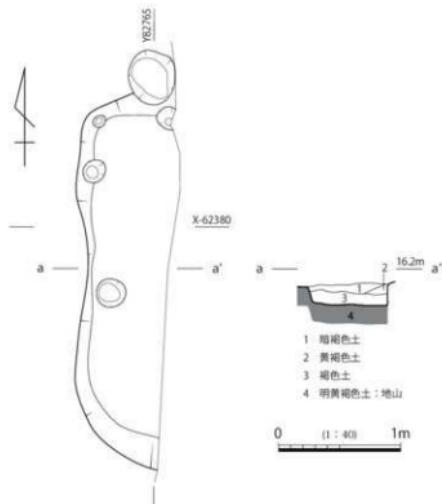
2. その他の遺構内出土遺物(第35図)

以下では、建物などを構成していないピットから出土した遺物について述べる。

1はSP77出土の須恵器の壺で、割れ口が丸味を帯びる小片である。口縁が内傾する時期のもので、詳細は不明である。2はSP78出土の須恵器の甕の口縁端部である。小片で傷んでいる。3はSP79出土の須恵器の蓋で、肩部には2本の沈線が低い位置でめぐらされている。大谷編年の出雲4期に該当する。4はSP80出土の柱状高台で、皿部を欠損している。12世紀頃のものである。



第33図 SD09 平面図・断面図



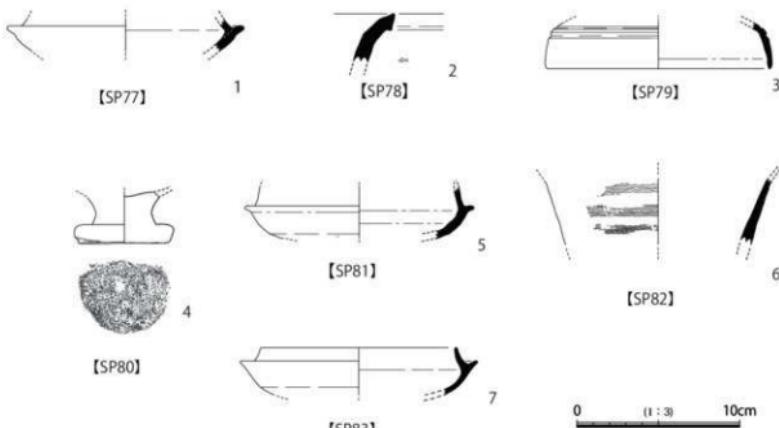
第34図 SX03 平面図・断面図・出土遺物実測図

5はSP81出土の須恵器の环で、傷みが著しい。口縁がほぼ垂直に立ち上がり、底部外面の回転ヘラケズリの範囲が広い大谷編年の出雲2期か。6はSP82から出土した須恵器の壺もしくは罐の颈部である。器壁が薄く、断面が褐色を呈し、外面一面に振幅の小さい波状文が浅く描かれている。大谷編年の出雲2期に該当する。7はSP83出土の須恵器の环で、口縁の立ち上りが内傾して低い。大谷編年の出雲4期に該当する。

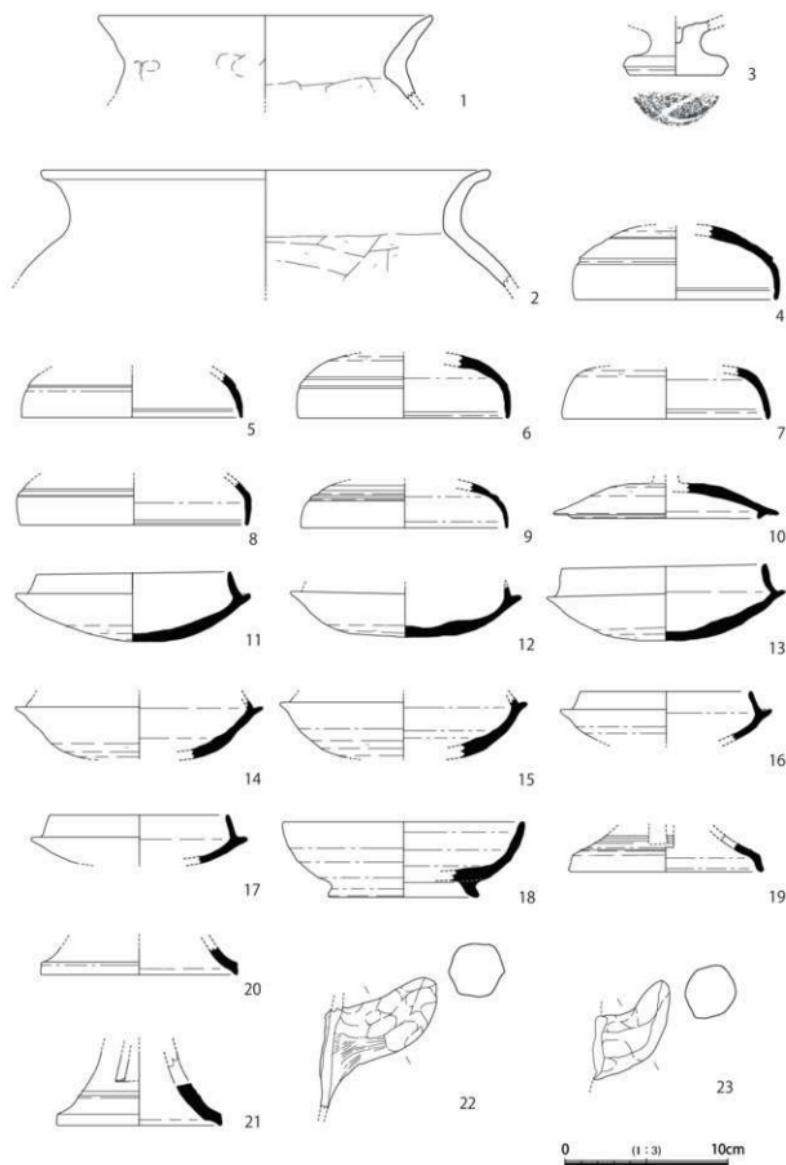
3. 遺構外出土遺物(第36、37図)

第36図1～3は土師器である。1は甕の口縁部で、器面剥離が著しい。内面は一部にケズリが残る。2は甕の口縁～頸部付近である。口縁は直線的に立ち上り端部が開く。風化が著しい。胴部内面はケズリが施されている。3は柱状高台で、上部の皿を失っている。調整は回転ナデ、底部が回転糸切で、12世紀頃のものである。

4～21は須恵器である。4～10は蓋で、4は肩部の稜がやや丸味を帯びるが突出しており、天井部の回転ヘラケズリの範囲が広いが、口縁端部内面の段があまい。大谷編年の出雲3～4期に該当する。5は稜の位置が低いもので、口縁端部内面に浅い段がつく。大谷編年の出雲4期に該当する。6は肩部に浅い沈線が2本めぐり、天井部には比較的丁寧な回転ヘラケズリが施されている。口縁端部内面は浅い段がつく。大谷編年の出雲4期に該当する。7は肩部に稜や沈線が施されていないもので、口縁端部内面には浅い沈線がめぐる。8は肩部の位置が低く浅い沈線が2本めぐるもので、口縁端部内面には浅い沈線がめぐる。大谷編年の出雲4～5期に該当する。9は肩部に浅い沈線が2本めぐるもので、口縁端部内面に浅い沈線がめぐる。大谷編年の出雲4期に該当する。10はおそらく宝珠状のつまみが付くもので、口縁部内面にはかえりが付くものである。大谷編年の出雲6期に該



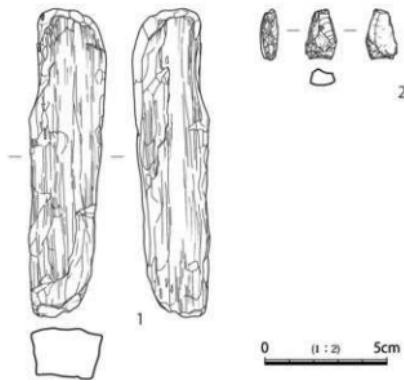
第35図 その他の遺構内出土遺物実測図



第36図 遺構外出土遺物実測図(1)

当する。11～18は坏である。11は焼成が悪く灰白色をしている。口縁部を欠損するが、立ち上りは内傾していない。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリが施されている。12は口縁が内傾するが、底部外面には広い回転ヘラケズリが施されている。大谷編年の出雲4期に該当する。13は口縁が内傾しているが、高さが残る。底部外面の回転ヘラケズリは範囲が狭い。大谷編年の出雲4期に該当する。14は口縁が内傾し、底部外面の回転ヘラケズリは面積が少ない。15は口縁を欠損しているが、口縁は内傾している。底部外面の回転ヘラケズリは丁寧だが、やや範囲が狭い。16は口縁が低めで、内傾している。17も若干口縁が低く、内傾している。18は高台が付くものである。大谷編年の出雲8期に該当する。19～21は高环の脚の裾部である。19は裾が広がるタイプで筒部にカキメがめぐらされている。透かしの数は不明。大谷編年の出雲2期に該当する。20は脚が聞くもの。21は方形透かしの下に浅い沈線がめぐらされている。透かしの数は不明。22と23は把手で、おそらく櫃につけられたものである。

第37図1、2は石製品である。1は玉砾石で、石材は珪化木である。細長い形で断面は方形である。4面とも使用されており、特に広い面2面がよく使用されたようで浅い筋状のくぼみが残っている。角部分も若干丸味を帯びており、使用の痕跡と思われる。2は黒曜石の剥片である。剥片の片側には連続押圧剥離が施されている。



第37図 遺構外出土遺物実測図 (2)

第6節 C区

緩やかに東に下がる緩斜面で、標高 16.7 m 付近に位置している。

C 区の南にある赤道を挟んでさらに 10m 南に離れた場所には湧水のある池が存在し、何時も大量の水が湧いている。また、グリッド K12、K13 区の西にも湧水池があり、そこからも常に少量の水が東へ流れ出してきたようである。調査区北端は地形が低くなっている。本調査区も壁面や地下からの湧水が多かったが、多くの遺構を検出した（第38図）。

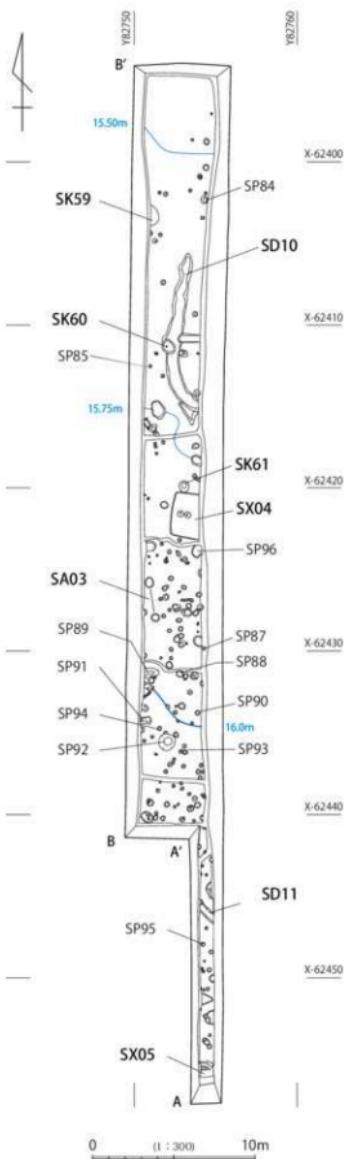
土層は B1 区の基本層序と同じで、上から①現代の耕作土(11層)、②耕作土(新)(16層)、③耕作土(旧)(31層)④地山(34層)と明瞭である（第39図）。所々に円形に土が入る層(23、24、26、27、28、29、30層)はかつての水脈の断面と思われる。遺構はすべて地山面で検出した。以下では、柱列 1 本(SA03)、土坑 3 基(SK59、SK60、SK61)、溝 2 本(SD10、SD11)、性格不明遺構(SX04、SX05)について詳述する。

1. 遺構と遺物

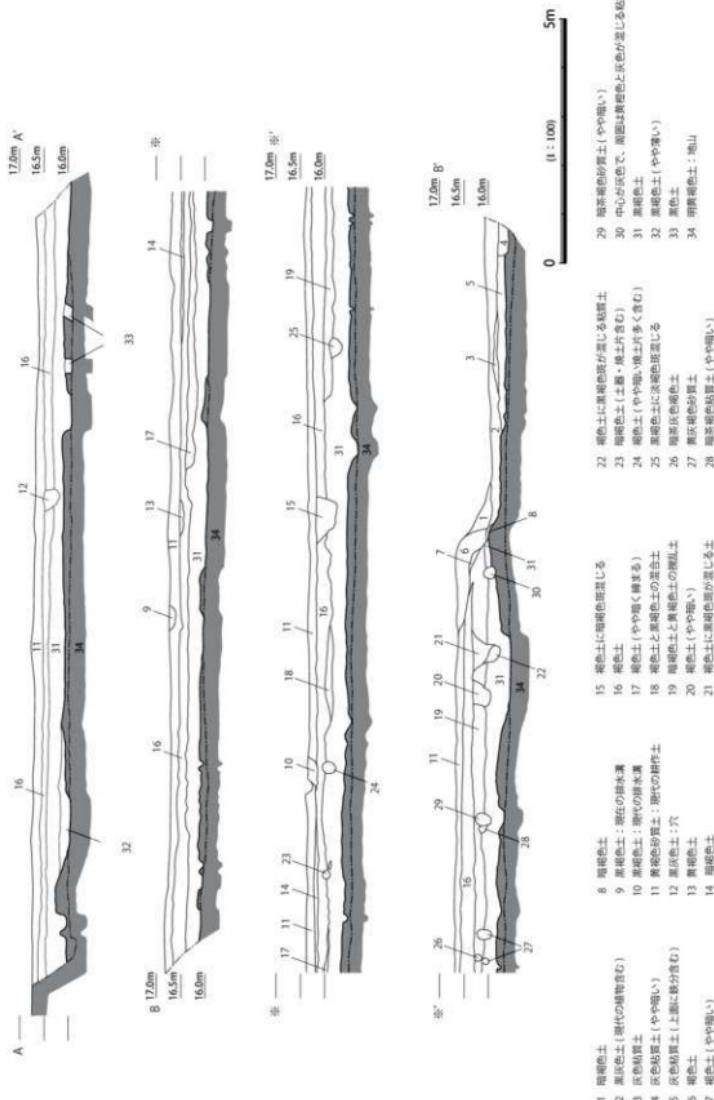
SA03(第40図)

南北方向にならぶ 2 基の柱穴 SP01 と SP02 から成る柱列である。柱穴を半截したところ、SP01 で径 10cm の柱痕を確認し、SP02 で径 13cm の柱痕を確認した。柱の埋土が両者とも細かい互層状であることや、他にこのような埋土を持つピットが無いことから一連のものと判断され、西に向けて掘立柱建物跡が展開する可能性が高いと考えられる。

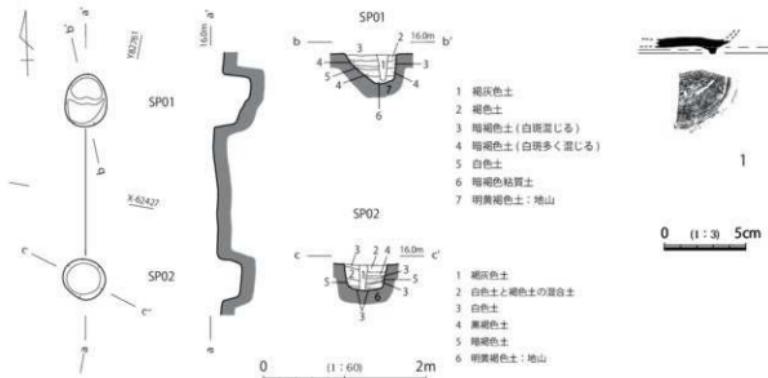
検出面が後世に削平を受けているため、SP01 は深さ 35cm、SP02 は深さ 31cm と浅い。SP01 - SP02 の心々距離は 2.2m である。



第38図 C区平面図



第39図 C区土層図



時期は SP02 から出土した土器から、奈良時代以降である。

SA03 出土遺物(第40図)

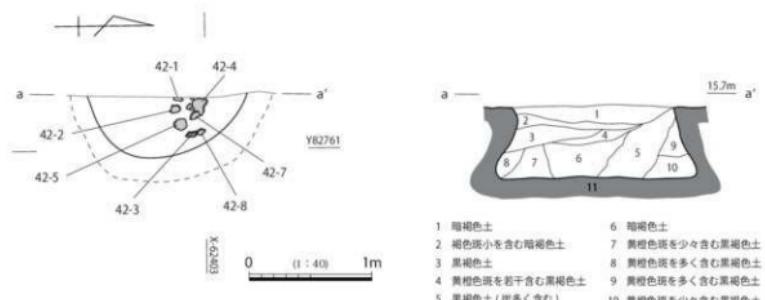
1 は SP02 埋土から出土した、須恵器の高台付环の底部である。器壁が薄く、高台が低い。底部外側は回転糸切で、その他は回転ナデである。

SK59(第41図)

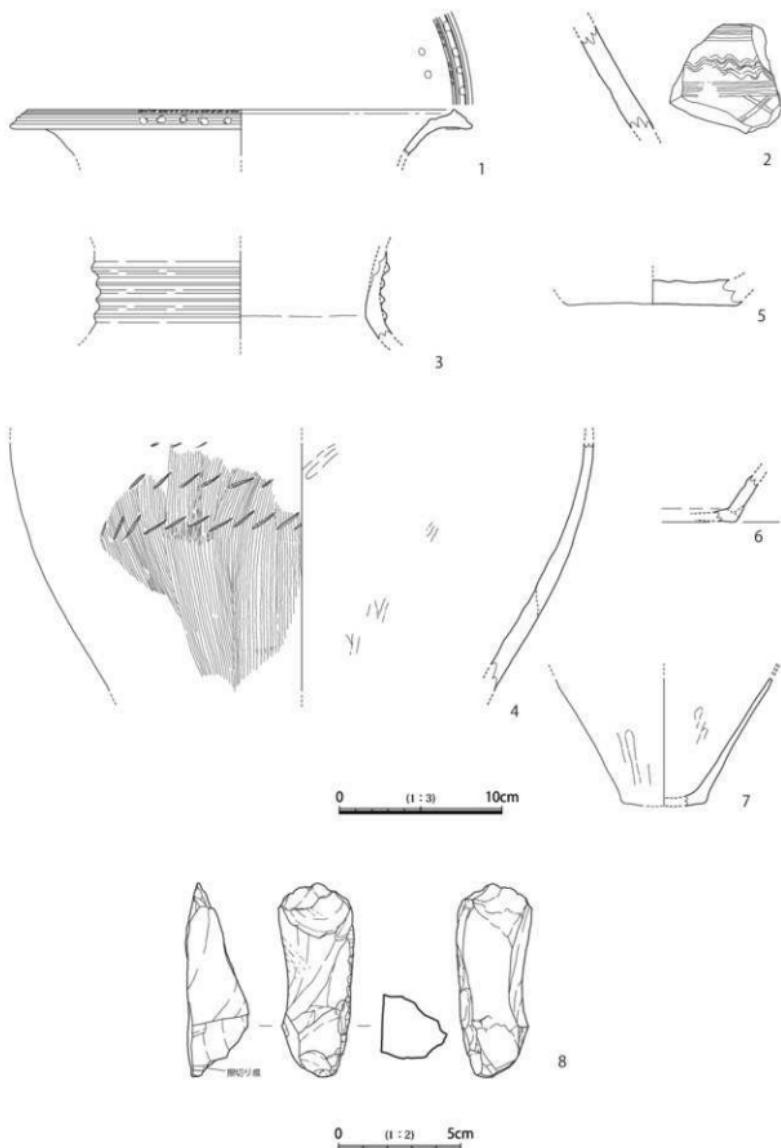
標高 15.5m の地山面で検出した土坑(袋状貯蔵穴)である。

約半分が西の調査区外に続くが、平面プランはおそらく円形で、断面は壁面がオーバーハングして下方ほど広くなるフラスコ状を呈し、底面もおそらく円形で、平坦に造られている。規模は検出面で径 1.36m、床面で径 1.64m 前後、検出面から床面までの深さは 0.6m を測る。床面から約 5cm 浮いたレベルで、多数の土器片と加工の施されたグリーンタフが出土した。

床面直上の黒褐色土(5 層)や暗褐色土層(6 層)は、色調から有機質のものが貯蔵されていた可能



第41図 SK59 平面図・断面図

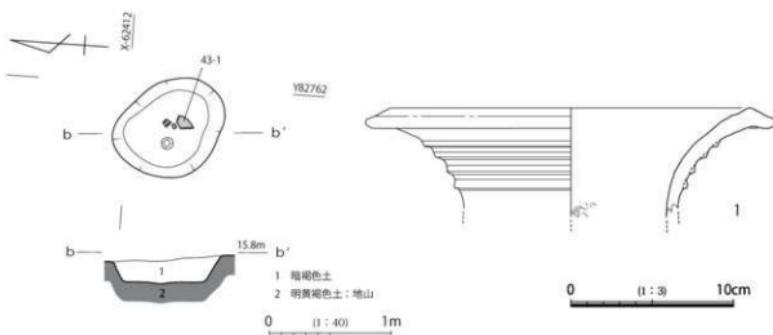


第42図 SK59出土遺物実測図

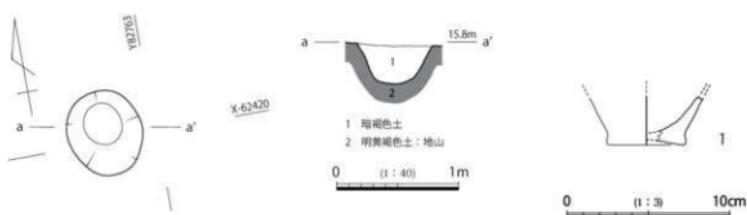
性が高いと考えられたため、土壌サンプルを採取して水洗を行ったが、形状が残る炭化物などは見つからなかった。

SK59 出土遺物(第42図)

1～7は弥生土器である。1～3は壺で、1は広口壺の口縁部である。口縁の先端が朝顔形に大きく開き、端部は肥厚して外側に平坦面を有している。端部の平坦面には3条の凹線がめぐり、上端部には細かい刻目が施され、中央付近には直径5mmの円形浮文が1cm弱の間隔で貼り付けられている。また、端部に近い口縁の内面にも円形浮文が配置されている。風化のため調整は不明である。松本編年IV-1様式にある。2は肩部で、上から櫛描直線文、波状文、櫛描直線文、斜格子文が隙間なく描かれている。内面は風化している。松本編年III-2～IV-1様式である。3は頸部付近で、断面三角形の突帯が最低5段めぐるもので、突帯はあまり高くない。松本編年III-2～IV-1様式である二次的に火を受けており、風化が著しい。4は壺の胴部である。外面は細かい縦方向のハケメ調整の後、ハケメ原体を利用した連続刺突文が3段にめぐらされている。内面はナデとミガキによる調整である。5～7は底部である。5は内外面ともに風化している。6、7は器壁と底部の外面はナデとミガキによる調整で、内面は風化している。



第43図 SK60 平面図・断面図・出土遺物実測図



第44図 SK61 平面図・断面図・出土遺物実測図

8はグリーンタフで、薄い緑色を呈している。全体に打ち欠いた痕跡があり、一部に溝状の擦切り状の痕跡がみられる。大きさは $7.9 \times 3.0\text{cm}$ 、最大厚 3.3cm 、重さ 55.85g 。

SK60(第43図)

標高15.8mの地山面で検出した、土坑である。

平面プランは楕円形で、断面は逆台形である。大きさは検出面で径 $76 \times 88\text{cm}$ 、床面で径 $56 \times 68\text{cm}$ 、検出面から床面までの深さは 22cm である。埋土は1層で、弥生土器が出土した。

SK60 出土遺物(第43図)

1は弥生土器の壺の口縁部である。口縁は外反して端部が肥厚し、外側に平坦面を有して下垂している。口縁端部に四線文はみられない。頸部外面には断面三角形の突帯が4重にめぐるが、突帯は低い。風化のため分かりにくいが、口縁直下の外面はナデ調整、頸部の内面にはハケメが残る。松本編年IV-1様式か。

SK61(第44図)

標高15.8mの地山面で検出した土坑である。平面プランは楕円形で、断面は丸みを帯びた逆台形である。大きさは検出面で径 $60 \sim 72\text{cm}$ 、床面で径 36cm 前後を測る。検出面から床面までの深さは 22cm である。埋土は暗褐色土1層で、弥生土器が出土した。

SK61 出土遺物(第44図)

1は弥生土器の底部で、器種は甕と思われる。二次的に火を受けており、外面は薄い赤色を呈している。調整は不明である。

SD10(第45図)

標高15.6mの地山面で検出した溝である。南北に走り、南端では弧を描いて東に曲がる。断面は極めて浅いU字状を呈し、深さは 20cm 程度で、埋土は暗褐色土1層で、所々に土師器の破片が混入しているほか、底から浮いた状態で弥生時代と思われる管玉の未成品(第46図2)も出土している。SD09の底面直上から甕の破片(第46図1)が出土したので、古墳時代中期以降の溝である。

また、この溝と直角に交わる溝があり、遺物は出土していないが、平面プランからSD09より新しいものと判断した。

SD10 出土遺物(第46図)

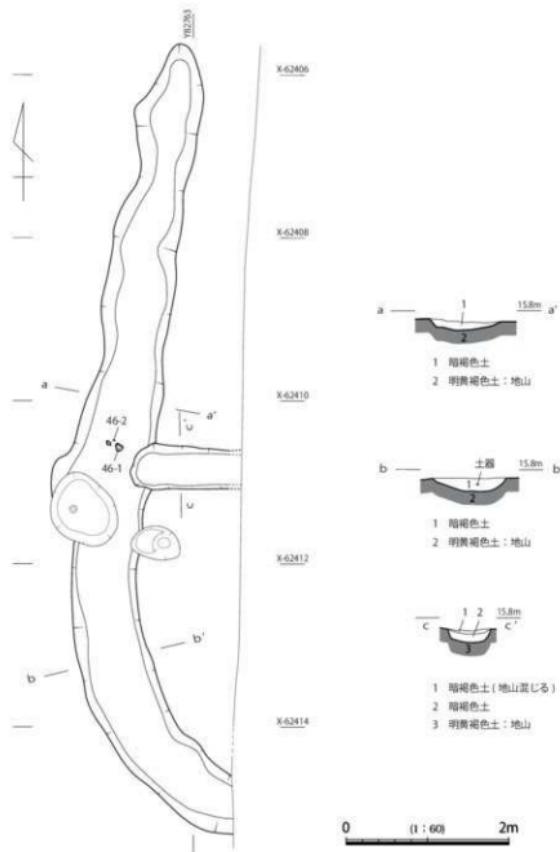
1は土師器の甕である。底近くの器壁に4つの孔が穿たれるもので、1穴の一部が残存している。外面はハケメ、内面は風化している。2は管玉の未成品である。石材はグリーンタフで、円柱状に研磨途中の段階で縱方向に平坦面が残っている。大きさは直径 0.7cm 、長さ 2.8cm である。両端部には直径 1mm 、深さ 1mm の削孔の痕跡が見られる。

SD11(第47図)

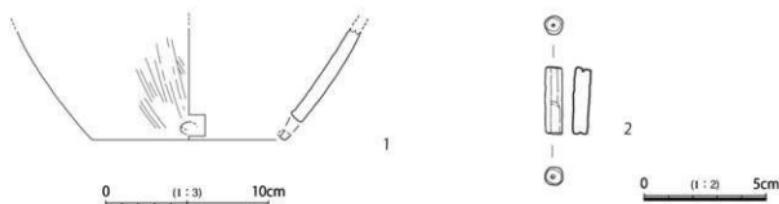
標高16.0mの地山面で検出した、北西-南東の溝である。

上端幅 52cm 、下端幅 32cm 、深さ 13cm を測り、断面は丸味を帯びた逆台形を呈している。埋土は暗褐色土1層で、土師器の小片を含んでいた。

時期は、甕の出土から古墳時代中期初頭か、それ以降である。



第45図 SD10 平面図・断面図



第46図 SD10 出土遺物実測図

SD11 出土遺物(第47図)

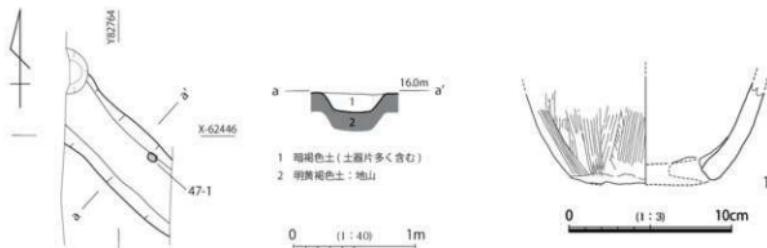
1は土師器の頸の底部付近である。底部に複数の孔を穿つタイプで、外面はハケメ、内面はナデ調である。

SX04(第48図)

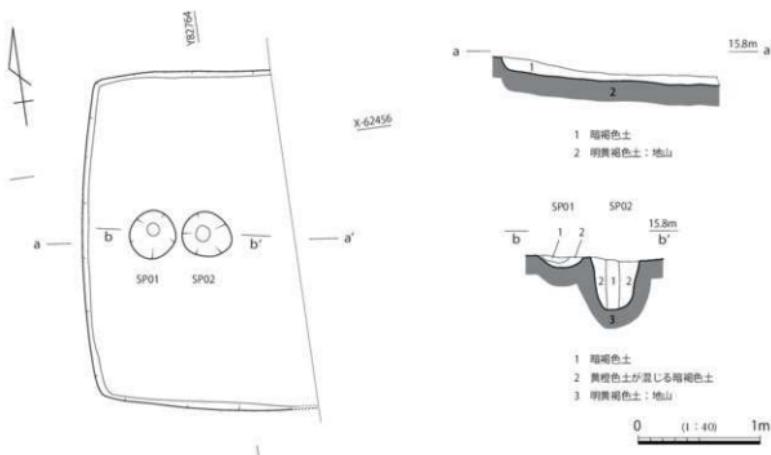
標高 15.7m の地山面で検出した、性格不明の落ち込みで、調査区外の東にさらに続くものである。

平面プランは現状では方形と推測される。規模は南北辺の幅約 2.8 m を測り、深さ 12 ~ 20 cm を測り、埋土は暗褐色土 1 層である。床面は東が 10 cm 弱く、ピット 2 基が検出されたが、壁に沿う溝はみられなかった。SP01 は浅いくぼみ状であるが、SP02 は半蔽断面に暗褐色土の柱痕が認められ、柱の径は 10 cm を測り、建物を構成していた可能性がある。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第47図 SD11 平面図・断面図・出土遺物実測図

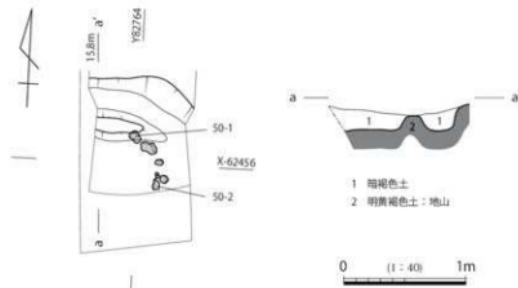


第48図 SX04 平面図・断面図

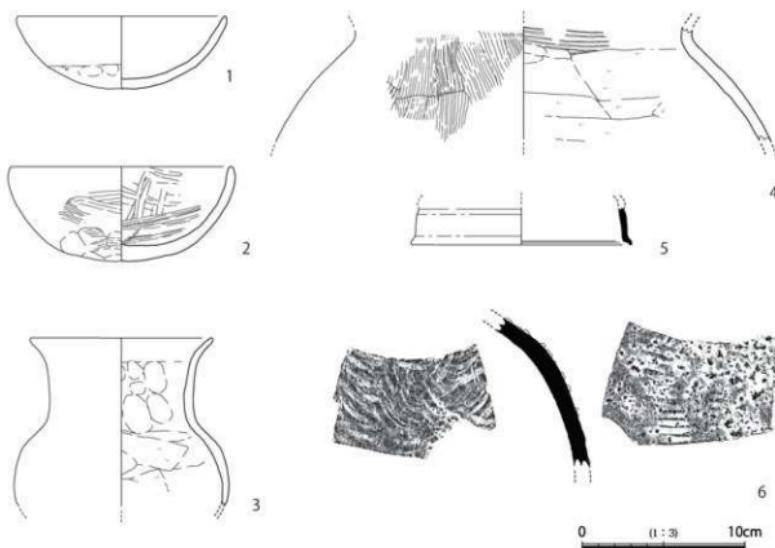
SX05(第49図)

標高 15.8m の地山面で検出した落ち込みで、北端だけの検出であり全体の形状は不明である。

完掘した状況では、北に沿っては溝状の部分があり、南側の床面は平坦である。溝部分の上端幅 40cm、下端幅 18cm、深さ 20cm を測る。南側の床面の深さも 20cm 程度で、埋土は炭を含む暗褐色土 1 層である。ここは當時壁から大量の水が湧いて分かりにくかったのだが、狭い割に多くの遺物が出土している。



第49図 SX05 平面図・断面図



第50図 SX05 出土遺物実測図

SX05 出土遺物(第50図)

1～4は土師器である。1、2は壺で、1は内外面とも風化している。2は内外面ともハケメを利用したナデ調整で、外面もハケメが主である。3は壺である。口縁は直立して先端部が外反している。風化が著しいが、胴部外面にはハケメ痕が残っている。二次的に火を受けて一部は薄い赤白色を呈している。4は甕である。外面は頸部から胴部にかけてハケメ、内面は頸部が横方向のハケメ、胴部が滑らかなケズリで調整されている。5、6は須恵器で、5は壺の口縁部である。口縁端部は外反して内面に段が付き、肩部の稜の下部が残存する。6は甕の肩部で、外面は平行文タタキの上に厚い自然釉を被り、内面は当具痕の痕跡が若干ナデ消されている。

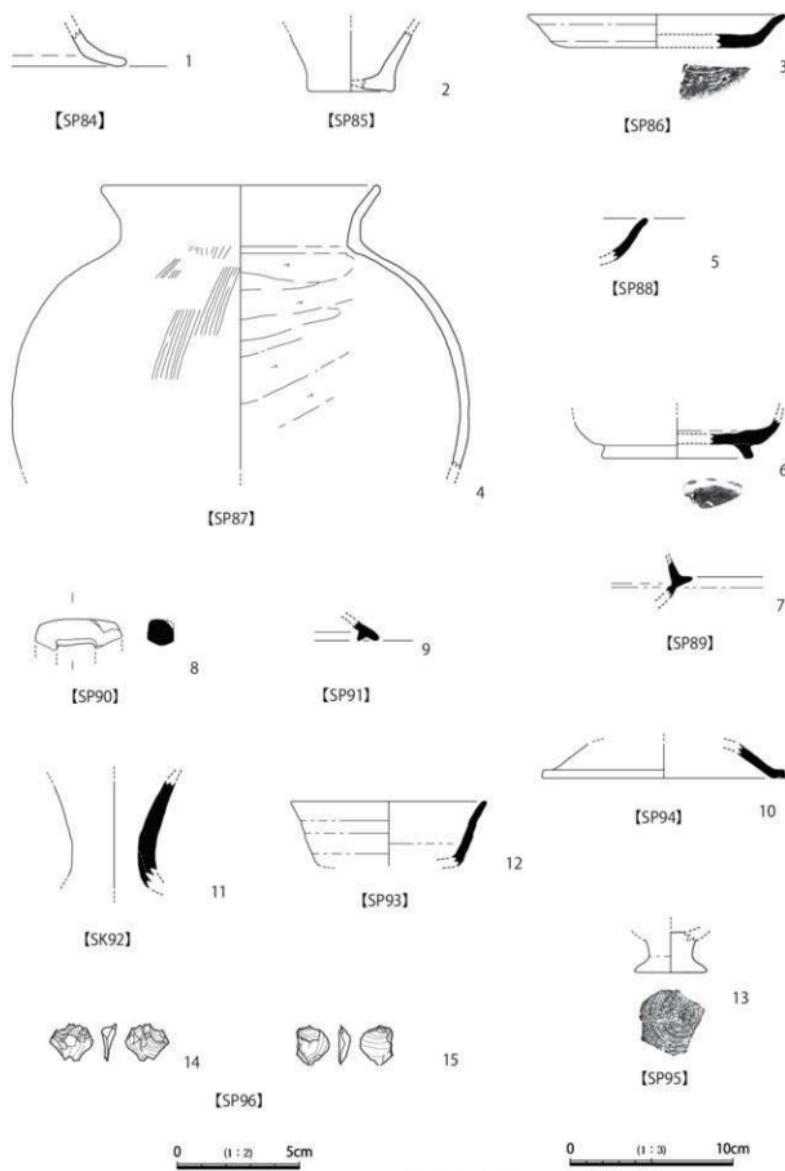
2. その他の遺構に伴う遺物(第51図)

1はSP84から出土した土師器高壺で、脚の裾部である。内外面とも風化が著しい。2はSP85から出土した弥生土器甕の底部である。二次的な火を受けて外面は薄い赤色を呈しており、調整は不明である。底径4.8cm。3はSP86から出土した須恵器無高台の皿である。回転ナデで成形され、底部は回転糸切である。焼成が悪く、やや軟質である。4はSP87から出土した土師器甕である。外面の頸から胴部にかけては縱方向のハケメ、内面は横方向のケズリが施されている。5はSP88から出土した須恵器皿である。調整は回転ナデ、焼成は軟質である。6,7はSP89から出土した須恵器である。6は高台付の壺で、高台は高めである。7は壺で、小片のため定かではないが、口縁が比較的直線気味に立ち上がる。8はSP90から出土した須恵器のやや小型の平瓶の把手であろう。全面へラで削って形が整えられている。把手上部の長さは4.7cm。9はSP91から出土した須恵器蓋である。内面にかえりが付くもので、調整は回転ナデである。10はSP94から出土した須恵器蓋である。口縁端部内面に凹線が施されたS字状口縁を呈している。11はSK92から出土した須恵器長頸壺で、頸から口縁の立ち上がる部分である。12はSP93から出土した須恵器の壺である。器壁が直線的に立ち上がり口縁端部が若干反る。13はSP95から出土した土師器柱状高台である。底部は回転糸切である。

14と15はSP96から出土した石製品の剥片である。14はメノウの剥片で、2次加工はみられない。15はガラス質の石材で、薄い緑色を呈している。これも二次加工の無い剥片である。

3. 遺構外出土遺物(第52、53、54図)

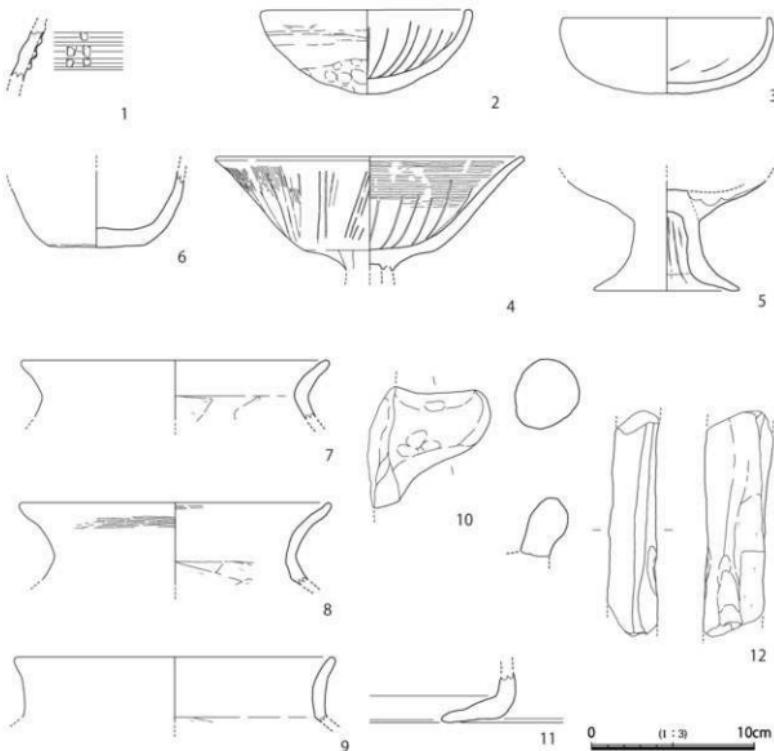
第52図1は、弥生土器壺の口縁部である。断面三角形の突帯が最低4本はめぐり、そこに2本の棒状浮文が貼り付けられている。突帯は幅が狭くて低い。2～9は土師器である。2は壺で、ハケメで形状を整えた後、内面は丁寧なミガキを施した後に放射状の暗文で飾っている。外面はハケメが残る粗い仕上げで、全面に赤色顔料が塗布されている。3は壺で、内面は立ち上り部分が横ナデ、見込み部分がミガキで、外面は器面剥離しているが、一部にハケメが残る。4は高壺の環部で、口縁は端部がよく開き、外面は一面に縦方向のハケメ、内面は上半分が横方向のハケメ、見込みはミガキで整えた後に放射状の暗文で飾られており、全面に赤色顔料が塗布されている。5は高壺の脚部である。器面剥離しているが、上部内面に絞り痕が残る。6は壺の底部か小型の壺である。内外面とも風化の



第51図 その他の遺構に伴う遺物実測図

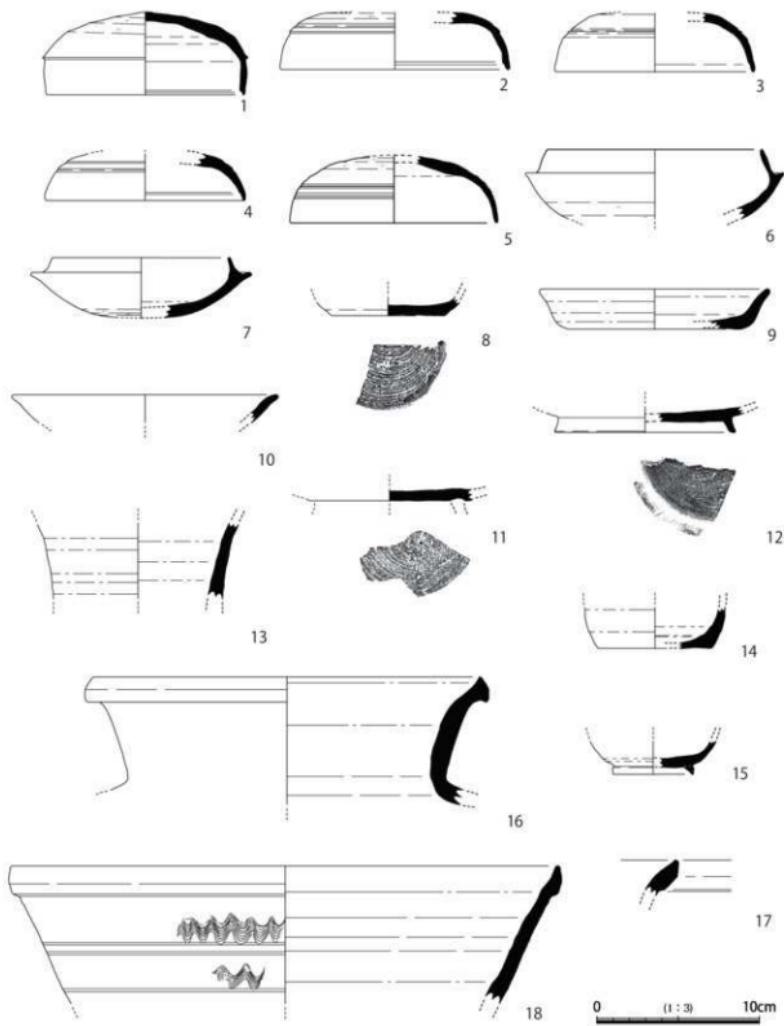
ため調整は不明だが、内外面に赤色顔料が付着している。7～9は蓋の口縁部で、すべて単純口縁である。10は大きめの把手で、懸または移動式カマドに付けられていた可能性がある。11、12は移動式カマドの一部で、11は焚口の底部分、12は焚口右側の肥厚部分である。

第53図はすべて須恵器である。1～5は蓋で、1は肩部の稜が高くシャープで、口縁端部内面には明瞭な段がつく、大谷編年の出雲1期に該当する。2は肩部の稲が丸味を帯びて、その内側には凹線がめぐり、回転ヘラケズリの範囲が広い。大谷編年の出雲4期に該当する。口縁端部内面の段は明瞭だが丸味を帯びる。3は肩部に浅い沈線が二重にめぐり、回転ナデが広いようだ。口縁端部内面には浅い沈線がめぐらされている。大谷編年の出雲4期に該当する。4は比較的低い位置に浅い沈線が二重にめぐり、口縁端部内面に段はみられない。大谷編年の出雲5期に該当する。5は肩部に浅い沈線が二重にめぐり、回転ヘラケズリの範囲は若干広いようだが、口縁端部内面に段はみられない。



第53図 遺構外出土遺物実測図(1)

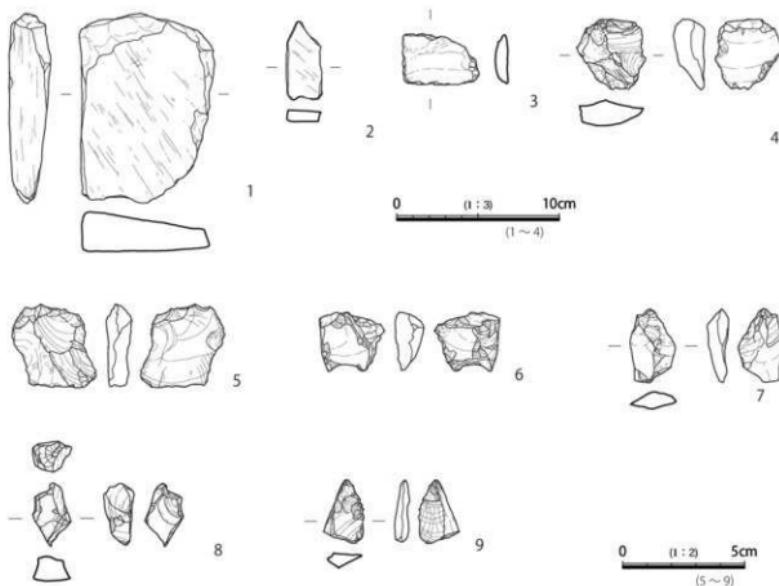
6は環で、口縁は比較的高いが、やや内傾している。底部外面の回転ヘラケズリの範囲は広めである。7も環で、口縁が低く内傾するもので、底部外面の回転ヘラケズリの面積は狭い。8は無高台の环の底部である。焼成が良く、器壁はふくらみながら立ち上っている。9は無高台の皿で、焼成があまい。



第53図 遺構外出土遺物実測図(2)

10も皿の口縁部の小片である。11と12は高台付きの皿で、底部外面は回転糸切である。11は高台が剥離している。13は長頸壺の頸の一部で、内外面とも回転ナデ調整である。14は小型の壺の底部である。外面は自然軸のため調整不明、内面は回転ナデが施されている。15は高台付きの小型の壺の底部である。内外面とも回転ナデ調整。16～18は甕の口縁部である。16は肥厚した口縁端部が丸味を帯びるものである。17は口縁端部外面の肥厚帯の断面が緩い山形を呈している。18は口縁端部外面の肥厚帯の断面が緩い山形を呈し、その下に波状文、2本の沈線、さらに波状文、1本以上の沈線がめぐらされている。焼成があまく軟質で、灰白色を呈している。

第54図はすべて石製品で、1は砥石である。石材は不明。広い面の片側と幅の狭い側面に使用痕があり、滑らかである。2も砥石である。広い面の両面に使用痕がみられる。3は性格不明の石器である。石材は不明である。断面が丸味を帯びている面はよく磨かれており、裏面は平らな面が作り出されている。下の直線部には連続押圧剥離が施されており、ここが刃部と思われる。刃部は使用痕で丸味を帯びている。4はメノウ、5は玉髓の剥片で、ともに二次加工はみられない。6は玉髓の剥片で、弧を描く連続押圧剥離が施されている。7は玉髓、8は黒曜石の剥片で、ともに二次加工はない。9も黒曜石の剥片で一辺に連続押圧剥離が施されているが、成品ではない。



第54図 遺構外出土遺物実測図(3)

第7節 D区

D区は調査区の北辺27mと東辺116mについて幅1.5m、深さ70cmまでの調査の掘削を行い、細長い調査区が広域にわたる(第3、4、56図)。以下では北辺と東辺に分けて説明する。

北辺 L2区(西端)～P2区(東端)である。B区北辺から東に続く調査区で、地形は西から東へ緩やかに下がり、標高15.6～16.5mを測る。

土層(第57図A-A')は、西側半分はB区北辺と同様で、かつての耕作土(3層5層、8層)直下が地山である。東側半分では徐々に地山が深くなっているが、東端最下層の16層(褐色土)はナイロンが混じる現代の層である。西寄りにある16層の下に位置する17層(褐色砂質土)については遺物を含まず時期は不明だが、締まりが無い層である。

地山面では多くの溝や落ち込みを検出したが、近世以前の遺物を含むものは少なく、出土した遺物は割口が丸味を帯びた小さなものが大半を占めており、出土量は少なかった。このことから現代に削平を受けた場所と判断する。

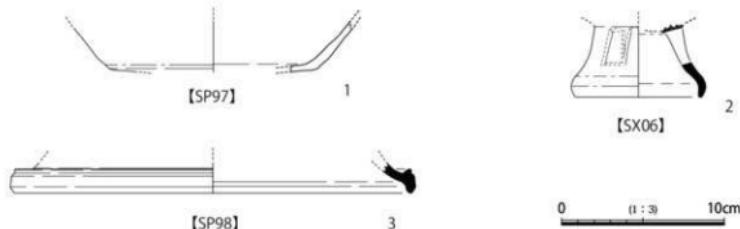
東辺 N25区(南端)～Q2区(北端)である。東の谷部との境界地にあたり、標高は16.0m前後を測る。

土層(第57図B-B'、C-C'、第58図D-D'、E-E')は、耕作土(1層)の下に客土層(2、3層)があり、その下が地山(34層)である。客土層は耕作に向く土質ではなく、丘陵端部を固めたものと思われる。客土層(3層)上面から掘り込まれた現代の便槽を確認したので、2層は住宅が撤去された後の客土である。¹⁵地山はN25区(南端)から北のN9区まで検出しているが、O8区～Q2区(北端)の間では検出していない。

地山面では、ピットや土坑、性格不明の落ち込みを検出している。ピットの半截で柱痕が確認できるものは無かった。遺構埋土からは古墳時代の遺物が出土している。

1. 遺構に伴う遺物(第55図)

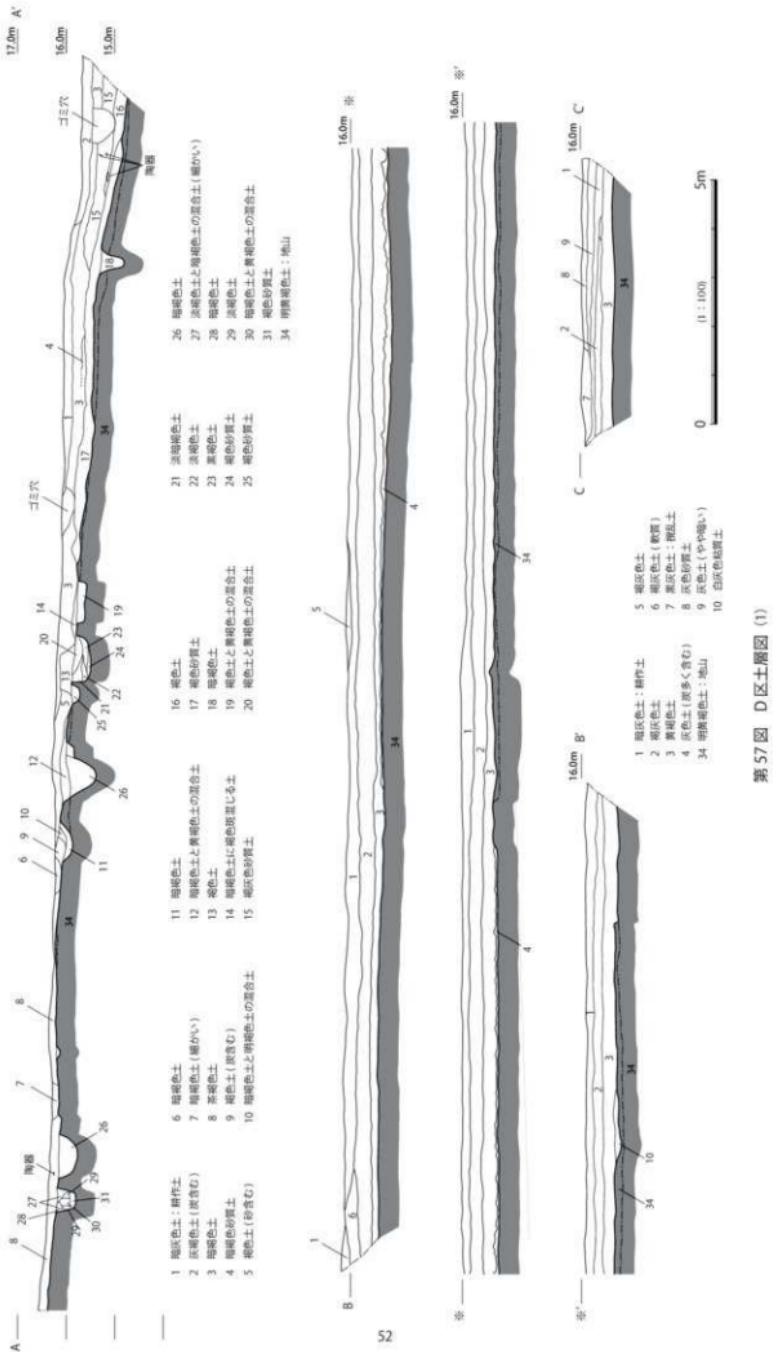
1はSP97から出土した、土師器の高环の環部破片である。内外面とも風化している。2はSX06から出土した須恵器の高环の脚部である。3方向に透かしを持つもので、カキメは明瞭でなく、裾の形狀は簡略化されて丸く内傾しており、焼成があまい。大谷編年の出雲2期にあたる。3はSP98か



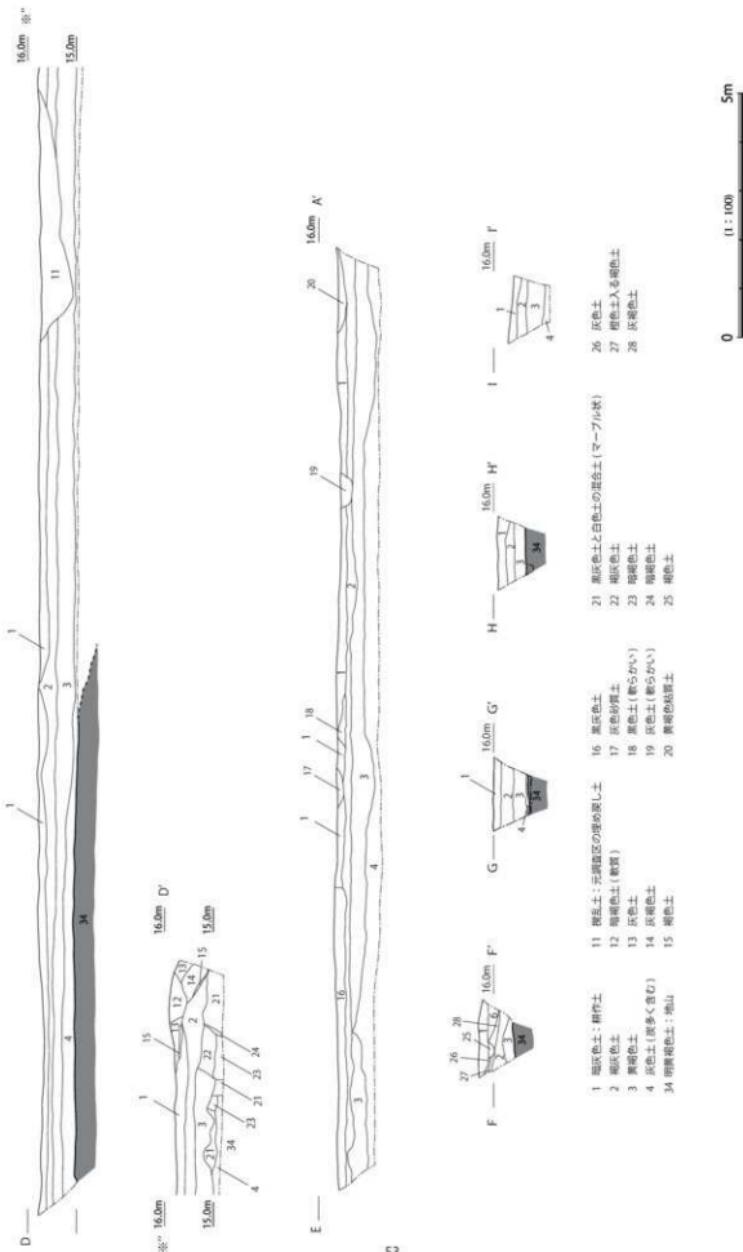
第55図 遺構に伴う遺物実測図



第56図 D区平面図



第57図 D区土層図 (1)



第58図 D区土層図(2)

ら出土した須恵器の器台、もしくは壺の脚の裾部と思われる。

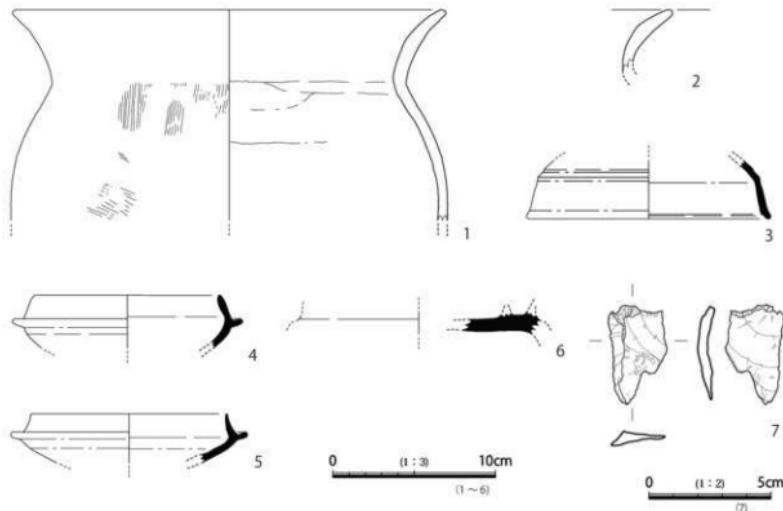
2. 遺構外出土遺物(第59図)

1と2は土師器の壺である。1は外面が頸部から胴部にかけて縦方向のハケメ、内面は横方向のケズリが施されている。外面の一部に赤色顔料が付着している。2は口縁の小片である。

3～5は須恵器で、いずれも耕作の影響を受けて傷みが著しい。3は蓋で、肩部には低い稜がめぐり、その内側に浅いス線がめぐらされている。口縁端部はやや外反し、内面には明瞭な段が付けられている。4は環で、口縁はやや低く内傾し、受部が突出している。5は環で、口縁は低く内傾している。

6は円面硯である。あまり使い込まれていないが、傷みが著しい。海の径は9.5cm。

7はメノウの剥片である。二次加工はみられない。



第59図 遺構外出土遺物実測図

【第3章 註】

- 自然堆積した包含層ではなく、後世に耕作土として持ち込まれた包含層と思われる。
- 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『山ノ神遺跡・五反田遺跡』1998年3月
- 刃の周囲の土をサンプル採取して跡かけと洗浄を行ったが、鍛造剝片等は検出できなかった。
- 調査前の耕作者の話では、畑の地盤を上げるために地盤改良を行ったとのことである。
- 近隣の方の話によれば、この辺りではD区のB-C'からB区の赤道を通るルートが下東川津へ行くメインルートであり、昭和初期にはこの道べりに民家が建っていたとのことである。

第4章 総括

大庭小原遺跡は大庭段丘の北端付近にあたり、北に向かって舌状に派生する低丘陵の末端に位置している。今回調査を行ったのは丘陵頂部から東側の緩斜面の一部分である。以下では、今回の調査成果を時代順にまとめ、これまで実施をしてきた調査成果とあわせて丘陵上の遺跡について整理する。

1. 今回の調査のまとめ

今回の調査地で最も古い遺構は弥生時代中期後半の袋状貯蔵穴で、3基(SK57、SK58、SK59)を確認した。住居跡は検出できなかったが、SK59から加工途中のグリーンタフ(第42図8)が出土し、弥生時代の遺構に伴うものではないが、管玉の未成品(第46図2)や玉砥石(第37図1)も出土したことから、玉作を行う集団が居住していたことが想定される。弥生時代後期に入ると包含層中にその時期の遺物が全くみられなくなり、集落全体が他の場所に移転したことが窺える。

再度ここに集落が営まれたのは古墳時代前期のことと、竪穴建物跡1棟(SI02)の一隅を検出した。ところが、この後から中期前半にかけては集落が縮小されたのか、今回の調査区内では遺構が検出されず、遺物は包含層から出土した甕の口縁の破片1点だけ(第17図1)であった。古墳時代中期後半～後期前半にかけては再び人々の活動が活発になり、中期後半頃と推定される竪穴建物跡2棟が並ぶように検出された。南の1棟(SI04)からは底がガラス質となった炉が検出され、これは一般的な煮炊きを行っていたものとは思われず、高温を必要とする何らかの工房であった可能性が高く、周辺の土を洗浄して鍛造剥片を探してみたが、見つけることはできなかった。他の1棟(SI03)も焼土が厚く、2棟は一対の作業場であったと想定される。また、平面プラン不明の遺構(SX05)では狭い調査区から古墳時代中期末頃の土器類が大量に出土している。

古墳時代後期後半にも引き続き人々が居住しており、1辺2m程度の小型で無柱の竪穴建物跡(SI03)が検出され、似たような遺構が複数確認されている(SX01、SX03、SX04)。

古墳時代末期になると包含層中の遺物量が減少するが、奈良時代には再び遺物の量が増加している。C区では古代の柱列SA03を検出し、埋土は黒色系と黄色系の土が互層に詰められた状況が確認された。このSA03は掘立柱建物跡を構成する柱穴列の可能性が高いと考えられ、調査区外西側に展開すると思われる。また、この他にも埋土中に古代の土器を含む小さなピットが複数確認されたことから、C区付近に生活圏域があったことが窺える。D区包含層から円面鏡の破片が出土したことも注目される。

中世の遺構は明確ではないが、C区のSP97から柱状高台が出土しているほか、包含層からも少量の遺物が出土している。引き続き土地利用が行われたことを裏付けるものである。

近世の遺構はB区のSI03埋土上面などで検出した平面プラン楕円形のピットがこれに該当する可能性があるが、建物跡の復元はできなかった。遺物は近世後半の陶磁器を表探した。

以上のとおり、今回の調査区では弥生時代中期後半から古墳時代、古代、中世、近世と、断続的に集落が営まれてきたことを明らかにすることができた。

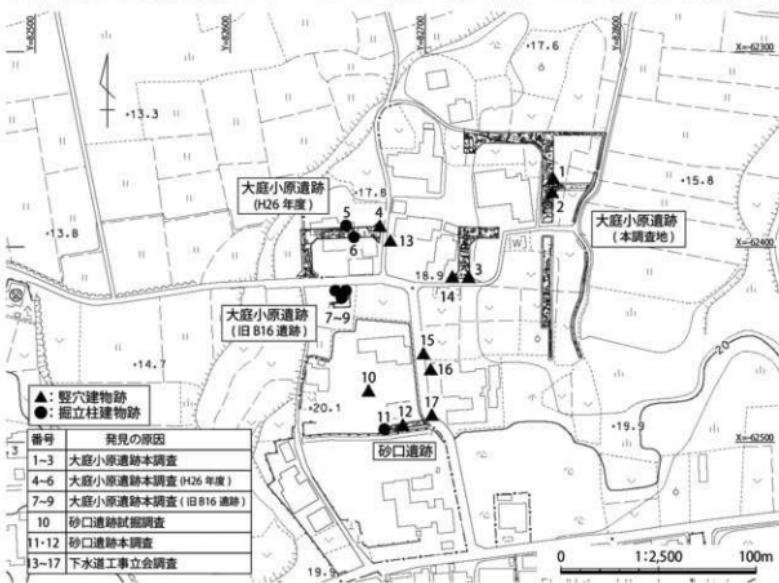
2. 大庭小原遺跡と周辺遺跡の変遷

大庭小原遺跡が立地する丘陵には砂口遺跡があり、これらはむしろ1つの遺跡と捉えるべきである(第60図)。この一帯で下水管工事立会が行われたときには豎穴建物跡を▲、掘立柱建物跡を●として第60図に掲載した。これに加えて、第62、63図で丘陵上の遺構について時代別に色分けを行い、第61図で包含層中の遺物も含めて各調査区での時代的変遷を表現した。

以下では、時代ごとにこの丘陵に位置する遺跡の変遷を見していく。

弥生時代 丘陵の縁辺部を中心に土坑を中心とした遺構が検出され(平成26年度調査区で袋状貯蔵穴が4基、今回の調査で袋状貯蔵穴が3基と円形土坑も3基)、丘陵中央付近の砂口遺跡でピットが検出されている。居住区域は丘陵の中心付近に存在していた可能性が高いが、建物跡は確認できていない。今回の調査区で検出した3基の袋状貯蔵穴(SK57、SK58、SK59)が全て削平された状態で検出されたことから、当時は丘陵全体の標高が高かった可能性も考えられる。後期に入るとこの時期の遺物は包含層からも全く出土しなくなり、集落は移転または廃絶したと考えられる。

古墳時代 前期に再び集落が営まれ、豎穴建物跡が2棟検出されている。うち1棟(第60図▲4)は炉を備えることから何らかの工房跡であったと思われる。前期後半～中期前半の遺構は検出されておらず、包含層中の遺物も極端に少ないとから、居住の中心が移動したと考えられる。中期後半に入



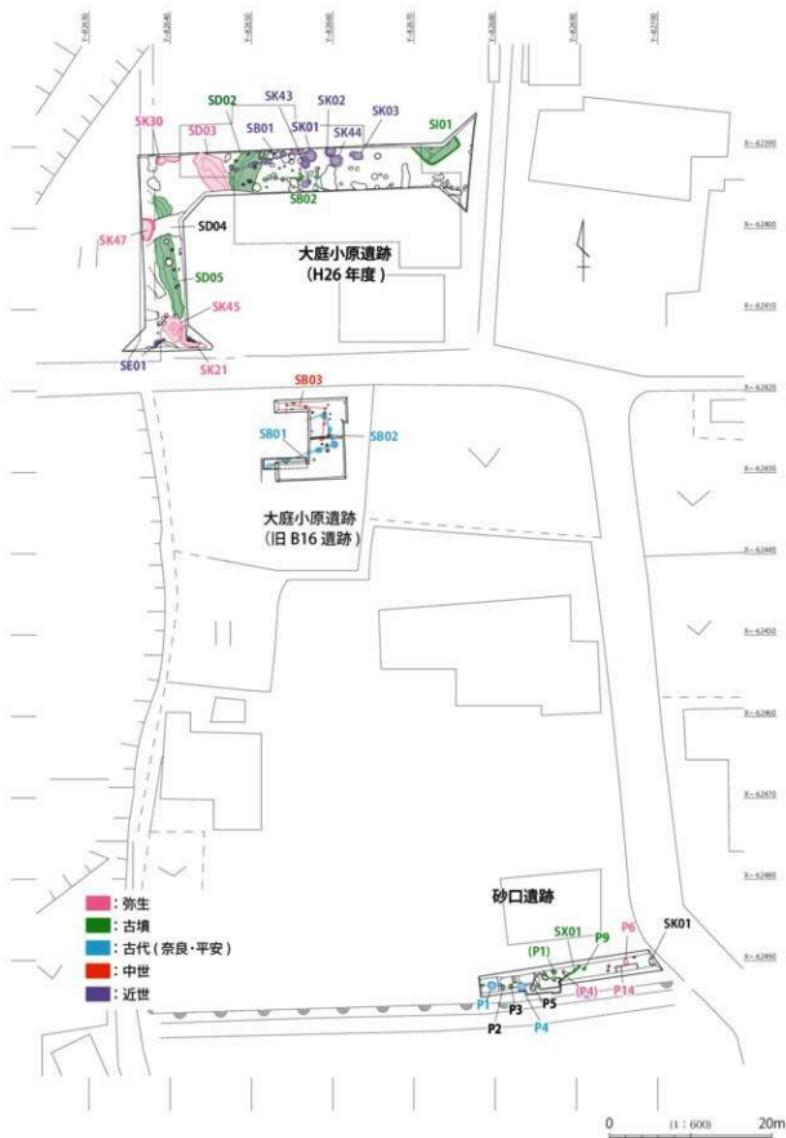
第60図 大庭小原遺跡と周辺の遺跡の位置図

		松本 編年	草田 編年	松山 編年	大谷 編年	国府 編年	砂口遺跡	大庭小原遺跡 (H26 年度)	大庭小原遺跡 (旧 B16 遺跡)	大庭小原遺跡 (今回調査)
弥生時代	前	I-1 I-2 I-3 I-4								
		II-1 II-2					■	■		
		III-1 III-2 IV-1 IV-2					■	■		
		V-1 V-2 V-3 V-4	1期 2期 3期 4期							■
	中	5期 6期 7期	I期 II期 III期 IV期	I期 II期 III期 IV期	I期 II期 III期 IV期		■			■
						1期 2期 3期	■	■		■
							■	■		■
	後					4期 5期 6期	■		■	
							■		■	
古墳時代	前									
										■
	中									■
										■
古代										
中世							■			
近世	前半								■	
	後半									■

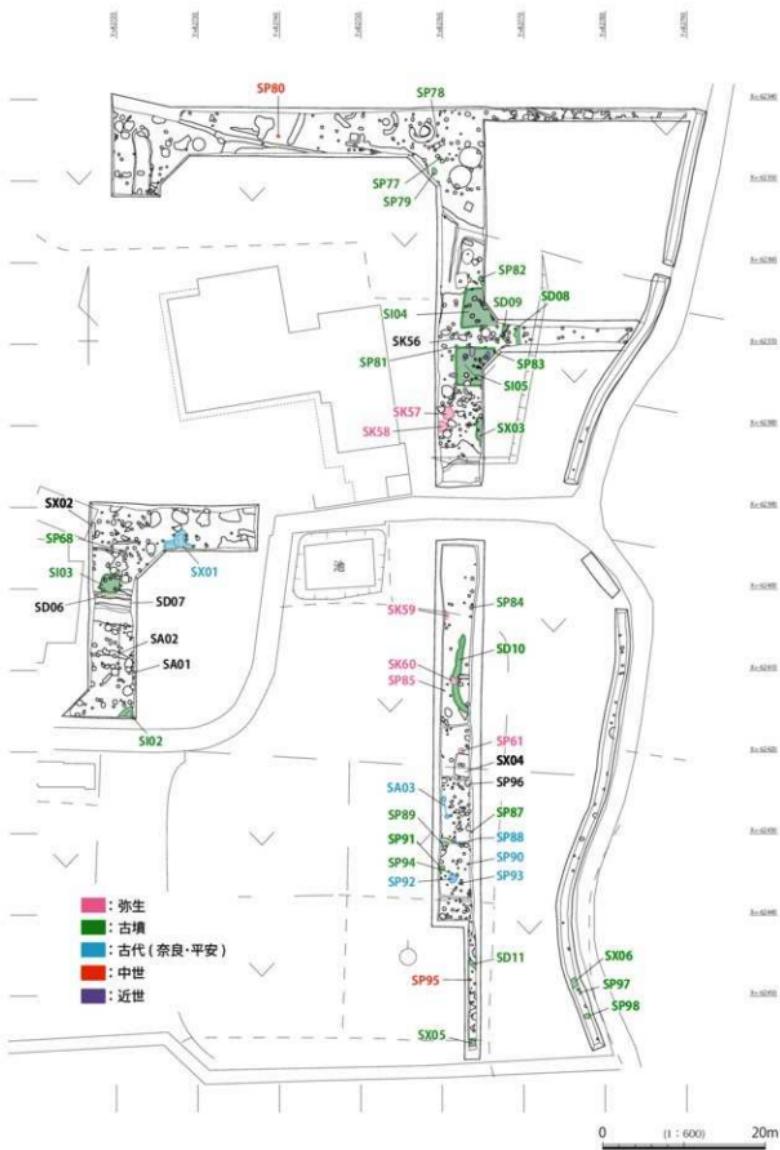
第61図 大庭小原遺跡と砂口遺跡の遺構、遺物の消長

ると、H26年度調査区で溝が検出され、砂口遺跡で竪穴建物跡が検出されている。また、中期後半には今回の調査区の湧水池の近くで水際祭祀の可能性がある遺構を検出したほか、工房跡と考えられる竪穴建物跡2棟を検出した。後期の住居は当地では一般的に竪穴建物から掘立柱建物に移行する時期にあたり、H26年度調査区の掘立柱建物跡SB02が居住跡になると思われるほか、今回の調査区では小型無柱の竪穴建物跡SX01やこれに類するかもしれないSX03、SX04などが検出されている。包含層にはこの時期の遺物が多い。

古代 意宇平野に国府が置かれ、そこを中心として主要施設が構築される時期である。国府から本遺跡への直線距離は約2.5kmであり、本遺跡の南方200～300mに古代山陰道が東西方向に走ると推定されている。本遺跡は国府域に比較的近い場所であり、いわば国府外縁部ともいえ、ここに集落跡が営まれていた。建物跡としては、旧B16遺跡のSB01、SB02、砂口遺跡でのP1～P4からなる掘立柱建物跡が注目される。これらの柱穴は平面プランが直径0.9～1.0mの円形と大きいもので、埋土は黒色系と黄色系の土が互層に詰められたものであった。掘立柱建物跡の一部を検出したものであるが、比較的大型の建物が建っていたと想定される。今回の調査区で検出した柱跡SA03は平面プラン円形で直径50cmの小さな柱穴から成るものであるが、埋土は黒色系と黄色系の土が互層に詰めら



第62図 大庭小原遺跡と砂口跡の遺構配置図（1）



第63図 大庭小原遺跡遺と砂口遺跡の遺構配置図（2）

れており、小規模な掘立柱建物跡の一部となる可能性が高い。また、落ち込み SX02 からは土製支脚や甕、壺といった調理関連の遺物がまとめて出土した。包含層にはこの時期の遺物が多く、円面鏡の破片が 1 点出土している。

中世 旧 B16 遺跡で掘立柱建物跡 SB03 が見つかっており、この建物跡は近世にもかかる可能性がある。H26 年度調査では包含層から 14 ~ 16 世紀の龍泉窯産の青磁碗が 1 点出土し、砂口遺跡では包含層から中世須恵器の破片が出土している。今回の調査では 12 世紀頃の柱状高台の破片が包含層とピット内 (SP80, SP90) から出土しており、人々の生活が続いているようである。

近世 H26 年度調査区で掘立柱建物跡 SB01 が見つかったほか、井戸 1 基 (SE01) と土坑 6 基 (SK01, SK02, SK03, SK43, SK44, SK45) が検出されてたが、すべて後半期の遺構である。今回の調査区では平面プラン格円形のピットは近世のものと推察しているが、掘立柱建物跡を復元することはできなかった。遺構埋土から遺物は出土しておらず、地表面で近世後半期の陶磁器破片が表採された。

以上、これまでの調査を含めて大庭小原遺跡周辺の様相を時系列にみてきた。低丘陵を囲む谷地形は稻作に適しており、丘陵上の平坦面は居住の他に畠地としても利用されてきたと推定される。遺物が少ない時期は畠地として土地活用が行われていた可能性も十分に考えられるであろう。

4. 結語

今回の大庭小原遺跡発掘調査は、遺跡の東側についての調査を行った。その結果、最も古い遺構はこれまでの調査成果と変わらず弥生時代中期後半であったが、ここで玉作を行っていたことが新たな知見となった。

また、H26 年度調査では古墳時代前期の炉を備える竪穴建物跡が見つかっていたが、今回の調査では古墳時代中期後半の炉を備えた竪穴建物跡 1 棟と厚い焼土を持つ竪穴建物跡 1 棟が検出された。この 2 棟は意図的に隣接配置されたであろうことは明らかである。今回の調査では工房で製作された対象物を明らかにすることはできなかったが、今後の調査に期待したい。

【第4章 註】

- 下水道工事立会調査で見つかった竪穴建物跡は▲13 ~ ▲17 である。▲15 は方形の竪穴建物跡で須恵器や土師器といった遺物から 5 ~ 6 世紀頃と思われる。その他の竪穴建物跡については極めて部分的な検出であり詳細は分からぬが、古墳時代以前のものである可能性が高い。

【第4章 図】

第 61 図 島根県松江市教育委員会、公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團 (2018)『大庭北原遺跡・東淵寺古墳・大庭植松遺跡』第 39 図を一部改変して作成した。

土器

辨別番号	種類	器 横	法 長 (cm)	胎 土	構 成	色 調	調整・手法の特徴	備 考
9-1	土器器	盃 (1784部)	口径 (10.8)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 風化が著しく調整不明 内: 風化が著しく調整不明	長頭面
9-2	土器器	盃 (1784部)	口径 (22.2)	1mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: コロナデ 内: コロナデ	
9-3	土器器	甕 (26.4)	口径 (21.3)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ヨコ方向のケズリ 内: ヨコ方向のケズリ	複合口縁
9-4	土器器	甕 (くわね縁)	—	2mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 粉褐色 内: 粉褐色	外: 表面磨擦のため調整不明 内: 表面磨擦のため調整不明	
11-1	土器器	甕 (25.0)	口径 (20.7)	2mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: タキシヨリのケズリ 内: タキシヨリのケズリ	
11-2	土器器	高杯 (脚部)	底径 (0.8)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ハナメ 内: ナデ	内部底部 春形模様
11-3	須恵器	甕	口径 (10.6) 受部径 (13.2) 底径 (4.1)	2mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	外: 順回転～逆回転 内: 黄褐色	外: 回転～ケズリ、回転ナデ 内: 回転ナデ	大谷編年 出土4期
11-4	土器器	瓶 (把手)	長さ (3.4)	2mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ケズリ、ナデ、指押さえ	
11-5	土器器	カマド	—	0.5～2mmの石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色～逆回転 内: 黄褐色	外: ハナメ、ナデ 内: ナデ、指押さえ	
17-1	土器器	甕 (20.2)	口径 (15.5)	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ナデ 内: ナデ、ケズリ	複合口縁
17-2	土器器	甕 (17.0)	口径 (14.2)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黑褐色～にじ～暗褐色	外: タキシヨリのケズリ	
17-3	土器器	甕 (15.6)	口径 (14.7)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黑褐色～にじ～暗褐色	外: タキシヨリのケズリ	外: 保村君
17-4	土器器	甕 (11.2)	口径 (9.7)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黑褐色～にじ～暗褐色	外: タキシヨリのケズリ	
17-5	土器器	甕 (32.0)	口径 (28.9)	1.5mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 風化が著しく調整不明 内: 風化が著しく調整不明	
17-6	土器器	瓶 (26.6)	口径 (21.5)	1mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色～淡褐色 内: 黄褐色～淡褐色	外: コロナデ、タキシヨリのハケぬナデ 内: コロナデ、ナタヨリのケズリ	
17-7	須恵器	甕 (9.3)	口径 (4.3)	4mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色～淡褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナデ、回転ナデ、回転後コロナデ	須恵口縁
17-8	須恵器	甕 (底部)	底径 (10.0)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナデ、回転ナデ、回転ナデ 内: ヨコ方向のナデ	
17-9	須恵器	甕	底径 (11.2)	3mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色～にじ～暗褐色 内: 黄褐色～にじ～暗褐色	外: 回転ナデ、回転ナデ	内外底部 有機質付着
17-10	土器器	土器脚 (脚部)	中 (9.3)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 指ナデ	
18-1	須恵器	甕	受部径 (14.0)	4mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 指ナデのため調整不明 内: 指ナデ	外: 自然腐付着
19-1	骨器	甕	口径 (19.0)	2mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色～暗褐色 内: 黄褐色～暗褐色	外: 風化が著しく調整不明 内: 黄褐色～暗褐色	外: 保村君 利田吉田南庄 文鏡城ぐら 墓中出土
19-2	骨器	甕 (底部)	底径 (3.0)	1mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色～暗褐色 内: 黄褐色～暗褐色	外: ナデ、ミガキ 内: ケズリ	墓中出土
19-3	土器器	甕 (16.2)	1～2mmの石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色～淡褐色 内: 黄褐色～にじ～暗褐色	外: 風化が著しく調整不明	墓中出土	
19-4	須恵器	甕 (高台部)	底径 (0.9)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	外: 黄褐色～灰白色 内: 黄褐色～灰白色	外: 指ナデ 内: 指ナデ	墓中出土
19-5	須恵器	(脚部)	底径 (10.0)	0.5mmの砂粒をわずかに含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	墓中出土
19-6	須恵器	甕	—	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 平タカキ 内: 青海波状タカキ	墓中出土
19-7	土器器	カマド (底部)	高さ (12.5) 幅 (5.6) 厚さ (1.9)	1～2mmの石英。長石多く含む	良好	外: 暗褐色 内: 暗褐色	外: ナデ	墓中出土
23-1	須恵器	甕	—	1mm以下の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転～ケズリ、回転ナデ 内: 回転ナデ	
23-2	須恵器	甕	—	1mm前後の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: カキナ、ナデ	波次文有り
23-3	須恵器	(脚部)	—	微砂粒をわずかに含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: タキシヨリカメ 内: タキシヨリナデ	
23-4	須恵器	(脚部)	—	1mm前後の砂粒を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: タキシヨリカメ 内: タキシヨリ	
23-5	土器器	カマド (底部)	全高 (9.45) 幅 (3.3) 厚 (3.7)	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ナデ 内: ナデ	外: 保村君
23-6	土器器	カマド (接脚部)	直径 (30.4)	1mm前後の石英。長石を含む	良好	外: 暗褐色 内: 暗褐色	外: ハナメ 内: 相切り直	
25-1	土器器	甕 (底部)	口径 (22.6)	1mm前後の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ナデ、ケズリ	
25-2	土器器	甕 (底部)	口径 (17.8)	1mm前後の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ハナメ後コロナデ 内: ヨコ方向のケズリ	
25-3	土器器	甕 (底部)	口径 (16.0)	2mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ハナメ後コロナデ 内: ヨコ方向のケズリ	
25-4	土器器	甕 (底部)	口径 (22.8)	1mm前後の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ナデ 内: ナデ	
25-5	須恵器	甕	口径 (12.2) 受部径 (14.6) 底径 (5.3)	砂粒を含む	不良	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 回転ナデ、ケズリ 内: 回転～ケズリ	
25-6	須恵器	甕	口径 (14.6)	2mm以下の砂粒をわずかに含む	不良	外: 黄褐色～灰白色 内: 黄褐色	外: 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内: 回転ナデ	
25-7	須恵器	甕 (脚部)	—	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	やや不良	外: 黄褐色～灰白色 内: 黄褐色～灰白色	内: ナデ	
25-8	土器器	カマド (底部)	—	4mmの石英 1kg所、1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ハナメ 内: ナデ、指押さえ	
30-1	骨器	甕 (18.0)	—	1mm以下の石英。長石を含む	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: ナデ 内: 風化が著しく調整不明	外: 口縁端部に2条の線 内: 口縁端部に表文
30-2	骨器	甕 (底部)	底径 (5.2)	1mm以下の石英。長石を含む	やや不良	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 風化が著しく調整不明 内: 風化が著しく調整不明	
34-1	須恵器	甕	受部径 (15.3)	0.5mm前後の黒褐色の砂粒をわずかに含む	良好	外: 黄褐色～灰白色 内: 黄褐色	外: 自然輪付着 内: 回転ナデ	

遺物観察表

土器

発掘番号	種類	形種	法寸 (cm)	胎 土	焼成	色 調	調整・手法の特徴	備 考	
35-1	須恵器	环	受部径 (14.4)	0.5mm以下の白・黑色砂利をわずかに含む	良	外 黄褐色 内 風化色	外 回転ナデ 内 回転ナデ		
35-2	須恵器	環	(134.5部)	—	0.5mm以下の砂利をわずかに含む	良	外 オリーブ灰褐色 内 オリーブ灰褐色	外 ハケナデ 内 ハケナデ	
35-3	須恵器	壺	口径 (3.0)	1mm以下の白・黑色砂利をわずかに含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 漢流器	
35-4	土師器	高付口付 (4枚足)	直径 (5.0)	2mm以下の石英、長石を含む	良	外 明黄褐色 内 明黄褐色	外 回転ナデ、回転系切		
35-5	須恵器	壺	受部径 (14.2)	0.5mm以下の砂利をわずかに含む	良好	外 灰褐色 内 白色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ	外 自然輪付器	
35-6	須恵器	壺	(鉢部)	—	0.5mm以下の砂利をわずかに含む	やや不良	外 灰褐色 内 灰褐色	内 回転ヘラケズリによる波状文	
35-7	須恵器	环	(口径 0.2.1)	1mm以下の砂利を含む	やや不良	外 灰褐色~黄褐色 内 白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	焼きさずみ有り	
36-1	土師器	壺	(口径 0.4)	0.5 ~ 4mmの長石、黒石を含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 泥面磨のため調整不明 内 ケズリ	K9区出土	
36-2	土師器	壺	(口径 2.7)	0.5 ~ 3mmの砂利を含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 泥化が著しく調整不明 内 ケズリ	K9区出土	
36-3	土師器	高付口 (枝足)	直径 (1.0)	1mm以下の石英、長石、赤色の粉を含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 泥面ナデ、回転系切 内 ナデ	魔土器	
36-4	須恵器	壺	口径 (0.2.2)	1mm以下の砂利をわずかに含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内 回転ナデ	K8区出土	
36-5	須恵器	壺	(口径 0.3.4)	0.5mm以下の砂利をわずかに含む	良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	L8区出土	
36-6	須恵器	壺	(口径 0.2.6)	1mm以下の砂利をわずかに含む	良	外 灰白色~灰褐色 内 白色	外 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内 回転ナデ	L7区出土	
36-7	須恵器	壺	(口径 0.2.6)	1mm以下の砂利をわずかに含む	やや不良	外 灰褐色 内 黄褐色	外 回転ヘラケズリ 内 回転ナデ	L7区出土	
36-8	須恵器	壺	(口径 0.3.8)	3mmの砂利と2.0mmの砂利を含む	良	外 灰褐色 内 黄褐色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	L8区出土	
36-9	須恵器	壺	(口径 0.2.8)	1mm以下の砂利をわずかに含む	やや不良	外 灰褐色 内 黄褐色	外 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内 回転ナデ	L7区出土	
36-10	須恵器	壺	(口径 1.1)	2mm以下の砂利をわずかに含む	やや不良	外 灰褐色~灰白色 内 白色	外 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内 回転ナデ鏡面ナデ	L8区出土	
36-11	須恵器	环	(口径 0.2.0)	受部径 (1.4)	微細砂利をわずかに含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ、 内 回転ナデ鏡面ナデ	L7区出土
36-12	須恵器	环	(口径 1.4.2)	受部径 (1.4)	微細砂利を含む	不良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ、 内 回転ナデ鏡面ナデ	K7区出土
36-13	須恵器	环	(口径 0.2.6)	受部径 (1.4.7)	1mm前後の砂利を含む	良好	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ鏡面ナデ	魔土中田土
36-14	須恵器	环	(口径 1.5.2)	1mm前後の砂利をわずかに含む	やや不良	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ	魔土中田土	
36-15	須恵器	环	受部径 (1.5.2)	1mm前後の砂利を含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ	魔土中田土	
36-16	須恵器	环	(口径 0.3.5)	1mm前後の砂利を含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	魔土中田土	
36-17	須恵器	环	(口径 0.3.6)	1mm前後の砂利を含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	魔土中田土	
36-18	須恵器	高付口 (枝足)	口径 (4.0)	1mm以下の砂利を含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ	魔土中田土	
36-19	須恵器	环	(口径 0.1.8)	0.5mm以下の砂利を含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ、カキヌ 内 回転ナデ	魔土中田土	
36-20	須恵器	环	(鉢部)	直径 (0.2.0)	0.5mm以下の砂利を含む	良	外 白色 内 白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	魔土中田土
36-21	須恵器	高环	直径 (0.2.0)	1mm前後の砂利を含む	良好	外 白色 内 白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	万用通かし・魔土中田土	
36-22	土師器	壺	口径 8.0	0.5 ~ 1mmの石英、長石を含む	良	外 浅黄褐色 内 黄褐色	外 ナデ、ハケメ。ケズリ 内 ナデ	魔土中田土	
36-23	土師器	壺	直径 3.5	—	—	外 に赤い物へ浅黄褐色	外 ナデ	魔土中田土	
40-1	須恵器	高付口 (枝足)	今径 7.4	1mm以下の石英、長石を含む	良好	外 黄褐色 内 黄褐色	外 回転ナデ、回転系切 内 回転ナデ鏡面ナデ		
42-1	甕生	壺	(鉢部)	直径 28.2	1mm前後の砂利を多く含む	良	外 ぶい黄褐色 内 黄褐色	外 泥化が著しく調整不明	
42-2	甕生	(鉢部)	—	1mm前後の砂利を多く含む	良	外 不透明 内 黄褐色	外 不透明 内 黄褐色	泥化が著しく調整不明	
42-3	甕生	(鉢部)	直径 0.8.0	1mm以下の石英、長石を含む	良	外 浅赤褐色~淡黄褐色 内 浅黄褐色~淡赤褐色	外 ナデ 内 泥化が著しく調整不明	二次的に火を受けている	
42-4	甕生	(鉢部)	直径 35.8	3mmの黄褐色 1mm以下の石英、長石を含む	良	外 浅黄褐色~淡黄褐色 内 白色	外 ナデ 内 泥化が著しく調整不明	3列の火炎文	
42-5	甕生	(鉢部)	—	1mm以下の石英、長石を含む	良	外 浅黄褐色~淡黄褐色 内 白色~褐色	外 ナデ 内 泥化が著しく調整不明	内 ナデ、火炎文	
42-6	甕生	(直筒)	—	1mm前後の砂利を含む	良	外 浅赤褐色~淡黄褐色 内 白色	外 ナデ 内 泥化が著しく調整不明		
42-7	甕生	(直筒)	直径 0.0.9	2mm以下の砂利を多く含む	良	外 ぶい黄褐色 内 黄褐色	外 ナデ 内 泥化が著しく調整不明		
43-1	甕生	壺	(鉢部)	直径 22.0	2mm以下の石英、長石を含む	良	外 白色 内 白色~褐色	外 ナデ 内 泥化が著しく調整不明	
44-1	甕生	壺	(鉢部)	直径 4.7	1mm前後の砂利を含む	良	外 紫褐色 内 白色	外 泥化が著しく調整不明 内 泥化が著しく調整不明	二次的に火を受けている
46-1	土師器	壺	直径 11.7	2mm以下の砂利を多く含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 ハケメ		
47-1	土師器	壺	直径 0.2.6	2mm以下の石英、長石を含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 ハケメ 内 ケズリ・接ナデ		
50-1	土師器	壺	(鉢部)	(口径 0.3.0) 直径 0.0.9 底径 0.5	1mm以下の石英、長石を含む	良	外 浅黄褐色 内 浅黄褐色	外 泥化が著しく調整不明 内 泥化が著しく調整不明	
50-2	土師器	壺	(鉢部)	直径 (0.3.4) 直径 0.0.9 底径 0.5	1mm以下の砂利を含む	良	外 粉色 内 粉色	外 ハケメナデ 内 ハケメミガキ	

土器

博物館番号	種類	器種	法寸(㎝)	胎 土	構成	色 調	調整・手法の特徴	備 考
50-3	土師器	壺	口径(10.4)	0.5~4mmの石英、長石を含む	良	外: 浅黄褐色~にふい褐色 内: 浅黄褐色~灰褐色	外: ハケ、風化が著しく調整不明 内: ナギ、指押痕、ヘラケズリ	次的に火を受けている
50-4	土師器	壺	口径(20.4)	0.5mm以下の石英、長石を含む	良	外: 浅黄褐色~にふい褐色 内: 浅黄褐色~灰褐色	外: ナギ、タテ方向のハケメ 内: ヨコ(ア)後ナギ、ハラケズリ	
50-5	須恵器	环	口径(13.6)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外: 灰色~灰白色 内: 灰白色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	
50-6	須恵器	(环)	—	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外: 灰色~灰白色 内: 灰白色	外: ハケ、タテ方向のケズリ 内: ヨコ(ア)後ナギ	外面に自然釉付着
51-1	土師器	(高部)	—	微砂粒を含む	良	外: 灰色~灰白色 内: 棕色	外: 風化が著しく調整不明 内: 風化が著しく調整不明	
51-2	骨生	底径	底径(4.8)	2mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰褐色 内: 灰褐色	外: 風化が著しく調整不明 内: ナギ	次的に火を受けている
51-3	須恵器	环	口径(15.8) 底径(2.0)	微砂粒を含む	不良	外: 灰色~灰白色 内: 灰色	外: 回転ナデ、回転糸切 内: 回転ナデ、ヨコナデ	
51-4	土師器	壺	口径(17.2) 底径(14.8)	1mm前後の砂粒を含む	良	外: 棕色 内: にふい褐色	外: タテ方向のケズリ 内: ヨコ(ア)のケズリ	
51-5	須恵器	环	—	1mm前後の砂粒を含む	やや不良	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ 内: 風化が著しく調整不明	
51-6	須恵器	高台付环	底径(9.0)	1mm前後の砂粒を含む	良	外: 青灰色 内: 青灰色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ後ヨコナデ	
51-7	須恵器	环	—	1mm前後の砂粒を含む	良好	外: 雜褐色 内: 灰色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	
51-8	須恵器	(把手)	長さ4.7 直径1.5	微砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: ハラで面取り	平瓶か
51-9	須恵器	盖	—	微砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	
51-10	須恵器	盖	口径(14.9)	微砂粒を含む	良好	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	
51-11	須恵器	环	口径(4.1)	1mm前後の砂粒を含む	良好	外: 青灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	
51-12	須恵器	环	口径(12.0)	微砂粒を含む	良	外: 灰色 内: にふい褐色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	
51-13	土師器	(柱状 高台)	底径(4.4)	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外: にふい褐色 内: にふい褐色	外: 回転ナデ、回転糸切 内: 回転ナデ	
52-1	骨生	壺	—	微砂粒を含む	良	外: 明黄色 内: 明黄色	外: 面面削離のため調整不明 内: ナギ	地上中出土
52-2	土師器	环	口径(13.3) 底径(6.0) 高さ5.2	1mm以下の石英、長石を含む	良	外: にふい褐色 内: 浅黃褐色	外: ハマメ、ミギ後自然剥離に歯突	外側全体に赤色顔料壁上中出土
52-3	土師器	环	口径(16.0) 底径(6.0) 高さ4.7	0.5~5mmの石英、長石を含む	良	外: 棕色 内: 浅黃褐色	外: ハケメ、風化が著しく調整不明 内: ナギ、精文付与するときの歯痕あり	K19区出土
52-4	土師器	(环)	口径(19.0)	1mm以下の石英、長石を含む	良	外: にふい褐色 内: にふい褐色	外: ヨコ(ア)後自然剥離の歯突を施す	外側全体に赤色顔料壁上中出土
52-5	土師器	高环 (把手)	底径(9.0)	微砂粒を含む	良	外: 棕色 内: にふい褐色	外: ナギ後ナギ 内: ハマメ、面面削離	地上中出土
52-6	土師器	环	口径(6.0)	1mm以下の石英、長石を含む	良	外: 棕色 内: にふい褐色	外: 風化が著しく調整不明 内: 風化が著しく調整不明	外側全体に赤色顔料壁上中出土
52-7	土師器	环	口径(18.0)	1mm以下の石英、長石を含む	良	外: 淡褐色~にふい褐色 内: にふい褐色	外: ハケメ後ナギ 内: ハマメ	地上中出土
52-8	土師器	环	口径(18.0)	2mm以下の石英、長石を含む	良	外: 淡褐色~にふい褐色 内: にふい褐色	外: ハマメ後ナギ、ヘラケズリ	地上中出土
52-9	土師器	环	口径(18.6)	2mm以下の石英、長石を含む	良	外: 淡褐色~にふい褐色 内: 灰白色	外: ナギ、ケズリ	地上中出土
52-10	土師器	(把手)	口径(4.4)	0.5~8mmの石英、長石を含む	良	外: 淡褐色~にふい褐色 内: にふい褐色	外: ナギ後指印直痕	地上中出土
52-11	土師器	カマド (底部)	—	1mm前後の砂粒を含む	良	外: 淡褐色~にふい褐色 内: にふい褐色	外: 風化が著しく調整不明 内: 風化が著しく調整不明	地上中出土
52-12	土師器	カマド (底部)	口径(13.9) 高さ5.1	1mm以下の石英、長石を含む	良	外: 淡褐色~にふい褐色 内: にふい褐色	外: ナギ	傑作
53-1	須恵器	盖	口径(14.2)	2mm以下の砂粒を含む	不良	外: 灰色 内: 灰白色	外: 回転ナデ、ケズリ 内: 回転ナデ	K25区出土
53-2	須恵器	盖	口径(14.0)	1mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ、ケズリ 内: 回転ナデ	地上中出土
53-3	須恵器	盖	口径(12.2)	1mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ、ケズリ 内: 回転ナデ	地上中出土
53-4	須恵器	盖	口径(12.2)	1mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ、ケズリ 内: 回転ナデ	地上中出土
53-5	須恵器	盖	口径(12.8)	2mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ、ケズリ 内: 回転ナデ	地上中出土
53-6	須恵器	环	口径(13.2)	1mm以下の砂粒を含む	良	外: 暗灰褐色~灰白色 内: 灰白色	外: ハマメ、回転ケズリ 内: 回転ナデ	K25区出土
53-7	須恵器	环	口径(11.0)	1mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰色~灰白色 内: 灰白色	外: ハマメ、ケズリ 内: 回転ナデ	地上中出土
53-8	須恵器	环	口径(10.8)	2mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰色~灰白色 内: 灰白色	外: ハマメ、回転糸切 内: 灰白色	地上中出土
53-9	須恵器	环	口径(14.0) 底径(10.6)	2mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: ハマメ 内: 回転ナデ	K22区出土
53-10	須恵器	环	口径(16.2)	5mmの砂粒1個、直徑0.5mm以下の砂粒と黑色砂粒を含む	良	外: 灰色 内: 灰色	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	地上中出土
53-11	須恵器	高台付环	底径(11.2)	1mm以下の砂粒を含む	やや不良	外: 灰色~灰白色 内: 灰色	外: 回転ナデ、糸切後ナデ 内: 回転ナデ	内面フルしている 地上中出土
53-12	須恵器	高台付环	底径(11.2)	1mm以下の砂粒を含む	良	外: 灰白色 内: 灰白色	外: 回転ナデ、糸切後ナデ 内: 回転ナデ	内面フルしている 地上中出土

遺物観察表

土 器

辨認番号	種類	基 標	法 量 (cm)	胎 土	焼成	色 調	調整・手法の特徴	備 考
53-13	須恵器 (縦屈)	—	2mm以下の砂粒を含む	良好	外 灰白色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外面は自然輪 腹土中出土	
53-14	須恵器 (縦屈)	底径 7.0	1mm以下の砂粒を含む	良好	外 細灰褐色～灰白色 内 灰色	外 調整不明 内 回転ナデ	外面底部に自然輪 腹土中出土	
53-15	須恵器 (縦屈)	底径 4.9	2mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外 灰色～灰白色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	腹土中出土	
53-16	須恵器 (上縫部)	口径 23.0 底径 19.7	0.5～3mmの砂粒をわずかに含む	良	外 細オーリーブ色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	自然輪・K24区出土	
53-17	須恵器 (上縫部)	口径 23.0 底径 19.7	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外 オリーブ灰褐色～灰褐色 内 灰色	外 ナデ 内 ナデ	外面に自然輪・腹土出土	
53-18	須恵器 (上縫部)	口径 23.4 底径 19.7	1mm以下の砂粒をわずかに含む	やや不良	外 細白褐色 内 灰白色	外 回転ナデ後段灰又 内 回転ナデ	K25区出土	
55-1	土師器 窯	—	2mm以下の砂粒を含む	良	外 オリーブ灰褐色～灰褐色 内 灰色	外 ナデ 内 回転ナデ	黒化が著しく調整不明	
55-2	須恵器 (縦屈)	底径 5.8	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外 灰白色 内 灰白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	透かし 3 方角	
55-3	須恵器 (縦屈)	底径 24.5	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	やや不良	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外面 わずかに自然輪か からみ	
59-1	土師器 甕	口径 26.1	2mm以下の石片、長石を含む	良	外 浅黄褐色 内 灰色	外 ナデ, ハケ 内 ハケ	腹土中出土	
59-2	土師器 (上縫部)	—	1mm以下の石片、長石を含む	良	外 オリーブ灰褐色 内 オリーブ灰褐色	外 ナデ 内 ナデ	腹土中出土	
59-3	須恵器 甕	口径 15.0	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外 灰白色 内 灰白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外面 自然輪 腹土中	
59-4	須恵器 甕	口径 11.5	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外 灰色～灰白色 内 灰白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外面 青ね焼き面あり 腹土中出土	
59-5	須恵器 甕	口径 12.0 受部径 11.6	2mm以下の砂粒をわずかに含む	良	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	腹土中出土	
59-6	須恵器 円筒瓶	—	1mm以下の砂粒を含む	不良	外 灰褐色～細灰褐色 内 回転ナデ	外 順度残る 内 回転ナデ	腹土中出土	

石 器

辨認番号	種 類	法 量 (cm・g)	石 材	備 考
9-5	禮石	縦 2.2 幅 7.5～5.9 重さ 510		表面はよく磨かれている 両端に敲打の使用痕残る。一部赤色顔料残る
26-1	臼石か	長さ 20.8 橫 13.2 厚さ 3.6 重さ 2035.0		敲打の使用痕有り
26-2	砾石	縦 14.3 橫 7.2 厚さ 2.4 重さ 426.67		使用痕残る
26-3	剥片	縦 4.3 橫 3.5 厚さ 0.9 重さ 14.95	ぬのう	
28-1	打製石斧	基部幅 2.0 縦 10.8 橫 6.1 厚さ 2.3 重さ 228.71		刃部欠損 肩サザイドに両面からの敲打或形有り
28-2	砾石	縦 4.7 橫 4.3 厚さ 0.8 重さ 26.82		表面に使用痕残る
28-3	砾石	縦 4.4 橫 3.1 厚さ 1.0 重さ 23.0		表面に使用痕残る
30-3	石核	縦 3.7 橫 2.3 厚さ 2.1 重さ 29.13	玉髓	
31-1	禮石	縦 6.1 橫 4.6 厚さ 4.1 重さ 155.11		表面は滑らかで、両端に敲打の使用痕残る 一部赤色顔料付着
37-1	玉砾石	縦 12.7 橫 2.9 厚さ 1.9 重さ 128.10	珪化木	4面使用痕あり・腹土出土
37-2	剥片	縦 2.0 橫 1.2 厚さ 0.7 重さ 2.0	黒曜石	二次加工有り・腹土出土
42-8	石核	縦 7.9 橫 3.0 厚さ 3.3 重さ 55.85	グリーンタフ	擦り切り直し条有り
46-2	菅玉	縦 2.8 直径 0.7 重さ 1.77	グリーンタフ	未成品
51-14	剥片	縦 1.5 橫 1.3 厚さ 0.4 重さ 0.85	ぬのう	
51-15	剥片	縦 1.3 橫 1.6 厚さ 0.4 重さ 0.71	(ガラス質)	
54-1	砾石	縦 11.7 橫 8.8 厚さ 1.1～2.4 重さ 326.86		使用痕残る
54-2	砾石	縦 4.8 橫 2.2 厚さ 0.7 重さ 115.9	砂岩か	使用痕残る
54-3	石器	縦 4.7 橫 3.0 厚さ 1.8 重さ 16.2		
54-4	剥片	縦 4.7 橫 3.9 厚さ 1.8 重さ 30.50	ぬのう	
54-5	剥片	縦 3.3 橫 2.9 厚さ 0.8 重さ 12.0	玉髓	
54-6	石器	縦 2.1 橫 2.4 厚さ 1.2 重さ 8.27	玉髓	
54-7	剥片	縦 3.0 橫 1.9 厚さ 0.7 重さ 4.03	玉髓	
54-8	剥片	縦 2.3 橫 1.4 厚さ 1.1 重さ 3.59	黒曜石	
54-9	剥片	縦 3.0 橫 1.4 厚さ 0.6 重さ 1.90	黒曜石	
59-7	剥片	縦 3.0 橫 2.2 厚さ 0.5 重さ 4.00	ぬのう	

金属製品

辨認番号	種 類	形 状	材 質	法 量 (cm・g)	備 考
18-2	鎌首	複合	青銅製	長さ 3.5 大頭径 1.0 小頭径 1.0 重さ 6.62	

写 真 図 版



1 調査前遠景（東から）



2 調査前近景（東から）

図版 2



1 A 区完掘状況（南西から）



2 B 区完掘状況（西から）



1 B 区完掘状況(南西から)



2 B 区完掘状況(東から)

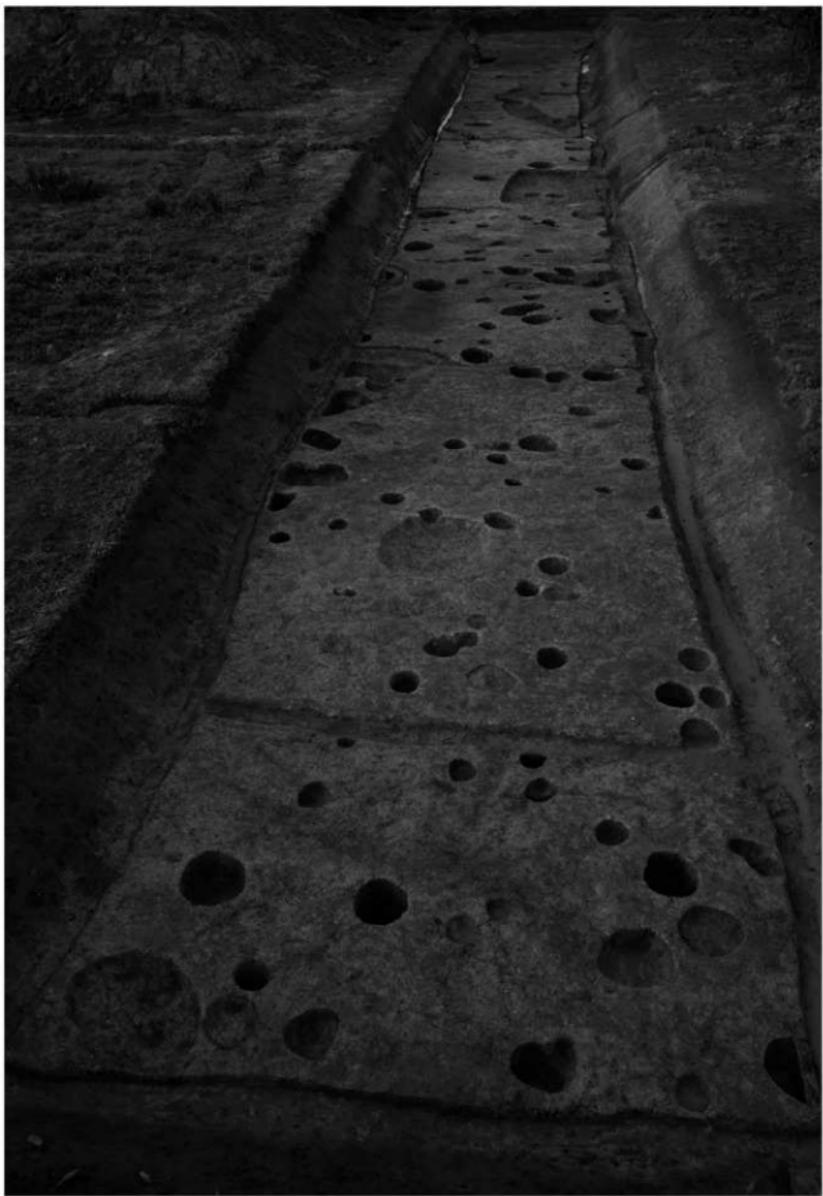


3 D 区完掘状況(西から)

図版 4



C 区完掘状況(北から)



C 区完掘状況(南から)

図版 6



1 D 区 (B - B' の南端、北から)



2 D 区 (B - B' の中央、北から)



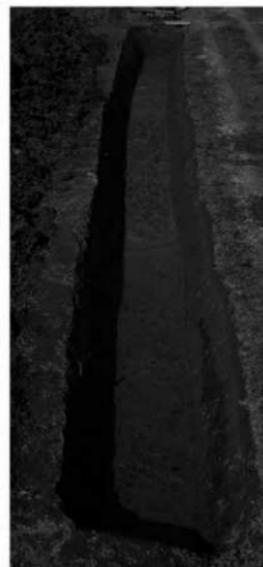
3 D 区 (B - B' の北端、北から)



4 D 区 (C - C'、北から)



5 D 区 (D - D'、北から)



6 D 区 (E - A'、北から)



1 SI02 遺物出土状況(北西から)



2 SI03 遺物出土状況(西から)



3 SX01 完掘状況(東から)



4 SX02 遺物出土状況(南から)



5 SD06・SD07 完掘状況(東から)

図版 8



1 SI04 と SI05 と周辺の完掘状況(東から)



2 SI04 完掘状況(東から)



1 SI05 完掘状況(東から)



2 SK56 完掘状況(東から)

図版 10



1 SK59 完掘状況(南東から)



2 SK59 遺物出土状況(南から)

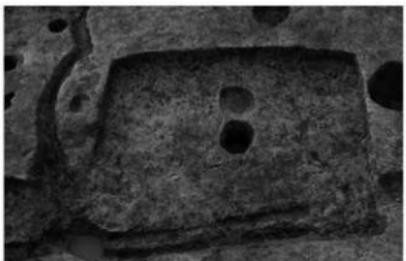


3 SK60 遺物出土状況(南から)

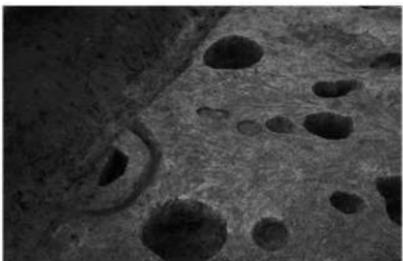


4 SD10 完掘状況(南から)

図版 11



1 SX04 完掘状況(東から)



2 SA03 梱出状況(南東から)



3 SD11 遺物出土状況(西から)



4 SX05 遺物出土状況(西から)



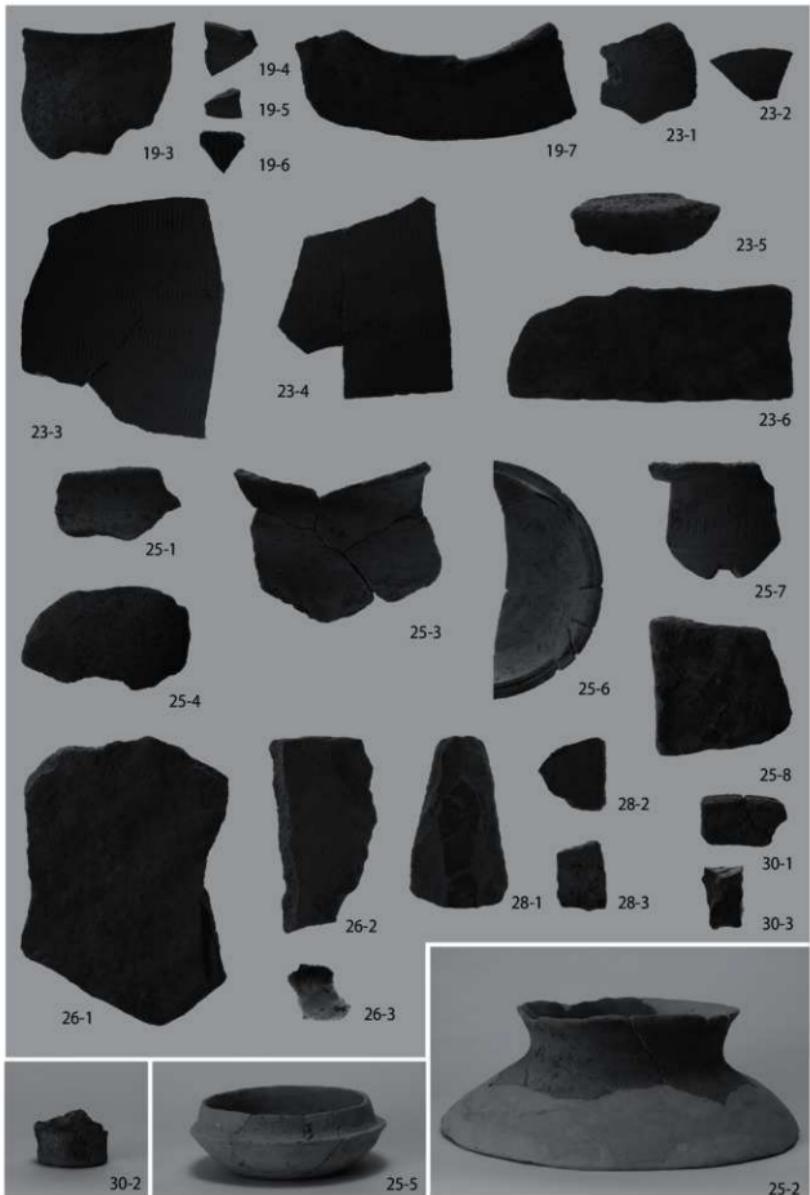
5 C区B-B' 土層(南東から)

図版 12



遺物写真①

図版 13



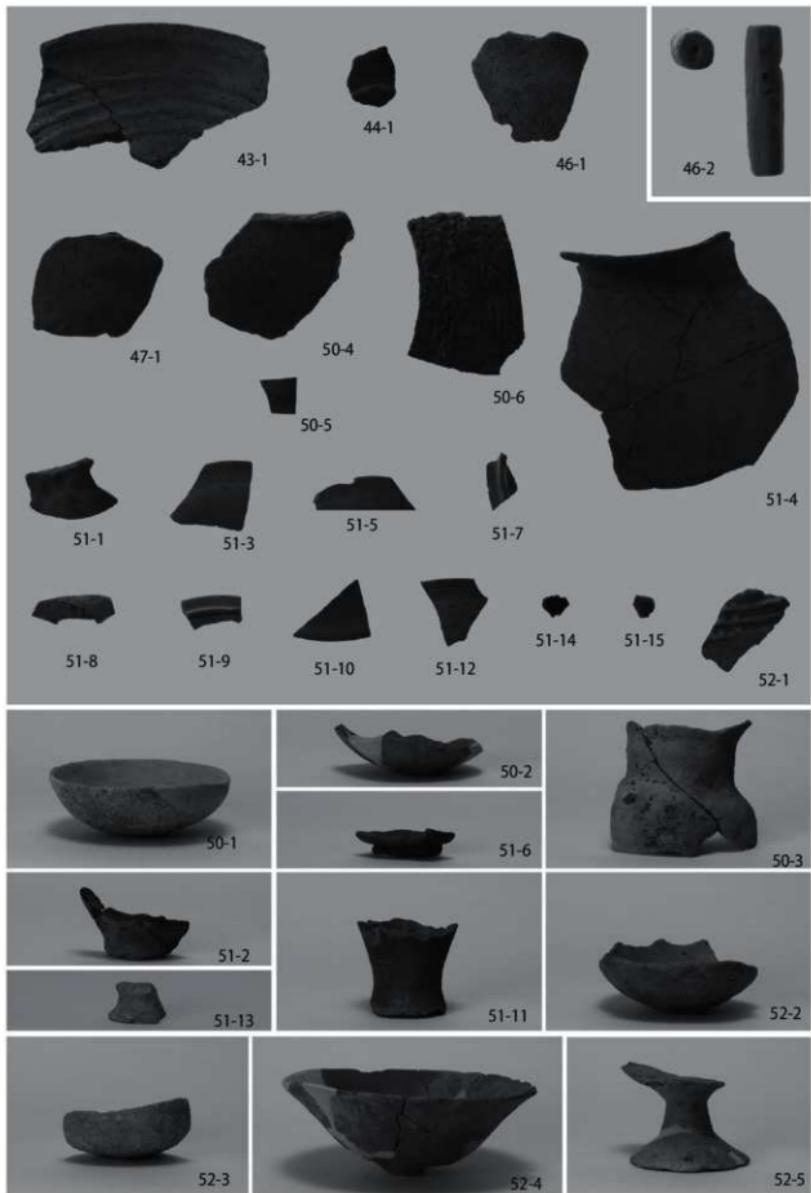
遺物写真②

図版 14



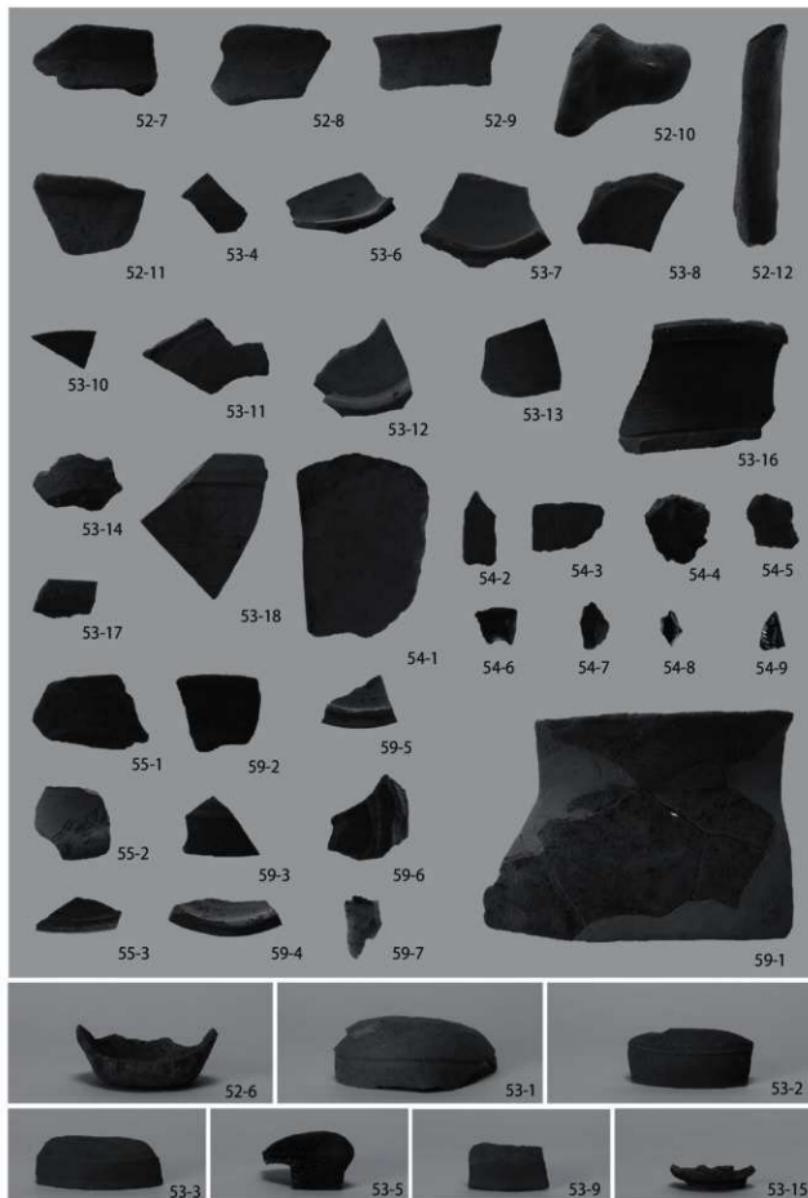
遺物写真③

図版 15



遺物写真④

図版 16



遺物写真⑤

報告書抄録

ふりがな	おおばこはらいせきに						
書名	大庭小原遺跡Ⅱ						
副書名	(仮称) アークタウン大庭造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第201集						
編著者名	徳永桃代・江川幸子						
編集機関 所在地	松江市役所 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284						
	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 埋蔵文化財課 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月	2021(令和3)年8月						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	調査期間	調査面積	調査原因	
大庭小原遺跡	松江市 大庭町 小原 1102-2外	32201	D-1138	35° 43' 47"	2020.11.06 ~ 2021.03.08	1,562.3m ²	
				133° 07' 88"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大庭小原遺跡	集落跡	弥生時代 ~ 奈良平安時代	竪穴建物跡 袋状貯蔵穴 溝 柱列	弥生土器 土師器 須恵器	弥生時代の玉作関連遺物が出土し、古墳時代の工房と思われる炉を持つ竪穴建物が検出された。		
要約	大庭小原遺跡では、まず弥生時代中期に集落が造られた。そこではグリーンタフを石材として玉作が行われていた。後期に入ると集落は一旦途切れるが、古墳時代前期には再び集落が営まれている。古墳時代前期後半～古墳時代中期前半にはほとんど遺物が見られなくなり、古墳時代中期末頃には再び遺物量が多くなっている。遺構や遺物から、本遺跡では弥生時代中期から断続的に集落が営まれてきたことが明らかになった。						

松江市文化財調査報告書 第201集

(仮称)アーカタウン大庭造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

大庭小原遺跡Ⅱ

令和3(2021)年8月

編集・発行 島根県松江市

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財团

印 刷 有限会社 松陽印刷所

島根県松江市学園南2-3-11